大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

XIII

2007年度大阪市長吉東部地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2009.12

財団法人　大阪市文化財協会

長原遺跡東部地区発掘調査報告　XIII

本書は長原遺跡東部地区にて2007年度に行った発掘調査の成果を収録する。

調査では、掘立柱建物・土壙など弥生時代中期後半の集落跡を確認することができた。土壙には古墳時代中期のものもある。

奈良時代の自然流路からは土器を始めとする多くの遺物が出土した。なかでも、人面墨画土器やウマ・ウシなどの動物遺体はこれまでの調査でも多く見つかっており、当流路において水辺での祭祀が行われたことを示す。また、和同開珎も１点出土した。

平安時代以降は作土や畦畔が認められることから耕作地として利用されていたことが判明した。

なお、遺構埋土や杭に水平断層が見られるなど、地震の痕跡も確認され、これらの分析もあわせ行っている。

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

XIII

2007年度大阪市長吉東部地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2009.12

財団法人　大阪市文化財協会

奈良時代の流路出土遺物

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

XIII

2007年度大阪市長吉東部地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2009.12

財団法人　大阪市文化財協会

序　　文

本書は、2007年度に行った大阪市長吉東部地区土地区画整理事業に伴う発掘調査成果報告書であり、当協会が刊行してきた『長原遺跡東部地区発掘調査報告』シリーズの13冊目に当るものである。

長原遺跡の調査が1978年に開始されて以来、30年以上が経過した。この間の発掘調査の蓄積によって、旧石器時代の遺物・埋没古墳群・古代の水田跡など全国的に著名な遺跡として長原遺跡は認知されるようになった。また、地中深くに遺跡が埋没し、不明な点が多かった長原遺跡東北地区でも当該事業に伴う発掘調査が開始されて以来、多くの成果が得られ、遺跡の具体像がより鮮明に描けるようになった。

本書で報告する調査においても弥生時代の建物跡をはじめ、祭祀遺物が出土した奈良時代の流路など、多くの知見が得られ、調査研究をさらに進展させる重要な資料となろう。こうした成果を公表し、共有の財産とするため、本書の刊行を行うものである。

最後に、発掘調査ならびに報告書刊行に当ってご尽力をいただいた大阪市都市整備局・地元住民の方々ならびに関係者各位に心より感謝の意を表したい。

2009年12月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長　脇　田　　修

例　　言

一、本書は財団法人大阪市文化財協会が2007年度に実施した、大阪市都市整備局長吉東部土地区画整理事務所による平野区長吉出戸８丁目の土地区画整理事業に伴う発掘調査（NG07－１次、NG は長原遺跡を示す）の報告書である。

一、発掘調査と遺物整理・報告書作成の費用は、大阪市都市整備局の負担による。

一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会文化財研究部次長南秀雄の指揮のもと、同部長原調査事務所長（当時）積山洋が主として担当した。調査の期間・面積は第Ⅰ章に記す。

一、本書の執筆および編集は、南・同部長原調査事務所長趙哲済の指揮のもと、主として同部学芸員平田洋司が行った。第Ⅲ章第２節の執筆は趙による。本書の用字用語や体裁などの調整は、同部技術管理担当課長田中清美、事業企画担当課長代理清水和明、事業担当係長佐藤隆、学芸員小倉徹也らの報告書校正委員が行った。

一、遺構写真は調査担当者が撮影した。遺物写真の撮影は、西大寺フォト杉本和樹氏に委託した。

一、基準点測量を株式会社パスコに委託した。

一、第Ⅲ章第２節における水平断層の微細構造観察用試料の樹脂含浸と研磨は、株式会社ニチカに委託した。

一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料はすべて当協会が保管している。

一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には、補助員諸氏から多くの協力を得た。深謝の意を表したい。

凡　　例

1．本書で用いた層位学・堆積学的用語、および断面図に示した岩相の基本パターンは、[趙哲済1995]に準じる。

2．本書における地層名は第〇層と表記する。また、各遺構埋土の地層名は「第」をとって〇層とのみ表記し、調査地の地層名と区別する。

3．遺構名の表記は、竪穴建物・掘立柱建物(SB)、溝(SD)、土壙(SK)、柱穴(SP)、自然流路(NR)の分類記号の後に、番号を付している。この番号はまず遺跡における層序番号を冠し、その後に遺構の分類別に各層序ごと1からの通し番号を付けた(例：第12層上面の土壙SK1201)。

4．本書における遺物番号は、1からの通し番号を付した。

5．本書で用いた座標値は世界測地系に基づく。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP＋〇mと記した。

6．本書で用いた地層の土色および土器の色調は[小山正忠・竹原秀雄1996]に拠った。

7．各遺物の記述方法、分類、年代観などについては、以下の文献に従っている。弥生土器について：[寺沢薫・森井貞雄1989]、古墳時代の須恵器について：[田辺昭三1981]、飛鳥時代の土器について：[古代の土器研究会1992]、平安時代の土器について：[佐藤隆1992]。

本 文 目 次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章　遺跡の環境と調査の経緯 …… 1
第１節　長原遺跡の立地と既往の調査 …… 1
１)長原遺跡の地理的環境と調査地 …… 1
２)既往の調査 …… 1
第２節　調査の経過と概要 …… 8

第Ⅱ章　調査の結果 …… 9
第１節　層序 …… 9
第２節　弥生～古墳時代の遺構と遺物 …… 15
１)第12層の遺構と遺物 …… 15
ⅰ)掘立柱建物・柱穴・小穴　ⅱ)土壙
２)古墳時代以前の土地利用について …… 21
第３節　奈良時代の遺構と遺物 …… 23
１)第11層の遺構と遺物 …… 23
ⅰ)自然流路
２)奈良時代の調査地のようす …… 32
第４節　平安時代以降の遺構と遺物 …… 33
１)第10層出土遺物 …… 33
２)第９層下面の遺構 …… 33
３)第９層出土遺物 …… 33
４)第４層上面の遺構 …… 33
５)第２層出土の遺物 …… 36
６)平安時代以降の調査地のようす …… 36

第Ⅲ章　遺構と遺物の検討 …… 37
第１節　調査地周辺の弥生～奈良時代のようす …… 37
１)はじめに …… 37

2)弥生時代中期 ……37
3)弥生時代後期 ……38
4)古墳時代中期 ……38
5)古墳時代後期～飛鳥時代 ……42
6)奈良時代 ……42
第 2 節 地層の水平断層について ……45
1)水平断層の形態 ……45
2)水平断層の変位量 ……45
3)水平断層の微細変形構造 ……47
4)水平断層の成因と時期 ……50

第Ⅳ章 調査成果のまとめ …… 51

引用・参考文献…… 53

あとがき・索引

英文目次

図 版 目 次

1　地層断面
　上：南壁12層以下(北西から)
　中：南壁11層(北西から)
　下：南壁10層以上(北西から)
2　古墳時代以前の遺構(一)
　上：第14層上面東半部検出状況(東から)
　中：第13層上面検出状況(東から)
　下：第13層上面踏込み検出状況(東から)
3　古墳時代以前の遺構(二)
　上：第12層上面検出状況(西から)
　中：第12層上面西半検出状況(南から)
　下：第12層上面東半検出状況(南から)
4　古墳時代以前の遺構(三)
　上：SB1201周辺(北から)
　下：SB1201北側柱列、地震による水平断層(南東から)
5　古墳時代以前の遺構(四)
　上：SB1202検出状況(南から)
　下：SB1202の柱穴SP1209、地震による水平断層(南から)
6　古墳時代以前の遺構(五)
　上：SK1201（北西から）
　中：SK1202（東から）
　下：SK1203（南から）
7　奈良時代の遺構(一)
　上：NR1101（西から）
　下：NR1101西半(南から)
8　奈良時代の遺構(二)
　上：NR1101内杭 1（南から）
　中：NR1101内杭 1 の地震による水平断層(南から)
　下：NR1101内杭 2（南から）
9　奈良時代の遺構(三)
　上：NR1101和同開珎出土状況
　中：NR1101土器出土状況(北東から)
　下：NR1101土器出土状況(北から)
10　奈良時代の遺構(四)
　上：NR1101土器出土状況(南から)
　中：NR1101土器出土状況(南から)
　下：NR1101ウマ頭骨(西から)
11　平安時代以降の遺構(一)
　上：第11層上面検出状況(西から)
　中：第 9 層下面検出状況(南から)
　下：第 9 層下面の高まり(南西から)
12　平安時代以降の遺構(二)
　上：第 9 層内遺物出土状況(南から)
　中：第 4 層上面検出状況(南西から)
　下：第 3 層上面SD301断面(西から)
13　弥生～古墳時代出土遺物・NR1101出土遺物(一)
14　NR1101出土遺物(二)
15　NR1101出土遺物(三)
16　NR1101出土遺物(四)
17　NR1101出土遺物(五)・平安時代以降の遺物

挿　図　目　次

図１　長原遺跡の位置 …… 1
図２　周辺の遺跡と調査地 …… 2
図３　長原遺跡東北地区における既住の調査 …… 3
図４　調査区位置図 …… 8
図５　地層断面図 …… 10
図６　第12層中の遺構 …… 16
図７　SB1201平面・断面図 …… 17
図８　SB1202平面・断面図 …… 18
図９　SB1202出土遺物実測図 …… 19
図10　SK1201出土遺物実測図 …… 19
図11　SK1201～1204平面・断面図 …… 20
図12　SK1202出土遺物実測図 …… 21
図13　SK1203出土遺物実測図 …… 21
図14　NR1101 …… 24
図15　杭１断面図 …… 25
図16　NR1101出土遺物実測図（１） …… 26
図17　NR1101出土遺物実測図（２） …… 27
図18　NR1101出土遺物実測図（３） …… 28
図19　NR1101出土遺物実測図（４） …… 29
図20　NR1101出土遺物実測図（５） …… 30
図21　NR1101出土銅銭拓影 …… 31
図22　第９層下面の遺構 …… 34
図23　第４層上面の遺構 …… 35
図24　各層出土の遺物実測図 …… 36
図25　弥生時代中期の長原遺跡東北地区西半の遺構分布図 …… 39
図26　弥生時代後期の長原遺跡東北地区西半の遺構分布図 …… 40
図27　古墳時代中期の長原遺跡東北地区西半の遺構分布図 …… 41
図28　奈良時代の長原遺跡東北地区西半の遺構分布図 …… 43
図29　地震による水平断層の向きと距離 …… 46
図30　水平断層の微細変形構造 …… 48
図31　NG05－３・07－１次調査における水平断層による地層の変位 …… 49

表　目　次

表１　長原遺跡における既往の調査一覧（１） …… 4
表２　長原遺跡における既往の調査一覧（２） …… 5
表３　本書で報告する発掘調査 …… 8
表４　長原東北地区層序表 …… 12
表５　長原遺跡の標準層序 …… 13

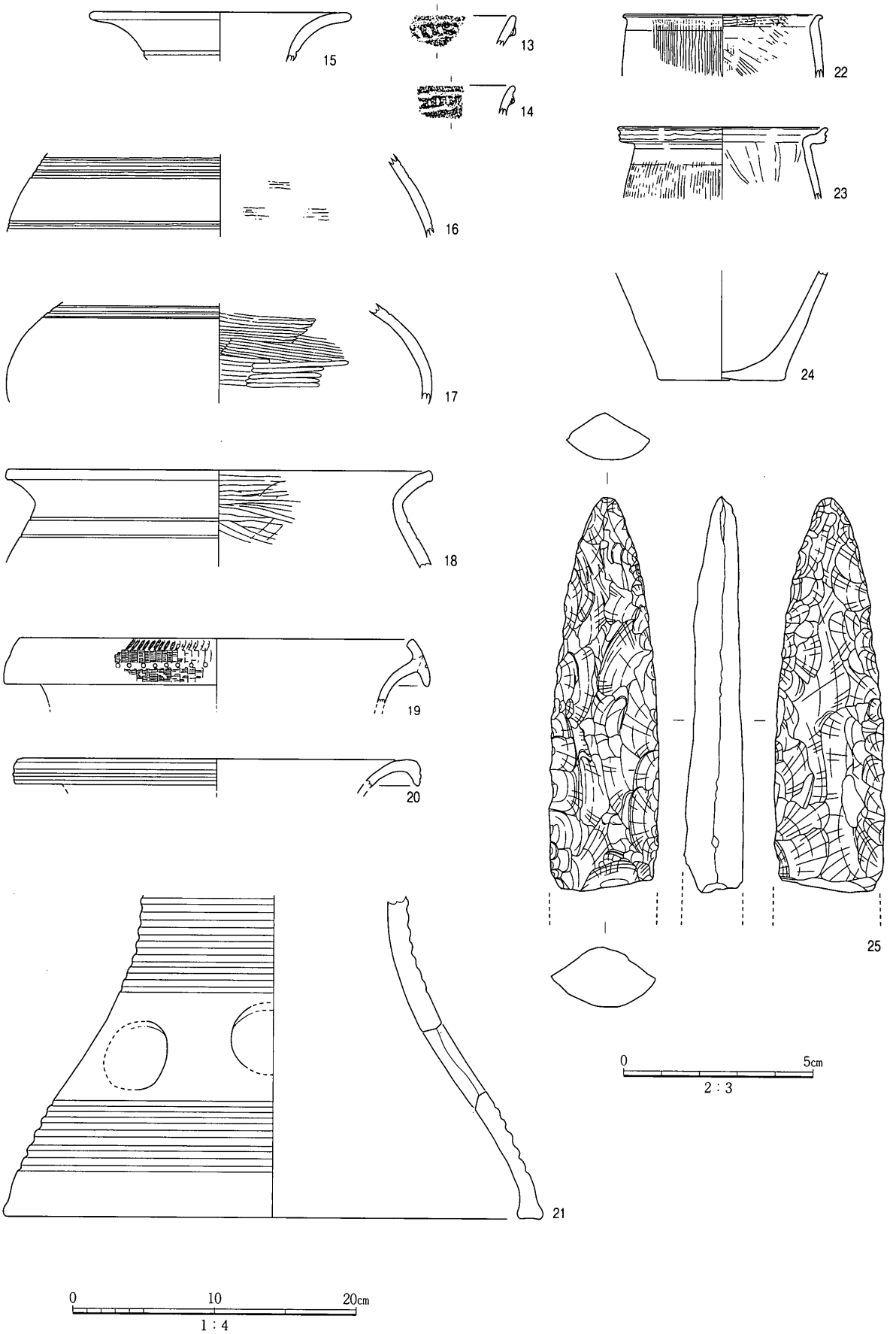
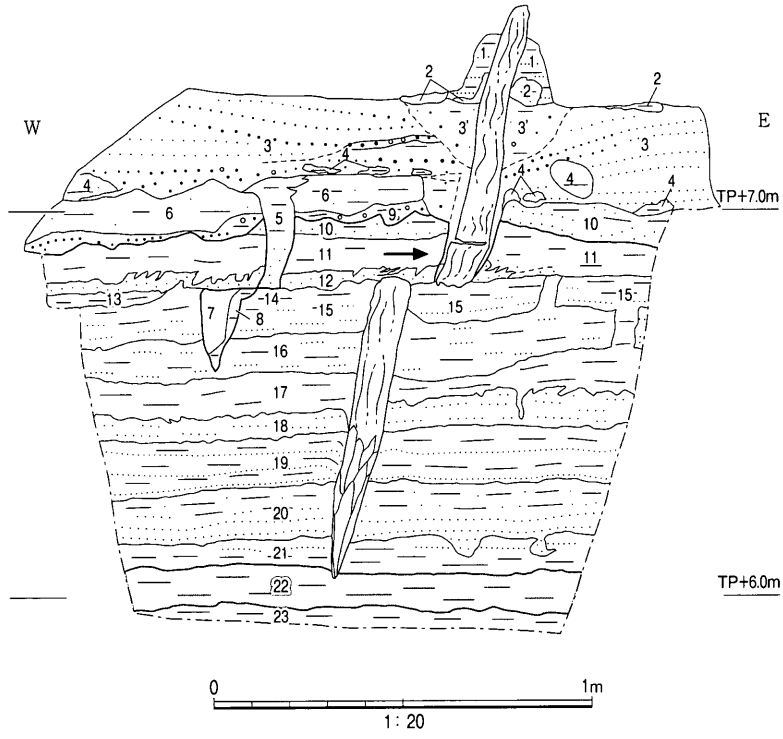


図16　NR1101出土遺物実測図(1)



（第11層）
1：浅黄色砂・シルトの互層
2：オリーブ黒色砂（シルトの偽礫含む）
3：浅黄～オリーブ黄色砂・礫（シルトの偽礫含む）
4：暗緑灰色砂質シルト（偽礫含む）
5：暗緑灰色粘土質シルト（軟弱）
6：青灰色砂質シルト（4の母材か）
7：オリーブ色中粒～細粒砂
8：暗緑灰色粘土質シルト
9：オリーブ黒色礫・シルト
10：暗緑灰色シルト～細粒砂（上方細粒化する）

（第13層）
11：暗緑灰色シルト
12：暗オリーブ灰色細粒～極細粒砂
13：暗緑灰色シルト
14：オリーブ灰色細粒砂
15：暗緑灰色粘土質シルト～極細粒砂
（上方細粒化する）
16：暗緑灰色シルト～細粒砂
17：暗緑灰色粘土質シルト
18：暗オリーブ灰色細粒砂
19：暗緑灰色粘土～極細粒砂
20：暗オリーブ灰色シルト～細粒砂
21：灰色粘土（わずかに細粒砂のラミナ）

（第14層）
22：オリーブ黒色シルト（暗色帯）

（第15層）
23：灰色シルト

図15　杭1断面図

付着が認められる。

25はサヌカイト製の石槍である。埋土最下部から出土した。両面から調整を行い、基部付近で折れている。弥生時代中期のものであろう。

26～46は須恵器である。29・45は第11b層、33は第11b層より下位、27・31は第11c層、26・34・35・42～44は第11d層、28・30・32・36・38～41・46は第11d～11e層、37は第11e層からそれぞれ出土した。

26～31・34・37～41は古墳時代のものである。26・34は甕で、26は口縁端部直下と頸部に突帯が、突帯間には2段の櫛描き波状文が施されている。26はTK216型式、34はTK47～MT15型式であろう。27は器台で2条の突帯上位に波状文が施されている。37は壺で口縁端部は丸くおさめる。口縁部から頸部には突帯を挟んで2段の櫛描き波状文が施されている。TK208型式頃のものであろう。28・29・38・39は脚台の付く壺で、直接接合しないが、同一個体の可能性が高い。低い突帯で文様帯が区分され、上から2帯の波状文、列点文、波状文、列点文が施され、その下位には鋸歯文の可能性がある沈線による文様が施されているが、詳細は明らかでない。いわゆる初期須恵器の範疇におさまるものでTK73型式と考えられる。40・41は蓋である。40は口径が大きく、口縁部と天井部とは凹線状のくぼみによって区切られている。TK10型式のものであろう。41は天井部は丸い。TK73型式のものであろう。30・31は高杯である。30は脚部である。脚端部は折り返されて肥厚し、三角形のスカシ孔がある。31も脚部で裾部への移行部に幅広の突帯を巡らせる。初期須恵器の範疇でとらえられよう。

32・33・35・36・42～46は飛鳥～奈良時代のものである。32は短頸壺である。33・34は甕で、33は口縁部が外方に折り返されている。34は口縁部が肥厚し、端部を面取る。35・36は壺で、36は頸部に2条の沈線と、体部最大径付近に2条の沈線が施されている。42～44は杯身で、42は杯H、43は杯G、

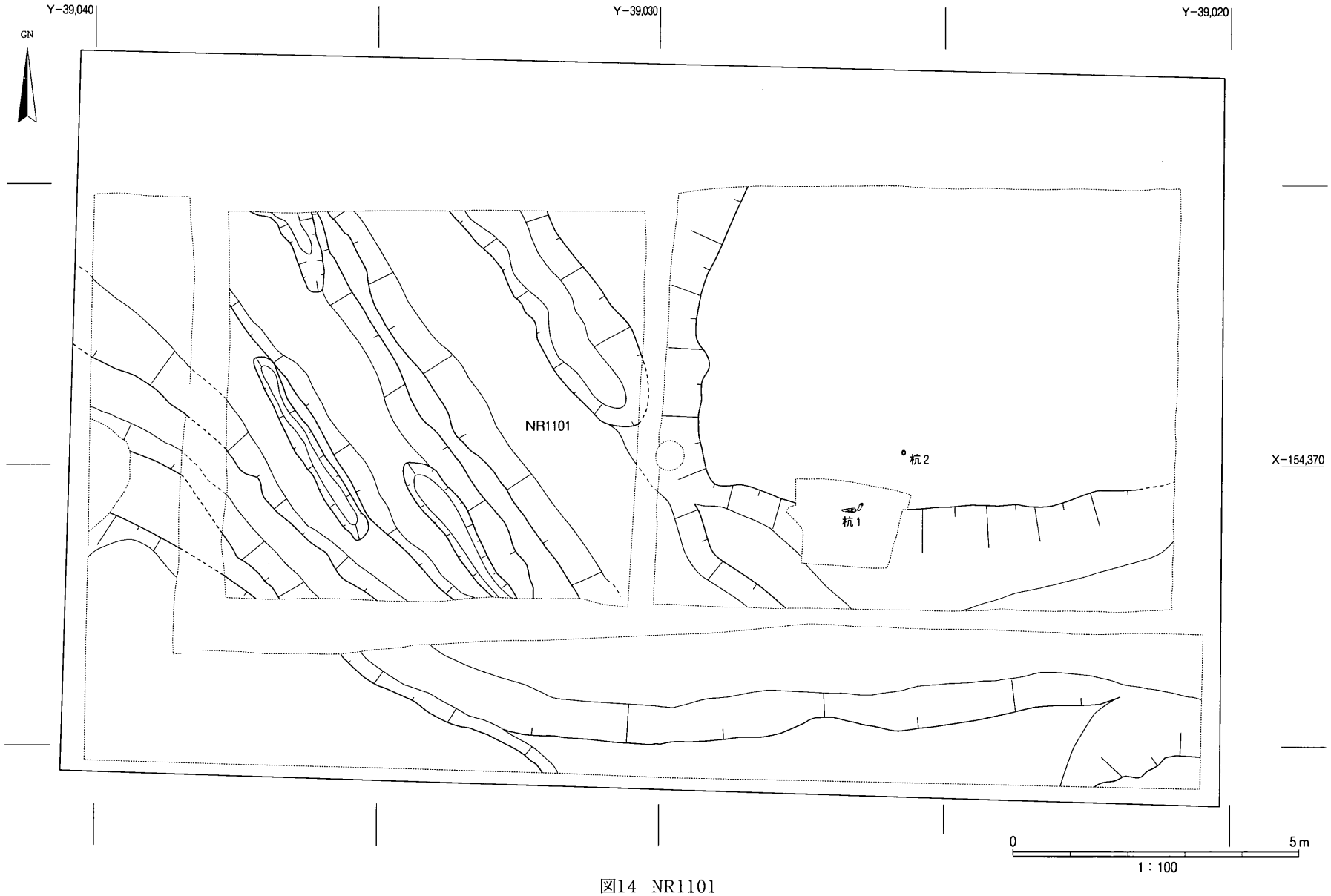


図14 NR1101

第３節　奈良時代の遺構と遺物

１）第11層の遺構と遺物

遺構ではないが、第12層上面で検出した第11層を埋土とする自然流路NR1101がある。

ｉ）自然流路（図14～21、巻首図版、図版７～10、図版13～17）

NR1101　調査地の全域を覆う自然流路である。東からやや南に蛇行し、その後、北西方向に流れているが、流路の肩部を検出していないため、規模や正確な方向については明らかでない。深さは第11層のみを埋土とすると1.2mある。埋土は、部分的にシルトを含む粗粒砂および細礫など粗粒な物質が主体となっており、比較的短期間に埋没したものと推定できる。調査では、埋土である第11層を第11a～11e層に区分した。基本的に埋土は粗粒砂～細礫（第11a・11c・11e層）と黒色シルトを介在する粗粒砂～細礫（第11b・11d層）の互層となっている。第11e層は最下部に部分的に遺存するのみである。本流路はこれまでの調査でも確認されており、蛇行しつつ西流していたことが明らかとなっている。また、本流路と重なって古墳～飛鳥時代の流路も検出されているが、後述のように今回の流路は最下部まで奈良時代の遺物が含まれることから、水流によって失われたと考えられる。

本流路内からは杭が２本検出された。規則性は見出せないが護岸のために打設されたのであろう。地震によって杭１は第13層内で、杭２は第11層内で水平方向に分断されていた。これらについては第Ⅲ章第２節で詳細を記す。

出土遺物には縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器・埴輪・石製品・銅銭・ウマやウシなどの動物遺体・木質遺物などがある。遺物の出土量については、今回の調査でもっとも多く出土した。各層において出土遺物の傾向に差が認められなかったことから、一括して記すこととする。

13・14は縄文土器である。第11d～11e層から出土した。深鉢片で口縁端部よりやや下がった位置に刻み目突帯が貼付けられている。角閃石を含む生駒西麓産の胎土である。滋賀里Ⅳ式のものであろう。

15～24は弥生土器である。20は第11b層、15～17は第11d層、18・19・21・24は第11d～11e層、22・23は第11e層から出土した。

15～18は河内Ｉ様式に位置づけられる。15～17は壺である。15は口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめる。16・17は体部片で、16の体部にはヘラ描き沈線による文様帯が２段認められる。17は体部の張る器形で、体部上半に３条以上のヘラ描き沈線が施されている。18は甕である。頸部に２条のヘラ描き沈線が施されている。

19～24は河内Ⅳ様式に位置づけられる。19・20は広口壺である。19の口縁は上下方に拡張し、端部には櫛描き簾状文と列点文が配されている。20は口縁端部は下方に拡張し、凹線が施される。いずれも角閃石を含む生駒西麓産の胎土である。21は器台で裾部に円形のスカシ孔と多条の凹線が施されている。22～24は甕である。22は口縁部が短く屈曲し、内外面ともにハケメ調整が施されている。23は口縁部は上方に拡張し、端部には凹線が施される。24は底部で内面には内容物と推定される炭化物の

また、北側のNG06－３・４次調査では竪穴建物のほか土壙・溝など集落の存在を示す遺構が見つかっている[大阪市文化財協会2008a]。さらに、東のNG02－１・04－３次調査では畑の畝間と考えられる小溝が多く確認されている[大阪市文化財協会2005a・2007]。これらのことから今回の調査地は集落もしくは生産域であったと考えられるが、遺構が希薄であることを積極的に評価するならば、耕作域であった可能性が高いであろう。

0.2mで、埋土はSK1202と同じくオリーブ黒色シルトである。出土遺物の多くは弥生土器であるが、少量ながら土師器片・製塩土器片を含むこと、埋土がSK1202と同じであることから、古墳時代中期の遺構と考えられる。

サヌカイト製の凹基無茎式石鏃8が出土した。

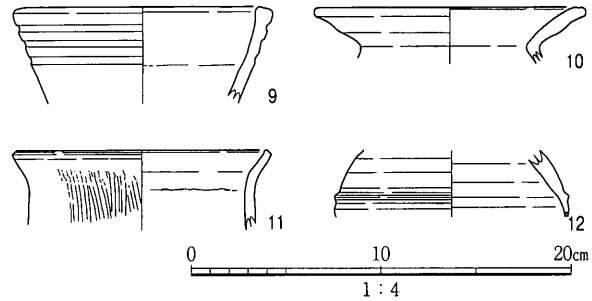


図12　SK1202出土遺物実測図

SK1204(図11)　調査地東端で検出した土壙である。調査区外に続くため正確な形状は不明であるが、長さ1.7m、深さ0.1m以上で、緩やかに下がっている。埋土は灰色シルトである。遺物は出土しなかった。

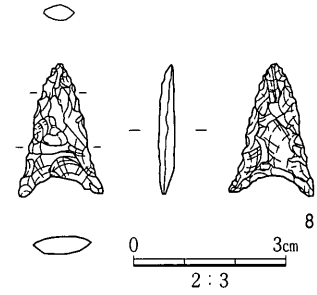


図13　SK1203出土遺物実測図

2)古墳時代以前の土地利用について

弥生時代中期よりも古い時期については、土器細片が1点出土したのみであり、状況は不明とせざるをえない。ただし、後述の奈良時代の自然流路や近隣の調査地において縄文～弥生時代前期の土器が出土していることから、周辺に集落が存在した可能性は高い。

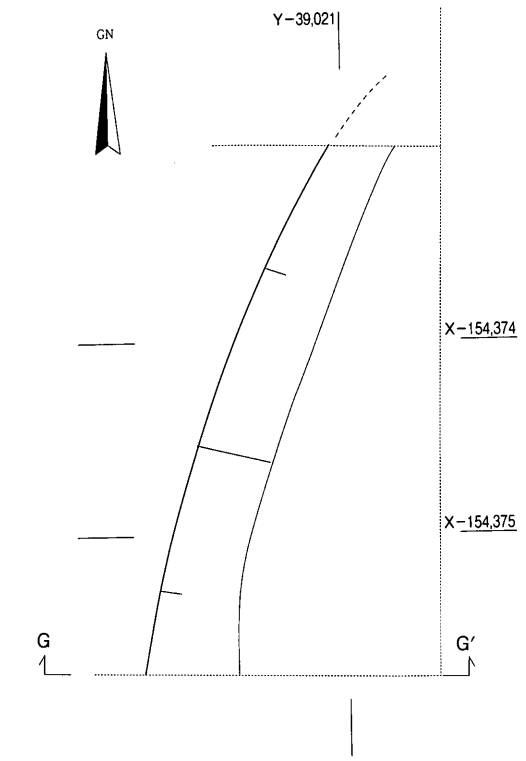
第12層中では弥生時代中期後半と古墳時代中期の遺構を検出した。

弥生時代中期後半の遺構としては掘立柱建物2棟のほかに土壙がある。また、建物としては復元できなかったが、多数の柱穴があることから調査地周辺は居住域として利用されていたことが判明した。同時期の居住域は東のNG02－1[大阪市文化財協会2005a]・04－3次調査[大阪市文化財協会2007]や西の城山その2地区[大阪文化財センター1986b]などにおいても検出されている。NG04－3次調査では竪穴建物が、城山その2地区では掘立柱建物がそれぞれ確認されている。城山その2地区の掘立柱建物は梁間が桁間に対して長く、束柱をもたない。後世の削平を考慮にいれる必要はあるものの、今回検出した掘立柱建物と共通する特徴であることは、集落の拡がりや集団の移動を示すものとして注目されよう。

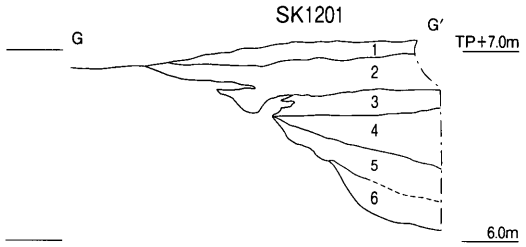
また、中期後半の方形周溝墓は北のNG03－5次調査やNG06－3次調査で確認されており[大阪市文化財協会2008b]、居住域の北側に墓域が近接して存在したものと推定できよう。

弥生時代後期の遺構は今回の調査では確認できなかったが、北側のNG06－3次調査で竪穴建物が確認されている[大阪市文化財協会2008a]。また、西隣で2008年度に行われたNG08－3次調査でも竪穴建物のほか、土壙・溝などが検出されている。これらのことから濃密な分布とはいえないまでも弥生時代後期の集落は近隣に存在しており、今回の調査地では偶然遺存していなかったものと考えられる。

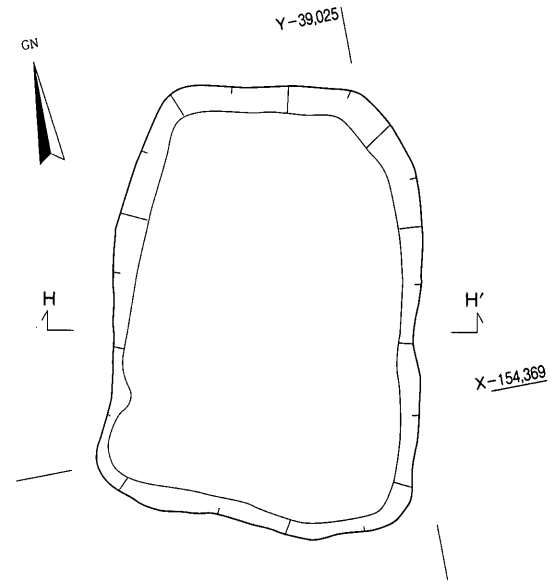
古墳時代の遺構としては土壙が確認できたのみである。調査地の東隣に当るNG05－3次調査では南北方向の自然流路が検出されている[大阪市文化財協会2008b]。この流路は今回調査地にも本来存在したものであるが、後述の奈良時代の流路NR1101の水流によって埋土が失われたと推定される。



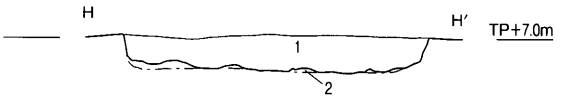
SK1201



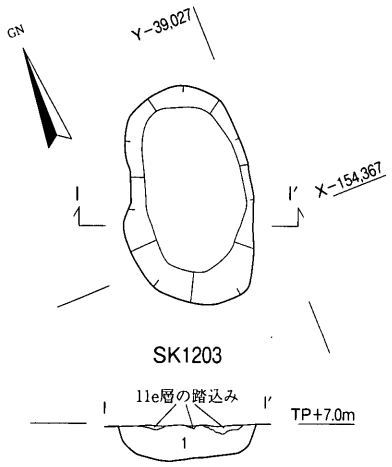
1：黒色シルト（第12層）
2：黒色シルト（12層の偽礫・炭含む）
3：黒色シルト（12層の偽礫・炭含む）
4：オリーブ黒色シルト
5：黒色シルト
6：オリーブ黒色シルト



SK1202

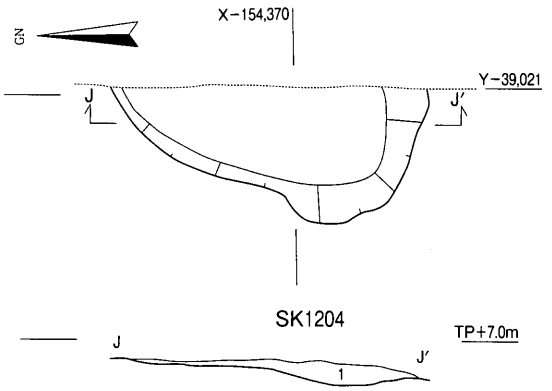


1：オリーブ黒色粘土質シルト
（第12・第13層の指先大の偽礫含む）
2：灰色シルト（第13層）



SK1203

1：オリーブ黒色シルト（第12・第13層の指先大の偽礫含む）



SK1204

1：灰色シルト

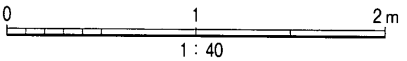


図11　SK1201～1204平面・断面図

文が施されている。角閃石を含む生駒西麓産の胎土である。4・5は高杯である。4は脚部で、脚端部は上方に拡張する。裾部外面にはヘラミガキが施される。5は屈曲する杯部を有する。口縁端部は水平な面をもち、杯部は内面にヘラミガキ調整を施す。外面は磨滅のため不明であるが、本来はヘラミガキ調整があったのであろう。6は鉢で口縁部は外方に折り曲げる。口縁部および体部には櫛描き簾状文が配されている。角閃石を含む生駒西麓産の胎土である。7は台付鉢もしくは台付無頸壺の脚台部である。凹線文が施され、円形のスカシ孔を穿つ。

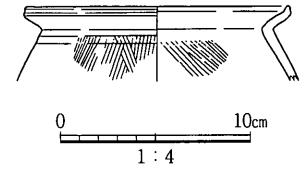


図9　SB1202出土遺物実測図

これらの土器はいずれも河内Ⅳ様式に位置づけられることから、遺構の時期は弥生時代中期後半といえる。

SK1202(図11・12、図版6)　長さ2.3m、幅1.6mの平面形が隅丸方形の土壙である。深さは0.2mで底は平坦である。埋土はオリーブ黒色シルトである。SB1201の柱穴やほかの小穴を切り、これらの遺構よりは後出する。

出土遺物は弥生土器がほとんどであるが、土師器・須恵器・製塩土器も含まれる。

9は弥生土器である。短頸壺で、口縁部外面に3条の凹線文を施す。河内Ⅳ様式のものである。10・11は土師器甕である。10は大きく外方に開く口縁部を有する。11は体部から口縁部にかけての屈曲が弱く、外面はハケメ調整である。12は須恵器蓋である。器高が高く、天井部の丸い形態と考えられる。TK73型式頃のものであろう。

これらの出土遺物から遺構の時期は古墳時代中期、5世紀中葉と考えられる。

SK1203(図11・13、図版6・13)　長さ1.1m、幅0.7mの平面形が隅丸方形の土壙である。深さは

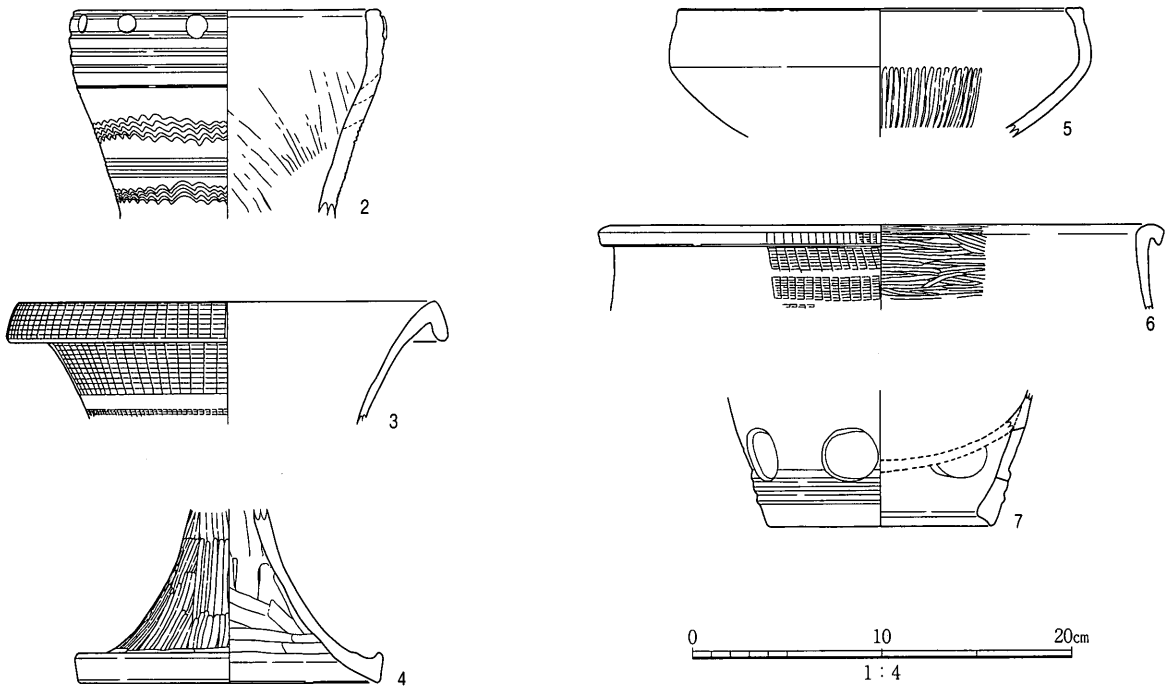


図10　SK1201出土遺物実測図

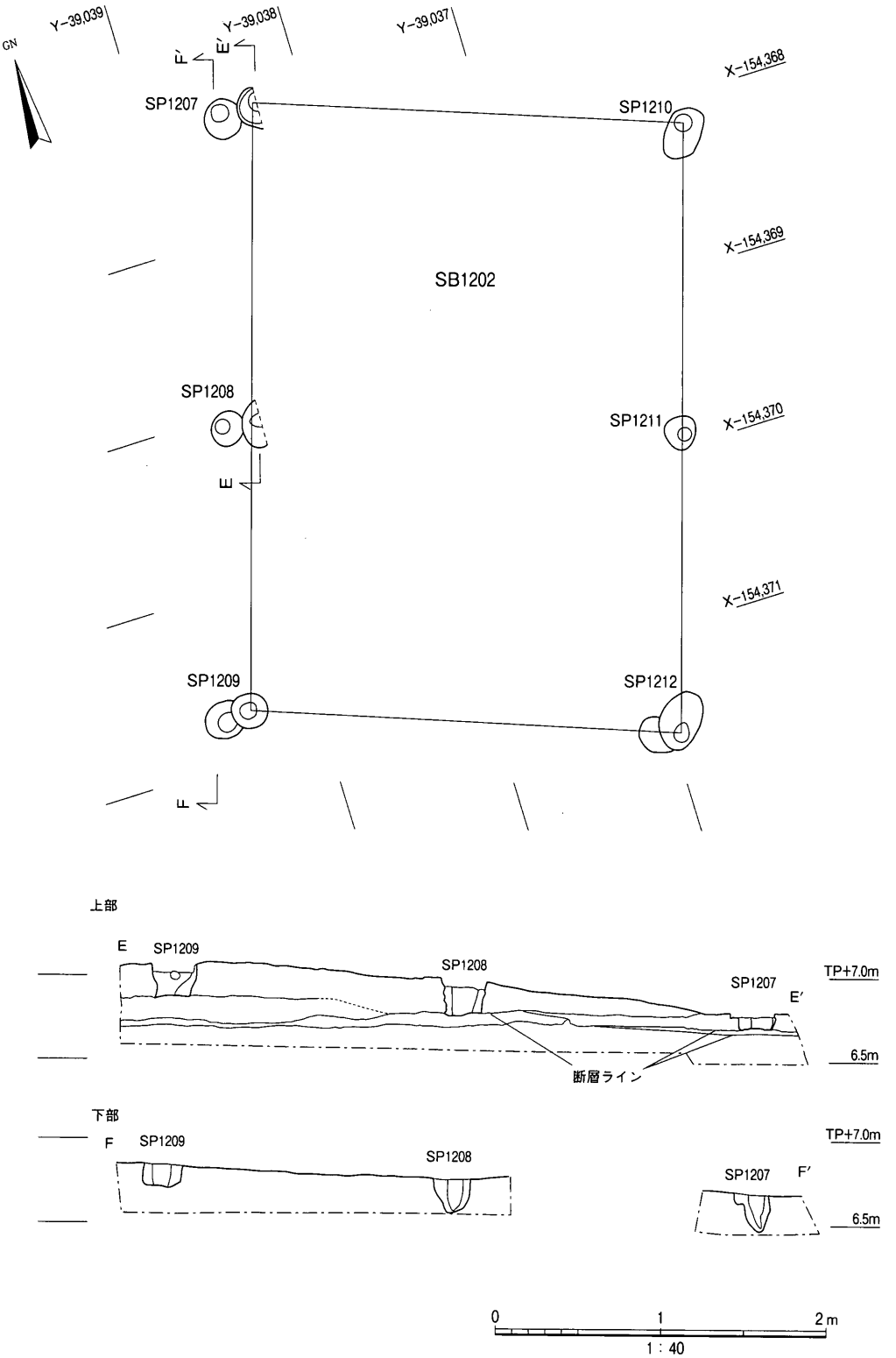


図8　SB1202平面・断面図

を多く含む黒色シルト～粘土質シルトである。

埋土からは、多くの弥生土器が出土した。2は細頸壺である。口縁部には凹線文と円形浮文が施され、端部は水平な面をもつ。頸部には櫛描による波状文と直線文が交互に施されている。角閃石を含む生駒西麓産の胎土である。3は広口壺で、口縁部は下方に拡張する。口縁部および頸部には櫛描き簾状

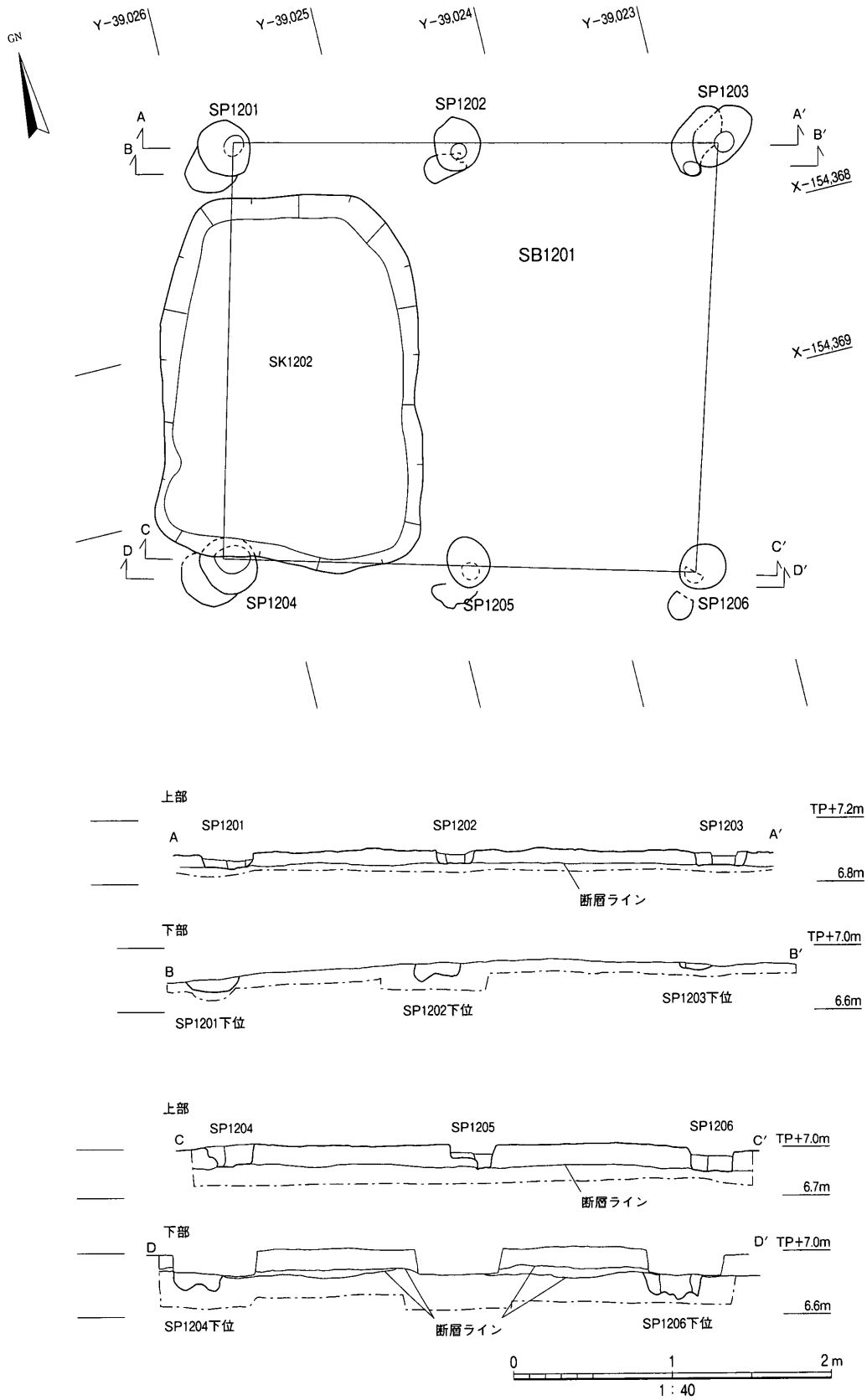


図7　SB1201平面・断面図

Y−39,040
Y−39,030
Y−39,020
GN
X−154,370
SP1207
SP1210
SP1208
SB1202
SP1211
SP1209
SP1212
SK1203
SP1201
SP1202
SP1203
SK1202
SB1201
SP1204
SP1205
SP1206
SK1204
SK1201
0
5m
1：100

図6　第12層中の遺構

第２節　弥生～古墳時代の遺構と遺物

第13層より下位においては遺構は検出されなかった。第14層中にて磨滅した土器片が１点出土したが、細片のため時期などは不明である。今回調査地において遺構が認められるのは、第12層中からである。第12層は後述のNR1101によって大きく削剝を受けており、東北部とわずかに東南隅で遺存するのみで、残りの部分では遺構埋土として遺存する。また、地震によって第12・13層は地層の水平断層が認められ、遺構も上部と下部とがずれた位置で検出されるものがある。ずれの大きさは下部を基準にすると上部は北東に0.3m移動している。

第12層中からは、弥生時代の遺構と古墳時代の遺構とが混在して検出された。遺構には掘立柱建物、柱穴、小穴、土壙などがある。

１)第12層の遺構と遺物

ｉ)掘立柱建物・柱穴・小穴

SB1201(図７、図版４)　調査地東部で検出した掘立柱建物である。SP1201～1206で構成される。桁行２間(3.0～3.1m)、梁行１間(2.6m)である。梁行については、間隔が広いことから本来は間に柱が存在した可能性もある。SP1201～1204については地震による水平断層が認められる。柱穴は直径0.27～0.40mの平面形が円形で、深さは0.15～0.30m遺存している。柱痕跡は確認できたもので直径0.09～0.20mである。

遺物は出土していないが、他の柱穴・小穴からの出土遺物が弥生時代に限られること、同様の形状のSB1202が弥生時代中期後半と考えられることから、弥生時代中期後半の建物と考えられる。

SB1202(図８・９、図版５・13)　調査地西部で検出した。SP1207～1212で構成される。桁行２間(3.5～3.6m)、梁行１間(2.6m)である。梁行については、SB1201同様間隔が広いことから本来は間に柱が存在した可能性もある。SP1207～1209・1212は、地震による水平断層が認められる。柱穴は直径0.20～0.35mの平面形が円形で、深さは0.35～0.45m遺存していた。柱痕跡は確認できたもので、直径0.12～0.15mである。

柱穴からは弥生土器の細片が出土した。１はSP1209から出土した弥生土器甕である。口縁端部は上方に拡張する。内外面ともにハケメ調整が施される。河内Ⅳ様式に位置づけられることから、建物の時期は弥生時代中期後半といえる。

柱穴や小穴は全域でほかにも30基以上確認できたが、建物として復元することはできなかった。遺物を出土したものは少ないが、いずれも弥生土器であり、弥生時代の遺構と考えられる。

ii)土壙

調査地の東半部で４基を確認した。弥生時代のものと古墳時代のものとがある。

SK1201(図10・11、図版６・13)　調査地東南端で検出した。調査区外に続くため正確な形状は不明であるが、幅1.4m以上、深さは0.7m以上ある。溝の一部かもしれない。埋土は第12・13層の偽礫

第10層：灰～暗緑灰色を呈する粘土～粗粒砂混り粘土質シルト層で水成層である。層厚は10～40cmある。2枚に分かれ、その下部層には第11層の砂を含有していた。土師器・須恵器・瓦片などが出土した。出土遺物から奈良時代後半～平安時代前半に位置づけられる。RK4C層、NG4C層に対比される。

第11層：第12層を削込む砂礫層であり、流路NR1101の埋土となる水成層である。部分的にシルトを挟み、最大層厚は120cmに達する。第11層は第11a～11e層に区分した。粗粒砂～細礫からなる第11a・11c・11e層と黒色シルトを介在する粗粒砂～細礫からなる第11b・11d層の互層となっている。第11e層は最下部に部分的に遺存するのみである。縄文土器・弥生土器のほか土師器・須恵器などを多量に含む。奈良時代前半に位置づけられる。本層の上位では地震によるラミナの変形が見られた。RK5層、NG6A層に対比しうる。

第12層：黒色粘土質シルト～粘土層で、明瞭な暗色帯である。第11層に削られた結果、調査区の東北隅と東南隅にのみ厚さ15cm程度残っていた。本層の層中に遺構面があり、須恵器を含む古墳時代中期の遺構と、弥生時代中期の建物群が検出された。弥生土器・土師器・須恵器などが出土した。RK7Av層、NG7B層を下限とし、上限はRK10A層、NG9A層に対比しうる。

第13層：暗オリーブ灰～暗緑灰色を呈する細粒砂～粘土層で、水成層である。8枚以上に細分された。平均層厚は約60cmである。本層中の上部層では地震による水平断層の跡が顕著に見られた。遺物は出土しなかったが、周辺の調査成果から縄文時代後期～弥生時代前期に位置づけられる。RK10A層、NG9A層に対比しうる。

第14層：黒褐色シルト層で、暗色帯である。下半は下位層との変化が漸移的である。層厚は10cm以下である。下半から土器の細片が出土したが、型式等は不明である。また、下半には横大路火山灰層（アカホヤ火山灰）に由来するとみられる褐色ガラスが含まれていた。縄文時代早期～前期、RK12D層、NG12C層に対比しうる。

第15層：固結した灰黄色極細粒砂～砂質シルト層で、低位段丘構成層である。TP＋6.2m以下に位置する。旧石器遺物の有無を調べたが、出土しなかった。RK13層、NG13層に対比しうる。

表5　長原遺跡の標準層序（[趙哲済2003]より）

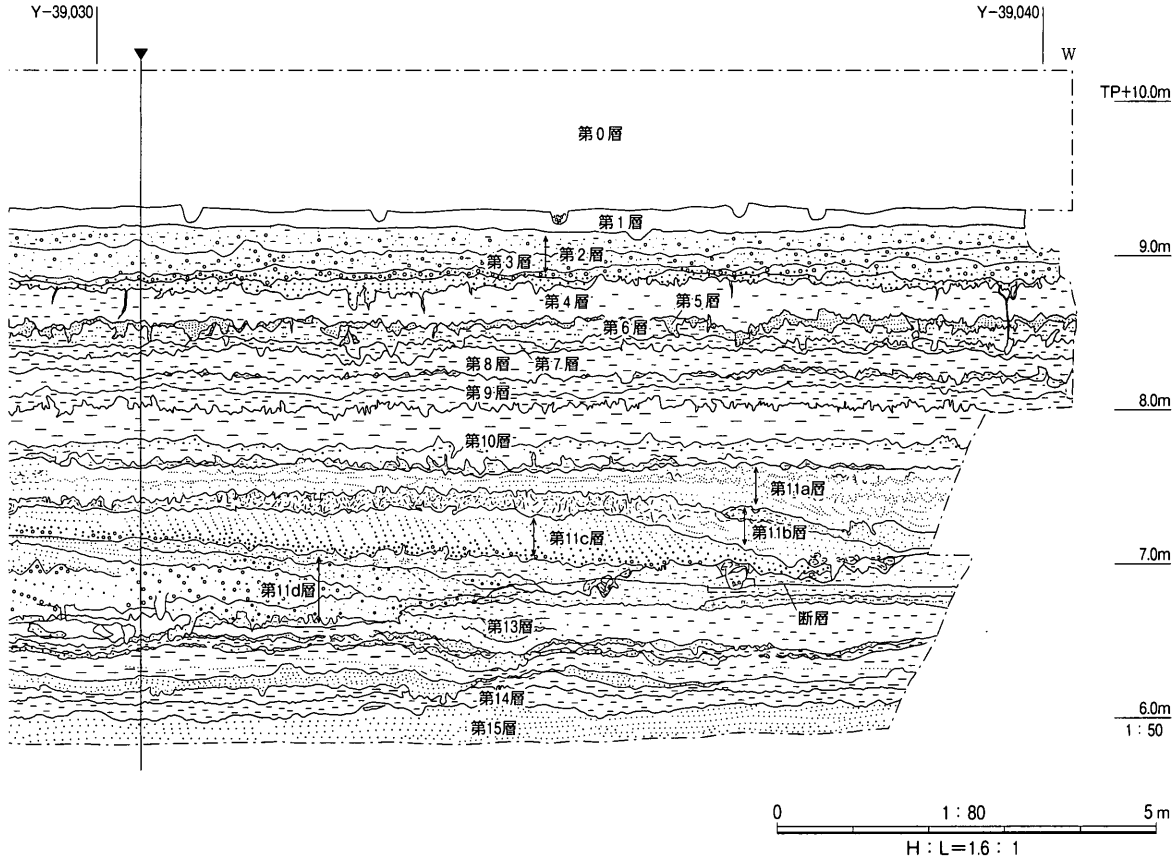
層序			層序概念図	岩相		層厚(cm)	自然現象自然遺物ほか	おもな遺構・遺物	C14 y.B.P	時代
沖積層（難波累層）	最上部	NG0層		現代盛土		–				近代・現代
		NG1層		現代作土		15～25				近世
		NG2層		含細礫灰褐～黄褐色シルト質砂		6～24	暗色帯	↓小溝群・畝間　←地震　↓小溝群・畝間・島畠　輸入陶磁器・瓦質土器・瓦器（Ⅳ－1～5）　肯花・唐津・瀬戸美濃・備前など	（400）	室町
		NG3層		含細礫淡黄褐～灰色粘土質シルト		12～20				
		NG4A層		暗灰褐色礫質砂～シルト 10～45	含細礫黄灰色中粒砂	8～15		瓦器　黒色土器　陶磁器　須恵器　土師器　▽掘立柱建物　←水田面　↓小溝群・畝間　瓦器（Ⅲ－1～Ⅳ－3）　瓦器（Ⅱ～Ⅲ）		鎌倉
		NG4B層 i			褐灰色砂質シルト	av.20				
		ii			含細礫黄灰色中粒砂	av.5		←水田面　↓小溝群・畝間　瓦器（Ⅰ～Ⅱ）	（800）	平安
		iii			灰色砂質シルト	av.15				
		NG4C層 i			明黄褐色砂質シルト	av.20		←水田面　平安Ⅰ～Ⅲ期		
		ii			にぶい黄褐色シルト質砂	av.20				
		NG5A層		灰色砂礫、シルト質細粒砂薄層を挟在		10～80		←鍬跡　平城宮Ⅴ～		奈良
		NG5B層		背灰色細粒～極細粒砂		2～8		←水田面		
		NG6A層 i		暗背灰色砂・粘土質シルト		≤20	タニシ	平城宮Ⅲ	（1300）	
		ii up		暗緑灰色中粒～細粒砂		≤5		←ヒトと偶蹄類の足跡		飛鳥
		ii lw		粘土質シルト薄層と極細粒砂薄層の互層		av.10		←水田面		
		NG6B層 i		含砂・礫黒褐色～暗灰色シルト質粘土		≤15	タニシ	飛鳥Ⅲ～Ⅳ		
		ii		灰色粘土・シルト・細礫質粗粒砂		≤5	←乾痕	←水田面　飛鳥Ⅲ		
		NG7A層 i		含砂灰色粘土		av.10		←水田面		
		ii		含砂黒褐色シルト質粘土		av.15		↓掘立柱建物　飛鳥Ⅰ・TK209	（1400）	
	上部	NG7B層 o		明黄褐色砂礫～暗オリーブ灰色粘土質シルト		≤250		←土手　TK10		古墳後期
		i		黒褐色砂・礫質粘土・黒色シルト		≤35		長原古墳群　埴輪Ⅴ期・TK23・47～MT15	（1600）	古墳中期
		ii		褐色極粗粒砂・粘土質シルト互層		≤170		←水田面　埴輪Ⅱ期　TK216		古墳前期
		iii		暗褐色粘土質シルト		≤5		↓方形周溝墓・竪穴住居　布留式・庄内式・畿内第Ⅴ様式	（1700）	弥生後期
		NG8A層		背灰～黄灰色砂・礫～粘土		≤40		←方形周溝墓・溝	（2000）	
		NG8B層		暗褐色砂質シルト		av.10		畿内第Ⅲ～Ⅳ様式・凸基式石鏃		弥生中期
		NG8C層 i		にぶい黄褐色極粗粒砂～中粒砂		av.25		←水田面・溝・ヒトの足跡　←石器製作址・畿内第Ⅱ様式・石斧　木葉形石鏃		
		ii		灰色シルト質粘土		av.10				
		ii		黄褐色シルト質粘土		≤15	←乾痕	←自然流路の堤		弥生前期
		NG9A層		黒褐色砂・シルト質粘土		3～15		畿内第Ⅰ様式・長原式・石鏃		
		NG9B層 i		灰オリーブ～黒褐色砂礫		≤90				
		ii		暗灰黄色シルト質粘土、植物片多含		10～40		畿内Ⅰ様式・堅杵		
		iii		灰オリーブ色シルト質粘土		3～14		土偶　石棒	（2600）	
		iv		暗灰オリーブ色シルト質粘土、植物片多含		8～50	アラカシ　イヌガヤ	長原式・石斧の柄・弓		縄文晩期
		v		灰オリーブ色シルト・砂		10～35	←乾痕	▽石器製作址　▽土器棺墓　▽竪穴住居・貯蔵穴　←滋賀里Ⅳ式　凹基式石鏃	（3000）	
		NG9C層 i		黒褐～褐灰色含シルト質粘土		2～8				
		ii		灰色シルト質粘土～砂礫		2～10				縄文後期
		iii up		オリーブ黒～灰色シルト・粗粒砂質粘土		7～25				
		iii lw		暗灰色シルト～粘土質粗粒砂		av. 5	←火山灰層準（ＢＢ７？）	縄文		
		NG10層		緑灰～オリーブ灰色礫質砂・シルト		≤80	← 地震	北白川上層Ⅱ～Ⅲ式		
		NG11層		灰色シルト質粘土		≤16	←乾痕			
		NG12A層 i		腐植質黒褐色礫質粘土～シルト		≤15		里木Ⅱ式・北白川Ｃ式・石鏃	←4740±140SI（GaK-14942）	
		ii		オリーブ黒色シルト質砂、礫混り		≤20			←4900±140SI（GaK-14941）	
		NG12B層 i		暗褐色細粒砂質シルト		av.20		← 地震？		
		ii		暗黄灰色シルト～灰色礫混り砂		av.10	（火山灰の２次堆積あり）			縄文中期
		iii		黒灰色シルト～オリーブ黒色シルト質粘土		av.10		←シカ・トリの足跡　船元Ⅱ式		
		iv		黄灰色砂礫～灰色シルト質粘土		≤15		▽土壙　▽石器製作址　凹基式石鏃	←4900±100Cb（GaK-14941）	
	中部	NG12C層 i		黒褐色～オリーブ黒色シルト～粘土		≤25				
				黒褐色～灰色粗粒砂		5～10				
		ii		黒褐色シルト質粘土、植物片多含		av.10				
				灰色中～粗粒砂、礫混り		av.40		甲殻類の巣穴の化石		縄文前期
		iii		オリーブ黒色シルト		≤20				
				灰色砂、一部シルト質		≤30				
				黄灰色ガラス質火山灰		≤5	←横大路火山灰層（Ah）	← 大礫	← 6300	
		NG12D層 i		オリーブ黒色極細粒砂質シルト		20～30		押型文土器		縄文早期
		ii		灰色礫混り砂、シルト薄層を挟む		≤60		有茎尖頭器・細石刃		縄文草創期
	下部	NG13A層 i		灰色細粒シルト		≤5				
		ii		灰黄～灰白色細粒シルト（火山灰質）		av.7		▽石器製作址　削器・ナイフ形石器・剥片・石核	（15000）	
							←乾痕	剥片・石核		
低位段丘構成層	最上部	NG13B層 i		黄褐～灰黄色シルト質粘土		≤5				
		ii		黄灰色粗粒シルト質火山灰		≤5	←平安神宮火山灰層（AT）		← 25000	
		NG13C層		暗灰黄～暗褐色シルト質粘土		av.12	↓乾痕			後期旧石器
	上部	NG14層 up.		灰白～緑灰色シルト質砂～砂質粘土		20～80		剥片		
		lw.		灰色砂礫～砂質シルト				▽石器製作址　掻器・ナイフ形石器・細部調整剥片石器		
	下部	NG15層 up.		黄灰色～緑灰色粘土～砂礫		150～450				
		lw.		シルト・砂礫			ヒメマツハダ　←ナウマンゾウの足跡			
中位段丘構成層	上部	NG16A層		暗灰～灰背色シルト・礫混り砂互層		≤150				
		NG16B層 i		暗褐色泥炭質粘土：沼沢地性層		≤20	←化石林、←ナウマンゾウとオオツノジカの足跡化石　←吾彦火山灰層準（Ａｓｏ-4）		← 87000	
		ii		灰色火山灰質砂質粘土～シルト：河成～沼沢地性層		≤25	←北花田火山灰層層準（ＫＴｚ）　↓ゾウの足跡状の凹み		← 91000	
		iii		灰色砂礫：河成層		≤260				
		NG17A層		オリーブ灰色砂質粘土：古土壌		av.10				中期旧石器
		NG17B層 i		オリーブ灰色砂混り粘土質シルト：沼沢地性層		av.20				
		ii		緑灰色粗粒砂質シルト：河成～沼沢地性層		av.10	←ナウマンゾウ臼歯（ラメラ片）			
		iii		緑灰色極粗粒砂～細礫：河成層		av.10				
		NG18層		緑灰色砂質シルト～緑灰色砂礫		av.65	←ゾウの足跡状の凹み			
		NG19層		暗緑灰色砂質粘土～緑灰色砂礫		av.50				
				緑灰色砂混り粘土質シルト　上方細粒化　下部で粗粒砂～砂礫		ca.280				
		NG20層		オリーブ黒色泥炭～泥炭質粘土		ca.100				
		NG21層		暗緑灰色細粒砂質シルト		ca.40				
	中部	NG22層		含貝化石砂～粘土		ca.200			(12万年)	

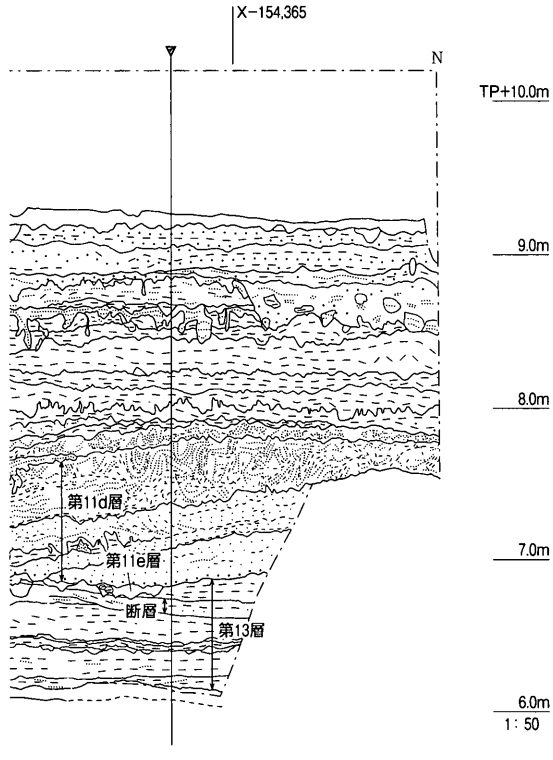
←：上面検出遺構
↓：下面検出遺構
▽：地層内検出遺構
Cb: 炭　SI:土壌

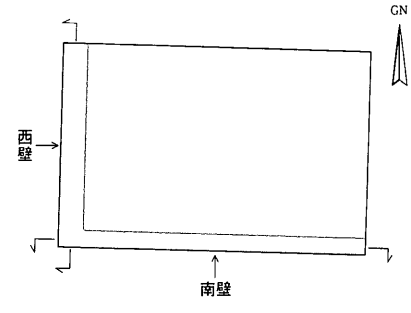
表4　長原東北地区層序表（[大阪市文化財協会2003a]より

	層序		層序概念図	主たる岩相		層厚(cm)	自然現象自然遺物ほか	おもな遺構・遺物	模式地	NG層序との対比	時代
	RK0層			現代客土							近代・現代
	RK1層			現代作土		10-20				1	
	RK2層	i		オリーブ灰色細～中粒砂混り粘土質シルト		≦15	暗色帯	↓小溝群	NG96-66北部	2	江戸
		ii		灰～オリーブ灰色細粒砂混りシルト		≦15					
		iii		オリーブ灰色細粒砂混りシルト		≦15					
		iv		灰色粘土質シルト		≦10		↓小溝群・畝間　国産陶磁器(96-66次)			
	RK3層	i		灰オリーブ色粗粒砂混りシルト		≦20			NG95-57 NG96-9	3	室町～鎌倉
		ii		黄褐色粘土質シルト		≦10		↓島畠溝　中国製青磁(96-9次)			
		iii		灰オリーブ色粗粒砂混りシルト質細粒砂		5-15					
		iv		オリーブ色シルト質極細粒砂		≦20		↓小溝・水田(99-41次)　瓦器(C-Ⅲ～Ⅳ期：96-9次)			
	RK4A層			黄褐色シルト質極細粒砂～礫混り粗粒砂		15-20		↓自然流路　瓦器(C-Ⅲ期：97-52次)	NG96-79 NG97-12 NG97-52	4A	
沖積層上部層Ⅰ	RK4B層	i		オリーブ褐色粘土質シルト		≦15		↓不整形落込み　瓦器(C-Ⅲ期：96-9次)	NG96-9	4B	
		ii		オリーブ褐色シルト		≦10		↓土器埋納遺構　瓦器(C-Ⅲ期：96-9次)			
		iii		黄褐～暗灰黄色シルト～中粒砂 ≦55cm	灰オリーブ色シルト～細粒砂	10		▽井戸 平安Ⅲ新～平安Ⅳ新　↓掘立柱建物　瓦器(C-Ⅱ期)平安Ⅳ期(96-9次)			平安
		iv			オリーブ褐色粘土質シルト	10		瓦器(C-Ⅱ期)平安Ⅳ期(96-9次)			
	RK4C層	i		オリーブ褐色中粒砂混りシルト		8		平安Ⅲ期(96-40次)	NG96-40	4C	
		ii		黄褐色中粒砂混りシルト		≦8		↓溝			
		iii		灰オリーブ色中粒砂混りシルト		6-10					
		iv		にぶい黄褐色中粒砂混りシルト		8-12		↓溝			
		v		暗灰黄褐色シルト		≦14		↓溝　平安Ⅲ期(96-40次)			
		vi		灰黄褐色細粒砂混りシルト		10		↓土器埋納遺構　平安Ⅱ～Ⅲ期(96-40次)			
		vii		暗灰黄色中～細粒砂混りシルト		5-20		↓溝　平安Ⅰ・Ⅱ期(96-40次)			
	RK5層			暗褐色～黒褐色シルト～細粒砂 ≦70cm	暗灰黄色シルト質細粒砂	≦15		↓鍛跡	NG96-66	5A・B～6A	奈良
	RK6A層				暗灰黄色細粒砂質シルト	10		▽溝・掘立柱建物 TK43～平城宮土器　↓溝・土壙　飛鳥Ⅱor Ⅲ(96-79次)	NG96-79	6B～7A	飛鳥
	RK6B層				灰色シルト	10		↓溝・土壙・井戸　飛鳥Ⅱor Ⅲ(96-79次)			
	RK6C層				暗灰色粘土質シルト	10		←溝(97-43次)　↓溝			
	RK7A層	i		オリーブ褐色シルト～細粒砂		≦40	植物遺体多	飛鳥Ⅱ(97-43次)	NG97-43	7B0	
		ii		灰色砂礫		≦70		TK209(97-43次)			
		iii		黄褐色細～粗粒砂		≦180		TK10新相(97-43次)	NG97-43	7Bi	古墳後期
		iv		暗オリーブ灰色粘土質シルト～明黄褐色砂礫		≦250		▽土手状遺構(95-57次)　TK10(95-57・97-52次など)　←堤防状盛土(98-20次)	NG95-57 NG96-66		
		v		黒色シルト～粘土質シルト		30		▽溝(00-6次)　▽水平断層(99-41次)　TK23・47(97-41次)	NG97-41		
		vi		灰黄色砂礫		≦210		TK23・47(96-66次など)	NG96-66		
		vii		灰オリーブ色中粒砂～砂礫		≦110		←踏込み←盛土(98-19・20,00-6次)　水田(00-6次)　TK216(98-20次)	NG97-43		
沖積層上部層Ⅱ	RK7B層	i		灰オリーブ色シルト		5-25	植物遺体を多く含む	曲物(97-12次)	NG96-79 NG97-12 NG97-41	7Bii	古墳前期
		ii		オリーブ黒色粘土質シルト		7	植物遺体を多く含む	土師器(船橋O-Ⅰ/Ⅱ：97-12次)	NG97-12		
	RK8A層			暗緑灰色シルト		5-20		←水田(99-19・41次)　布留式土器(96-66次)	NG96-66	7Biii	
	RK8B層			緑灰色粘土質シルト		7		←水田(99-19次)　庄内～布留式土器(96-9、97-41・52次)	NG96-66		
	RK8C層			暗灰色シルト		≦10		弥生Ⅴ様式(96-9次)	NG96-9		弥生後期
	RK8C層			暗緑灰色シルト		5-20		弥生Ⅴ様式(96-66次)	NG96-66		
	RK9A層			暗オリーブ灰色シルト～極細～粗粒砂混り粘土質シルト		≦20		←土壙・溝(97-43次)	NG97-41	8A	弥生中期
	RK9B層			暗灰色シルト～シルト質粘土		≦18		弥生Ⅳ様式(96-66次)	NG96-66 NG96-79	8B	
	RK9C層	i		暗オリーブ灰色砂礫～細粒砂混り粘土		≦30		←水田面・溝(97-52次)	NG97-12	8Ci	
		ii		オリーブ黒色シルト質粘土		20			NG97-52	8Cii	
		iii		緑灰色シルト		≦3		←土壙・溝・踏込み(97-41次)　▽水平断層　縄文長原式・弥生1様式(97-41次)	NG97-52	8Cii	
	RK10A層			オリーブ黒色シルト		5			NG96-79	9A	弥生前期
	RK10B層	i		灰オリーブ色シルト		40			NG95-79	9B	縄文晩期
		ii		暗オリーブ色粘土質シルト		≦5					
		iii		暗オリーブ色シルト		≦25					
		iv		オリーブ黒色シルト		≦25					
		v		緑灰色シルト～灰色中粒砂		≦5					
	RK10C層	i		黒色シルト		10		←土器集積・炉(99-19次)　踏込み(97-41・56、99-41次)　←噴砂(99-19次)　北白川上層Ⅱ～Ⅲ(99-19次)	NG96-79	9Ci	縄文後期
		ii		緑灰色シルト		8		縄文土器			
		iii		黒色シルト		8		縄文土器(97-12次)		9Cii	
		iv		黒褐色シルト質極細粒砂		15				9Ciii	
	RK11層	i		灰色砂礫		≦250		北白川上層Ⅱ(99-19次)	NG96-79 NG97-12	10・11	
		ii		暗オリーブ灰色粘土		≦70					
沖積層上部層Ⅲ	RK12A層	i	灰～黒褐色シルト質粘土～粗粒砂混り砂質シルト	黒色シルト		5	化立石木	▽里木Ⅱ式(96-79次)　4740±140SI(Gak-14942)(97-52、98-20次)	NG96-79 NG97-41 NG97-52	12Ai	縄文中期
		ii		黒色シルト質細粒砂		10		4910±140SI(Gak-14942)(97-52、98-20次)		12Aii	
		iii		オリーブ黒色シルト質細～粗粒砂		12		(97-52、98-20次)			
	RK12B層	i		暗褐色細粒砂質シルト		15		(97-52、98-20次)		12B	
		ii		緑灰色シルト～灰色粗粒砂		30-120		(97-52、98-20次)			
		iii		灰黄色粘土質シルト		30-40		▽周溝・土壙・焼土 鉛元Ⅱ(99-41次)　(97-52、98-20次)			
	RK12C層	i		灰色中～細粒砂質シルト		12	生痕化石	(97-52、98-20次)		12C	
		ii		灰色極粗粒砂～黒褐色シルト		≦90	植物遺体	(97-52、98-20次)			
沖積層下部層	RK12D層	i		黒色中粒砂質シルト	灰色粘土質シルト	30	生痕化石	(97-52、98-20次)			
	RK12/13層漸移帯	ii		オリーブ黒色シルト質細粒砂		5		(97-52、98-20次)			
		iii		黄灰色シルト質極細粒砂		5	横大路火山灰(K-Ah)	▽サヌカイト製石器遺物(96-79次)　(97-52、98-20次)	NG97-52		縄文早期 縄文草創期
		iv		オリーブ黒色極細粒砂質シルト		10	生痕化石	▽不整形土壙・焼土(99-41次)　抑型・携系(99-41次)　石器製作址(97-52次)　7230±40BP(Beta-146531)(99-41次)		12D	
	RK13A層	i		灰オリーブ色シルト		10-20		▽サヌカイト製石器遺物(96-79次)　(97-52、98-20次)	NG96-79 NG97-12 NG97-52	13Ai	
		ii		灰オリーブ色火山灰質シルト		5-10	阪手火山灰			13Aii	
低位段丘構成層	RK13B層	i		灰色砂礫質粘土		10-20		石器製作址(97-12次)・ナイフ形石器(97-52・96-79次)	NG96-79	13B	後期旧石器
		ii		オリーブ灰色ガラス質火山灰		5	平安神宮火山灰(AT)		NG97-52		
	RK13C層			オリーブ灰色粘土質シルト		10			NG97-52	13C	
	RK14層			緑灰色砂礫混り粘土質シルト		20-40			NG97-12	14	
	RK15A層			緑灰色シルト～シルト質粘土		100-150			NG97-12・52	15	
	RK15B層			灰色砂礫		≧100		←ゾウ足跡化石			
中位段丘構成層	RK16A層			緑灰色シルト質極細～細粒砂		20-30			NG96-79	16A	中期旧石器
	RK16B層	i		暗灰黄色泥炭中粒砂質粘土		120			NG96-79	16B	
		ii		暗灰黄色泥炭中粒砂質粘土		10-20					
		iii		灰色火山灰極細粒砂質シルト		10	喜彦火山灰(Aso-4)				
		iv		緑灰色粘土層		40					

凡例
←は上面検出遺構
↓は下・基底面検出遺構
▽は地層内検出遺構


Y−39,030
Y−39,040
W
TP+10.0m
第0層
第1層
第2層
第3層
第4層
第5層
第6層
第7層
第8層
第9層
第10層
第11a層
第11b層
第11c層
第11d層
第13層
第14層
第15層
断層
9.0m
8.0m
7.0m
6.0m
1：50
0
1：80
5m
H：L=1.6：1


X−154,365
N
TP+10.0m
9.0m
8.0m
7.0m
6.0m
1：50
第11d層
第11e層
断層
第13層


GN
西壁
南壁

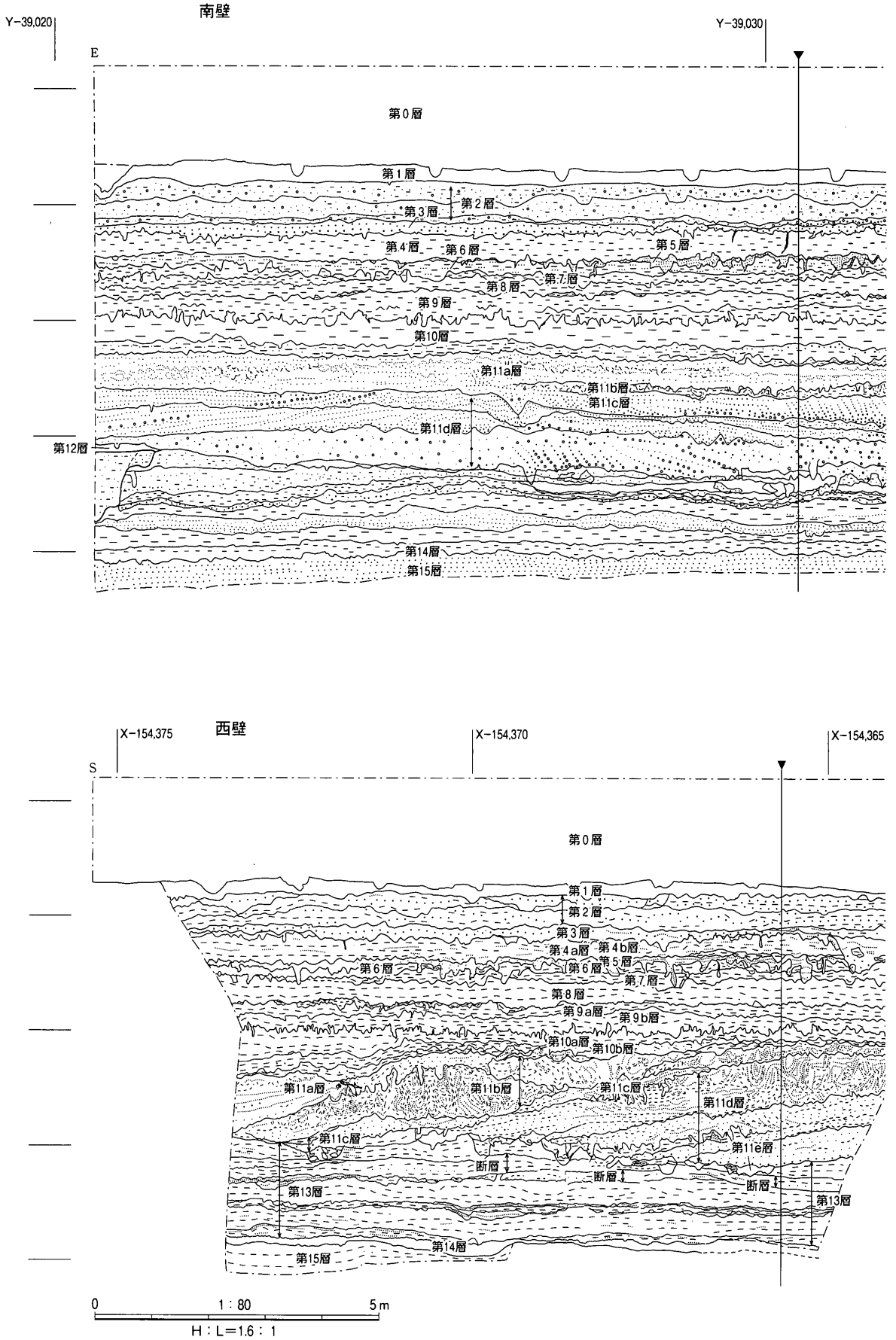

南壁
Y−39,020
Y−39,030
E
第0層
第1層
第2層
第3層
第4層
第6層
第5層
第7層
第8層
第9層
第10層
第11a層
第11b層
第11c層
第11d層
第12層
第14層
第15層
西壁
X−154,375
X−154,370
X−154,365
S
第0層
第1層
第2層
第3層
第4a層
第4b層
第5層
第6層
第7層
第8層
第9a層
第9b層
第10a層
第10b層
第11a層
第11b層
第11c層
第11d層
第11e層
断層
第13層
第14層
第15層
0
1：80
5m
H：L=1.6：1

図5　地層断面図

第Ⅱ章　調査の結果

第１節　層序

今回の調査では現地表下約4.5mまでの地層を確認した。

以下、地層のおもな特徴と長原遺跡東北地区基本層序および長原遺跡標準層序との対比を記す（図５、表４・５、図版１）。

第０層：現代盛土層で、層厚は90cmである。RK0層、NG0層に対比される。

第１層：黄灰～黒褐色シルト質細粒砂～粗粒砂層で、近現代の作土層である。層厚は10cmである。RK1層、NG1層に対比される。

第２層：黄褐～灰オリーブ色砂・礫質シルト～シルト質砂・礫層で、３枚に細分される作土層である。層厚は30～40cmである。土師器・須恵器・瓦質土器・肥前陶器・瓦などが出土し、江戸時代に位置づけられる。RK2層およびNG2層に対比される。

第３層：下部はにぶい黄褐色中粒～粗粒砂の水成層、上部はこれを母材とするにぶい黄褐色細礫質中粒～細粒砂からなる作土層である。層厚は10cm以下である。東西溝SD301は本層の上面で検出された。時期を決する遺物は出土していないが、近隣の調査成果から室町時代に位置づけられる。RK3層、NG3層に対比される。

第４層：にぶい黄褐～灰色を呈する細粒砂質シルト～粘土層で、作土層である。層厚は20～40cmある。遺物は出土していないが、近隣の調査成果から鎌倉時代に位置づけられる。RK3層、NG3層に対比される。

第５層：黄褐色細粒～極細粒砂の水成層である。層厚は10cm以下である。遺物は出土しなかった。RK4A層、NG4A層に対比される。

第６層：暗灰黄～灰色を呈するシルト～砂質シルト層である。層厚は15cm以下である。上下面ともに凹凸が著しく、作土層と判断しうる。遺物は出土しなかった。RK4B層、NG4B層に対比される。

第７層：暗灰黄～灰色を呈するシルト質粘土～シルト層で、層厚は10cm以下である。第６層との識別が困難であった。RK4B層、NG4B層に対比される。

第８層：灰～黄灰色を呈する粘土～粘土質シルト層で、水成層である。層厚は15～30cmある。土師器・瓦片が出土したが時期を決するだけの資料はない。下位層との関係から平安時代後期に位置づけられ、RK4B層、NG4B層に対比される。

第９層：灰色シルト～粘土層である。３枚に細分され、上位層がシルト、中・下 層は粘土であった。層厚は20～30cmある。本層の下位は凹凸が著しいため、作土層と判断した。土師器・瓦器片などが出土し、平安時代後期に位置づけられる。RK4B層、NG4B層に対比される。

第２節　調査の経過と概要

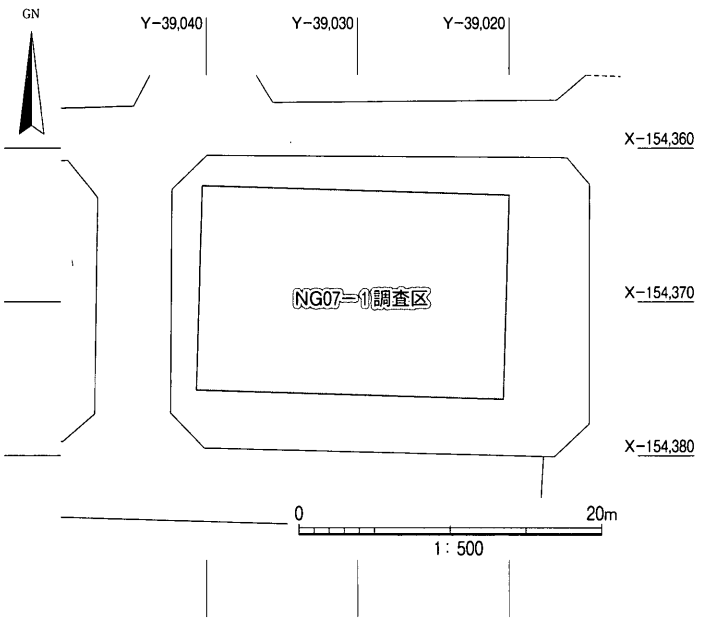


図４　調査区位置図

今回の調査地は東西方向の都市計画道路である敷津長吉線の予定地内にある。同路線内では、東に隣接してNG05－３次調査が実施されている。また、北側では市営住宅の建替えに伴いNG06－３・４次調査が行われるなど、比較的数多くの調査が行われている地域に当る。

今回の調査は道路予定地内に250㎡の調査区を設け、2007年９月10日より、鋼矢板打設などの準備工事に着手した。10月１日より機械による掘削を開始し、調査区南半では後述の第５層、北半では第４層までの地層を除去した。以下は人力による掘削で調査を進め、適宜、遺構・遺物の検出作業、図面作成、写真撮影などの作業を行った。途中、10月９日には測量のための基準点設置作業、11月12・13日には鋼矢板の支保工設置などの作業を行った。現地における記録作業は2008年１月16日に終了し、翌日より埋戻し作業を開始した。鋼矢板・万能塀の撤去など旧状に復する作業を終え、２月８日にはすべての作業を完了した。

表３　本書で報告する発掘調査

計画道路名	調査次数	調査地番	面積	調査期間	調査担当者
敷津長吉線	NG07－１	平野区長吉出戸８丁目	250㎡	2007年９月10日～2008年２月８日	積山洋

時代の方形周溝墓が２基検出され、その上位で古墳時代の畠を検出した。NG06－３次調査では、方形周溝墓の周溝の可能性がある弥生時代中期の溝のほか、古墳時代中期の竪穴建物・掘立柱建物を確認している。NG06－４次調査では、弥生時代後期の竪穴建物や古墳時代中期の竪穴建物が確認されている。また、ガラス玉や管玉・臼玉も多く出土している。また、これらの調査地に挟まれる南北道路内のNG83－１次調査では、小規模な調査ながら弥生時代前期の小穴群、弥生時代中期の住居とみられる方形遺構、古墳時代中期の柱穴を含む小穴群などを検出した。

NG02－５次調査地の南西約100mで行われたNG96－79次調査では、平安時代後期～鎌倉時代にかけての井戸・溝、飛鳥時代の井戸・溝・土壙、弥生時代後期～庄内式期の井戸・溝といった遺構が検出されたほか、縄文時代中期後半の里木式に属する縄文土器や後期旧石器時代の石器が出土した。そのほか、NG97－41次調査では、縄文時代晩期～弥生時代前期の流路、弥生時代中期の溝、古墳時代前～中期の水田、奈良時代前後の井戸・溝、平安時代の小穴・溝・流路などが検出された。NG02－９次調査では平安時代の掘立柱建物・畠・水田・小穴などが見つかったほか、今から約２万８千年前に降灰した平安神宮火山灰（AT）よりも古い地層から出土した後期旧石器時代の石器遺物が特筆すべき遺物として挙げられる。

の遺構群、縄文時代中期の住居状遺構、縄文時代後期の炉跡と土器集積、弥生時代の水田、古墳時代前期の水田、古代から近世にかけての水田や耕作痕跡などを検出した。

2000年度には、同敷津長吉線予定地の東端でNG00－６次調査を実施した。東隣のNG98－20次調査で確認された盛土遺構と一連の古墳時代中期の盛土遺構のほか、平安時代の流路が見つかった。また、遺構に伴うものではないが、重弧文軒平瓦をはじめとする古代の瓦や和同開珎などの銅銭が出土した。

2001年度に実施した同敷津長吉線予定地内におけるNG01－14次調査では、古墳時代中期と平安時代後期の水田、古墳時代後期～奈良時代にかけての自然流路が見つかった。奈良時代の流路からは大量のウシ・ウマの骨とともに墨画土器・ミニチュア土器などの祭祀遺物が出土した。これらは当時の祭祀のようすを窺い知ることのできる好資料である。

2002年度には出戸８丁目の同敷津長吉線予定地におけるNG02－１次調査と、同長吉東部２号線予定地内のNG02－５次調査を行った。NG02－１次調査では弥生時代中期の集落の一部を調査し、円形の竪穴建物を検出した。また、その上位では古墳時代の畠遺構や奈良時代の流路を検出した。NG02－５次調査では沖積層がかなり深くまで厚く堆積していたが、その沖積層の下部から縄文時代中期～後期の土器が、また上部から古代～中世の遺物が出土した。

2003年度には出戸７丁目の同長吉東部２号線予定地内でNG03－９次調査を行った。ここでも古墳～平安時代の自然流路を検出し、流路の東岸で平安時代の集落の一部を検出した。しかし、その後は湿地性の堆積層が厚く堆積し、室町時代になって耕作地として利用されるまでここは水没していたことが判明した。

2004年度にはNG02－１次調査地北側に隣接するNG04－３次調査を行った。この調査ではNG02－１次調査で検出した弥生時代の集落や古墳時代の畠遺構の続きを検出した。中でも注目されるものは、「束十五」と記載された木簡の削り屑の出土があげられる。削り屑の出土により、この地で文字を書き記した木簡の表面を削って文字を訂正し、再度利用していたことが判明した。ここで収穫された物(おそらくは稲などの農作物)の量を官吏が記し、荷札としたのであろう。

2005年度は、長吉東部２号線内でNG05－２・３次調査を行った。NG05－２次調査では、自然流路と中世の耕作地を検出した。NG05－３次調査では、弥生時代の盛土と溝、古墳時代の溝、古代の流路を検出した。

2006年度は、長吉東部２号線内でNG06－１次調査を行った。この調査では、平安時代の耕作地およびそれ以前の地震痕跡が検出された。弥生～古墳時代の流路や湿地状の堆積物からは土器および古墳時代の舟形木製品が出土している。

以上が長吉東部地区土地区画整理事業に伴う調査の概要である。これらの調査については、それぞれ調査の次年度に整理作業を行い、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅰ～Ⅻを刊行し、調査成果を公表している。

一方、長吉東部土地区画整理事業に伴う調査以外では、特筆すべき調査として、今回調査地の北から北東に位置するNG03－５・06－３・４次調査がある。NG03－５次調査では調査区東南部で弥生

表２　長原遺跡における既往の調査一覧（２）

調査次数等	お　も　な　内　容	文　献
NG96－79	旧石器・縄文時代遺物、弥生時代後期～庄内式期遺構、飛鳥～平安時代遺構、TP+7.5mで砂層	大阪市文化財協会 1997
NG97－12	旧石器時代遺物集中部、縄文時代遺物、古墳中期時代木製品、飛鳥時代竈屋・掘立柱建物	大阪市文化財協会 2000
NG97－13	古墳時代自然流路、平安時代溝	大阪市文化財協会 2000
NG97－41	縄文時代晩期～弥生時代前期流路、弥生時代中期溝、古墳時代水田、奈良～平安時代遺構	大阪市文化財協会 1998b
NG97－43	弥生時代後期溝、古墳時代自然流路、飛鳥時代溝・土壙	大阪市文化財協会 2000
NG97－52	旧石器・縄文時代遺物、古墳時代中期木製品、古墳時代後期土手状遺構、飛鳥時代遺構	大阪市文化財協会 2000
NG97－56	縄文時代後期踏込み跡、平安時代土手状遺構	大阪市文化財協会 2000
NG98－19	古墳時代中期土壇状遺構・土師器・須恵器・玉類・製塩土器	大阪市文化財協会 2001
NG98－20	古墳時代中～後期流路、古墳時代中期土壇状遺構・竪穴住居、古代～中世耕地	大阪市文化財協会 2001
TS97－7	平安時代後期井戸、土壙	八尾市文化財調査研究会 2000a
TS98－8	奈良～平安時代初期の小穴、中世井戸	八尾市文化財調査研究会 2000b
NG99－15	縄文時代石器集中部、弥生中～後期・古墳中期集落、飛鳥時代耕地	大阪市文化財協会 2002b
NG99－19	縄文時代後期土壙、弥生～古墳時代前期水田、平安時代～近世耕地	大阪市文化財協会 2002a
NG99－41	後期旧石器時代遺物、縄文時代早～中期遺構群、古墳時代前期水田、平安時代流路・土手	大阪市文化財協会 2002a
NG00－6	古墳時代中期盛土遺構、古代溝、平安時代流路	大阪市文化財協会 2003a
NG00－30	奈良時代小穴、平安時代土壙・流路	大阪市文化財協会 2004a
NG01－14	古墳時代前期溝、古墳時代中期水田・溝群、飛鳥～奈良時代流路（墨画土器・獣骨出土）	大阪市文化財協会 2004b
NG01－25	中世水田	大阪市文化財協会 2004a
NG02－1	弥生時代中期集落、古墳時代畠状遺構、奈良時代流路	大阪市文化財協会 2005a
NG02－4	古墳時代盛土、中世水田	大阪市文化財協会 2004a
NG02－5	縄文時代中～後期土器、弥生時代前～中期溝・水田、古墳時代前期水田、古墳時代中期木製品	大阪市文化財協会 2005b
NG02－9	旧石器時代遺物、平安時代集落	大阪市文化財協会 2008c
NG03－5	弥生時代中期方形周溝墓、古墳時代中期ウマの埋葬、古墳時代後期溝群	大阪市文化財協会 2008a
NG03－9	弥生時代後期溝、古墳時代中・後期流路、平安時代集落	大阪市文化財協会 2006a
NG04－3	弥生時代土壙・溝、古墳時代溝、飛鳥時代溝、奈良時代流路、平安時代溝、中～近世水田・島畠	大阪市文化財協会 2007
NG05－2	流路、中世耕作地	大阪市文化財協会 2008b
NG05－3	古代流路、古墳時代溝、弥生時代盛土・溝	大阪市文化財協会 2008b
NG06－1	平安時代耕作地、ヒト・偶蹄目足跡、豊臣期畠	大阪市文化財協会 2009
NG06－2	飛鳥時代流路、中世耕作溝	大阪市文化財協会 2008c
NG06－3	弥生時代中期溝、古墳時代中期竪穴建物・掘立柱建物	大阪市文化財協会 2008a
NG06－4	弥生時代後期竪穴建物とガラス玉、古墳時代中期竪穴建物	大阪市文化財協会 2008a
NG07－1	**弥生時代中期掘立柱建物・土壙、古墳時代中期土壙、奈良時代流路、中～近世水田**	**本書**

縄文時代中期以前の流路、縄文時代中期～弥生時代前期の溝・土壙、弥生時代中期の水田、弥生時代後期～古墳時代前期の土壙・小穴、古墳時代中～後期の土手状遺構、掘立柱建物を含む飛鳥時代および平安時代の遺構群などが検出され、多様な成果を得ることができた。このうち、特筆すべきは旧石器時代の石器製作址で、14,000点に及ぶサヌカイト剥片とともに、約50点のナイフ形石器や削器などのサヌカイト製品が出土しており、後期旧石器時代の石器製作技法を検討する上で重要な資料として注目を集めている。

1998年度には、同敷津長吉線予定地内のNG98－19・20次調査を実施し、古墳時代中期の盛土遺構とその周辺から、祭祀に伴うと考えられる滑石製勾玉・臼玉や、多量の土器が出土した。

1999年度には、同敷津長吉線予定地内でNG99－19・41次調査を実施した。ここでは縄文時代早期

表１　長原遺跡における既往の調査一覧（１）

調査次数等	おもな内容	文献
城山 mh2	弥生時代前～中期周溝墓状遺構、古墳	大阪文化財センター 1980
城山 mh3	弥生時代中期遺物、古墳時代大溝、奈良時代遺物	大阪文化財センター 1980
城山 B·C 区	弥生時代中期方形周溝墓、古墳、飛鳥時代自然流路	大阪文化財センター 1986a
城山 D·E·F 区	弥生時代中・後期集落、古墳時代中期水田・土壙、飛鳥～平安時代溝、中世水田	大阪文化財センター 1986b
城山 G 区	弥生時代土壙群、飛鳥時代～中世水田	大阪文化財センター 1986c
NG1	弥生時代中期溝・土壙墓、古墳時代中期溝、飛鳥時代大溝	大阪市文化財協会 1978
77 年度試掘	奈良時代溝	大阪市教育委員会·難波宮址顕彰会 1978
NG12	飛鳥時代杭列・流路・土器溜まり、平安時代土壙	大阪市文化財協会 1979a
NG16	弥生～古墳時代中期遺物、弥生時代溝、古墳時代前・中期溝・井戸	大阪市文化財協会 1979b
NG17	縄文時代晩期・弥生・古墳時代後期遺物	大阪市文化財協会 1979c
NG80－1	TP+7.2mで奈良時代溝、TP+6.9mで砂層（NG8 層）	大阪市文化財協会 1981a
NG80－2	弥生・古墳時代遺物	大阪市文化財協会 1981b
NG23	弥生時代中期遺物、古墳	大阪市文化財協会 1980
NG25	縄文時代晩期・弥生時代中期遺物	大阪市文化財協会 1980
NG83－1	弥生時代中期住居、古墳時代中期住居	大阪市文化財協会 1984a
NG83－5	TP+8.0mで砂層	大阪市文化財協会 1984b
NG83－22	TP+7.6mで奈良時代包含層	大阪市文化財協会 1984c
NG83－43	TP+7.8mで砂層	大阪市文化財協会 1984d
NG83－54	TP+8.1mで砂層（NG5 層か）	大阪市文化財協会 1984e
NG83－63	弥生時代中期集落、弥生時代後期土器棺墓	大阪市文化財協会 1984f
NG83－65	弥生時代中期遺物、古墳時代中期土壙状遺構	大阪市文化財協会 1984g
NG84－4	古墳時代中期溝・土壙、飛鳥時代水田、古墳時代砂層なし	大阪市文化財協会 1985a
NG84－18	TP+8.2mで泥質土層	大阪市文化財協会 1985b
NG84－49	TP+7.7mで砂層	大阪市文化財協会 1985c
NG84－86	弥生時代後期～古墳時代中期遺物、庄内期井戸・建物、古墳時代中期土壙	大阪市文化財協会 1985d
NG85－17	縄文時代晩期遺物	大阪市文化財協会 1986
NG88－6	TP+7.8mで砂層（飛鳥時代初頭の須恵器が出土）、飛鳥時代包含層、奈良時代溝	大阪市文化財協会 1989
NG95－57	TP+8.2mで砂層（古墳時代後期中葉の須恵器が出土）、古墳時代後期土手状遺構、平安時代集落	大阪市文化財協会 1998a
NG95－77	TP+8.0mで砂層（古墳時代後期前葉の須恵器が出土）、古墳時代後期土手状遺構	大阪市文化財協会 1996
NG96－9	弥生時代後期水田、TP+8.2mで砂層、飛鳥・平安時代集落	大阪市文化財協会 1999
NG96－40	TP+7.5～8.2mで砂層、飛鳥～平安時代溝	大阪市文化財協会 1999
NG96－66	弥生時代中期～庄内期遺物、TP+7.8mで砂層、古墳時代後期～奈良時代集落	大阪市文化財協会 1999

らびに大阪市教育委員会文化財保護課の立会いのもと、２箇所の試掘調査を行った。その結果、1995年度の調査で検出した古墳時代後期の厚い洪水堆積層に相当する地層が確認されたことから、その下に存在する古墳時代以前の遺構面も調査することになり、現地表下４ｍまでの遺構・遺物が調査の対象となった。この協議の結果を受けて長吉東部２号線との交差点の北側に当る部分で行った、NG96－40・66次の２箇所の調査では、弥生時代後期の水田、古墳時代後期～飛鳥時代の掘立柱建物、平安時代の遺構群が検出された。

1997年度には、同長吉東部２号線予定地内のNG97－12・13・52次調査と、同長吉東部３号線予定地内のNG97－43次調査、同敷津長吉線予定地のNG97－56次調査の合計５箇所の調査を実施した。中でもNG02－５次調査地の西側に近接するNG97－12・52次調査では、旧石器時代の石器製作址、

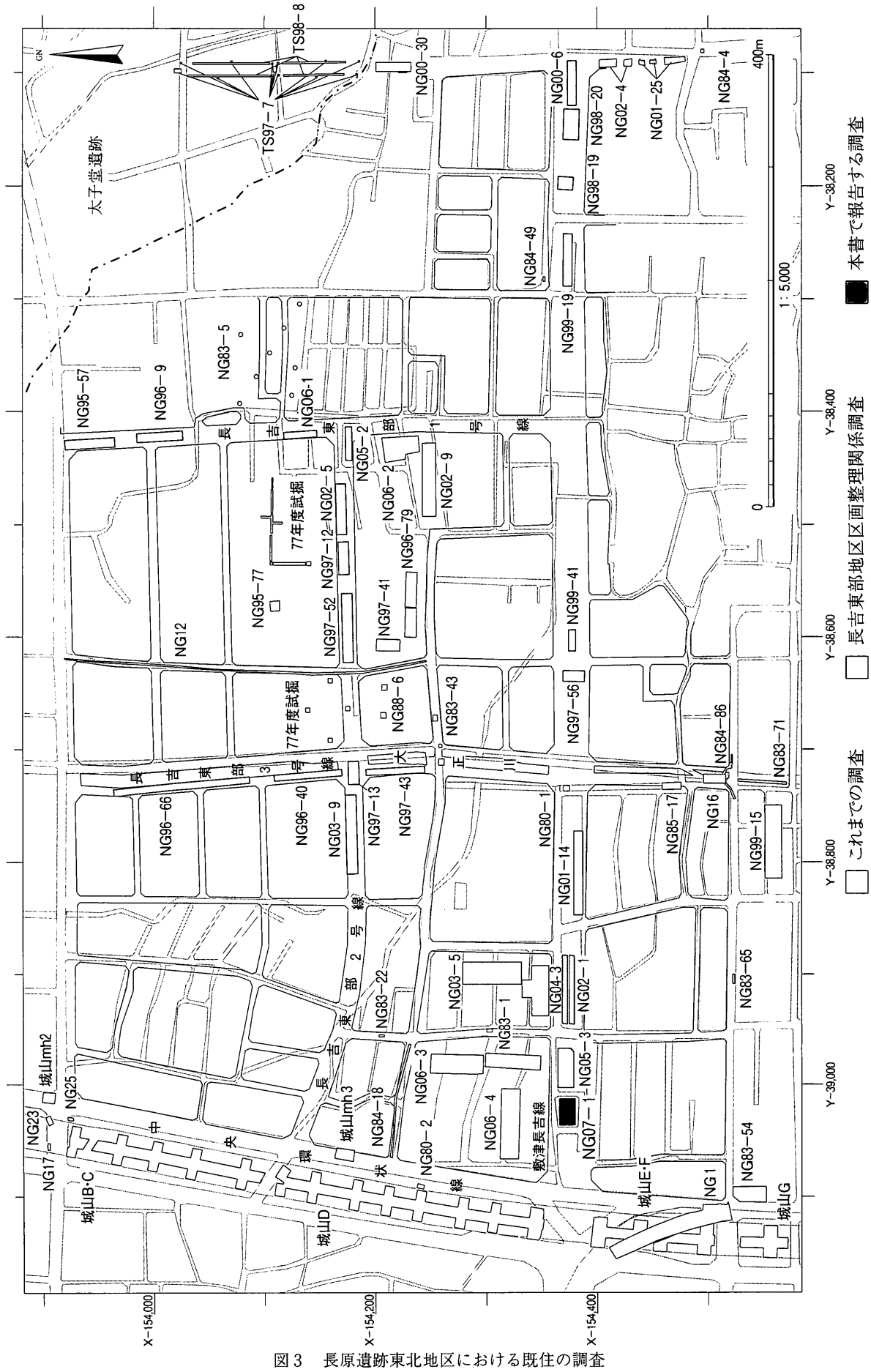


図3　長原遺跡東北地区における既住の調査

(財)大阪府文化財センター)によって実施された調査が始まりで、当時は長原遺跡という名称ではなく、城山遺跡としての調査であった。ほぼ同じころ地下鉄谷町線延長工事や大阪市の下水管渠工事などに伴う調査を(財)大阪市文化財協会(以下当協会と記す)およびその前身団体である長原遺跡調査会が行った。

当地区が長吉東部土地区画整理事業の対象地域となった1995年度以降は、当協会が年度ごとに発掘調査を継続して実施しており、1995年度から2007年度までの間、同事業に伴って実施された発掘調査は計23件を数える(図２・表１)。

初年度である1995年度には、都市計画道路長吉東部１号線予定地の北端部でNG95－57次調査を実施し、厚い洪水堆積層で埋没した古墳時代後期の敷葉工法によるとみられる土手状遺構や流路、飛鳥時代と平安時代の掘立柱建物などを検出した。

1996年度には、前年度調査地の南側で長さ約42m分を対象にNG96－９次調査を実施し、弥生時代後期から古墳時代初頭の水田、飛鳥時代の掘立柱建物などを検出した。また、同年度には大正川の西側に沿う同長吉東部３号線予定地も調査の対象となり、大阪市建設局長吉東部土地区画整理事務所な

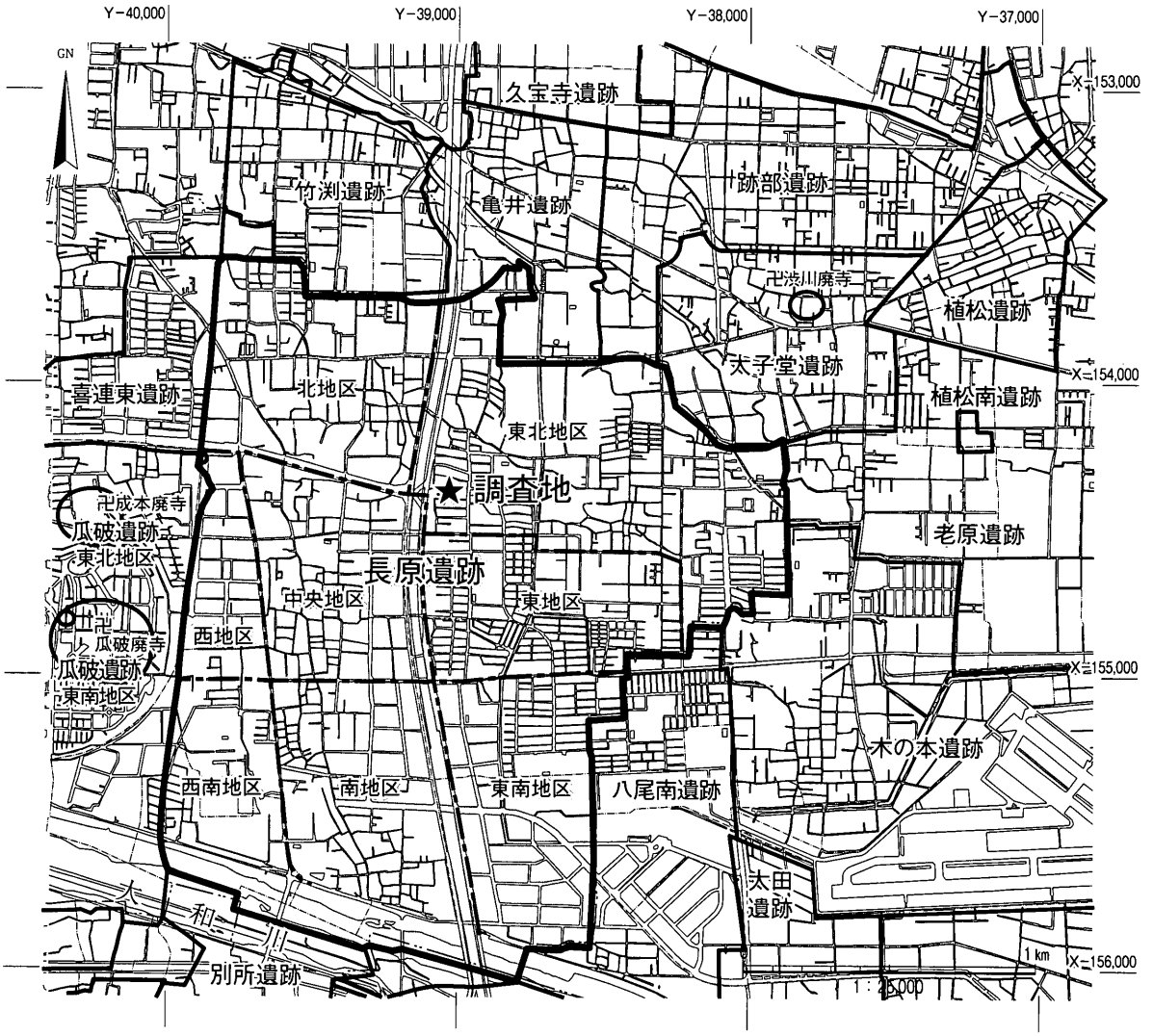


図２　周辺の遺跡と調査地

第Ⅰ章　遺跡の環境と調査の経緯

第１節　長原遺跡の立地と既往の調査

１)長原遺跡の地理的環境と調査地

長原遺跡は河内平野の南部に位置し、羽曳野丘陵から北に派生した瓜破台地の東部に立地する(図１)。瓜破台地は西縁が急な傾斜で、この傾斜がそのまま沖積層の下へと潜り込むのに対し、台地の東縁は北東方向に緩やかに沖積層の下に埋没している。そのため、瓜破台地の東縁に位置する長原遺跡では、低位段丘の埋没深度は比較的浅くなっている。また、長原遺跡の北側に拡がる沖積平野には幾筋もの河川と自然堤防が見られ、これらの自然堤防の上にはさまざまな時代の多くの遺跡が立地している。

長原遺跡は大阪市平野区長吉長原・長原東・長原西・出戸・川辺・六反に所在する、後期旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。1973年に地下鉄谷町線延長工事に伴う試掘調査で数基の古墳が発見されて以来、約30年にわたって発掘調査が継続して行われている。これらの調査成果の蓄積により遺跡の全体像の解明が進んでいることや、厚い沖積層の堆積により各時代の遺構面が良好に残存していることなどでも著名な遺跡として知られている。調査の進展と同時に遺跡の拡がりが逐次確認され、現在では遺跡は東西約2.0km、南北約2.5kmの範囲に及ぶ。このため、遺跡全体を８つの地区に区分し、それぞれ北・東北・東・東南・中央・南・西・西南地区と呼称している(図２)。

本書で報告するNG07－１次調査が行われた長吉出戸８丁目は、長原遺跡の東北地区に位置する(図２)。東北地区は長原遺跡の中でも低位段丘層以下が地中深くに埋没し、沖積層が厚く堆積する地域である。東北地区の北・東端は八尾市との市境となり、亀井・太子堂・老原・木の本などの遺跡と隣接する。

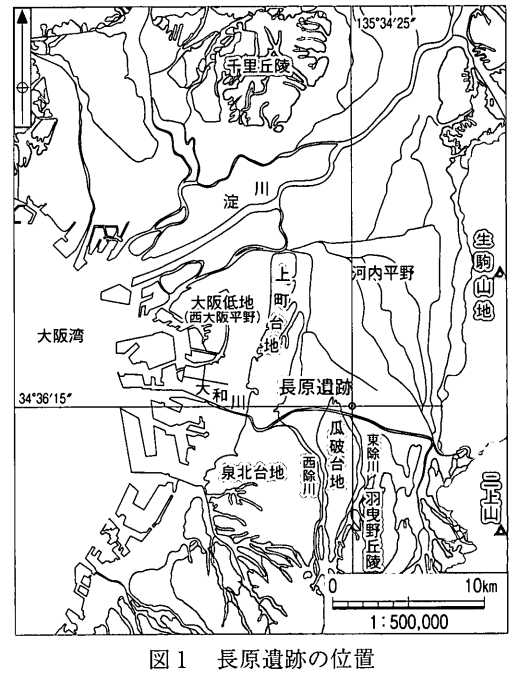


図１　長原遺跡の位置

２)既往の調査

長原遺跡東北地区ではこれまで多くの発掘調査が実施されている。以下にそのおもなものを記す。なお各調査の文献名は表１・２を参照されたい。

長原遺跡東北地区の本格的な調査は、1978～1985年の飛行場幹線特殊マンホール建設および近畿自動車道松原天理線建設工事に伴い、(財)大阪文化財センター（現

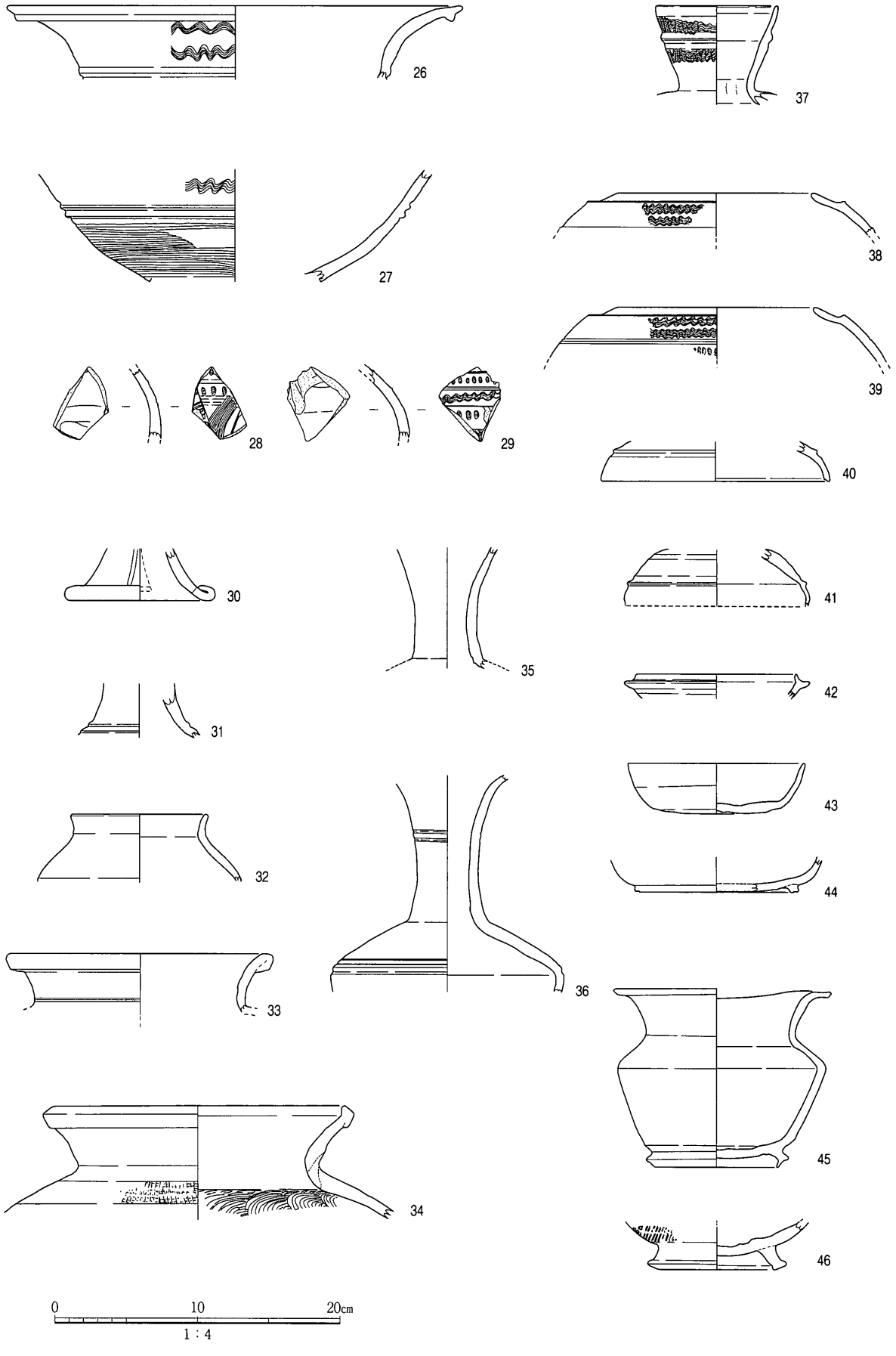


図17　NR1101出土遺物実測図(2)

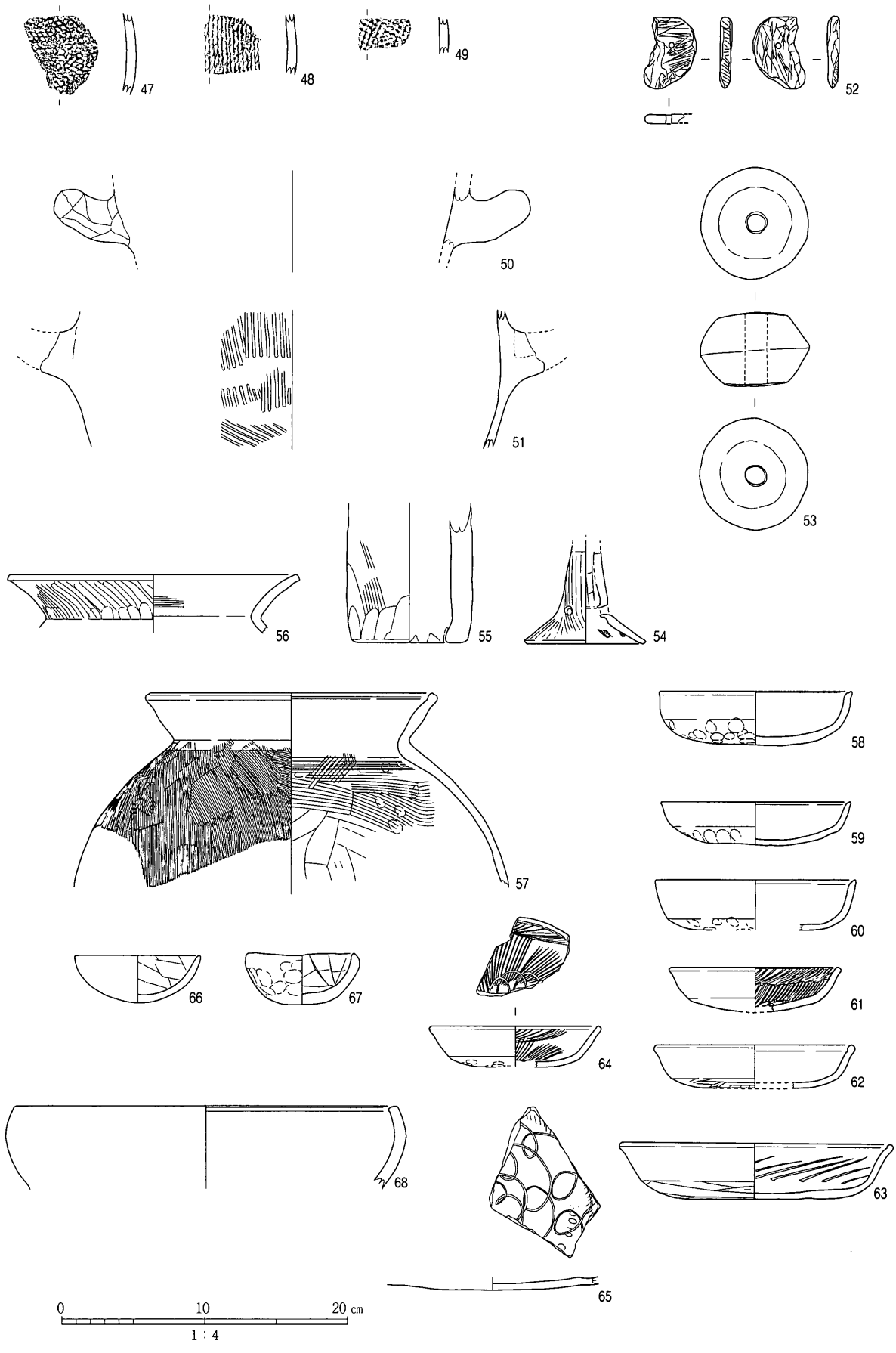


図18　NR1101出土遺物実測図(3)

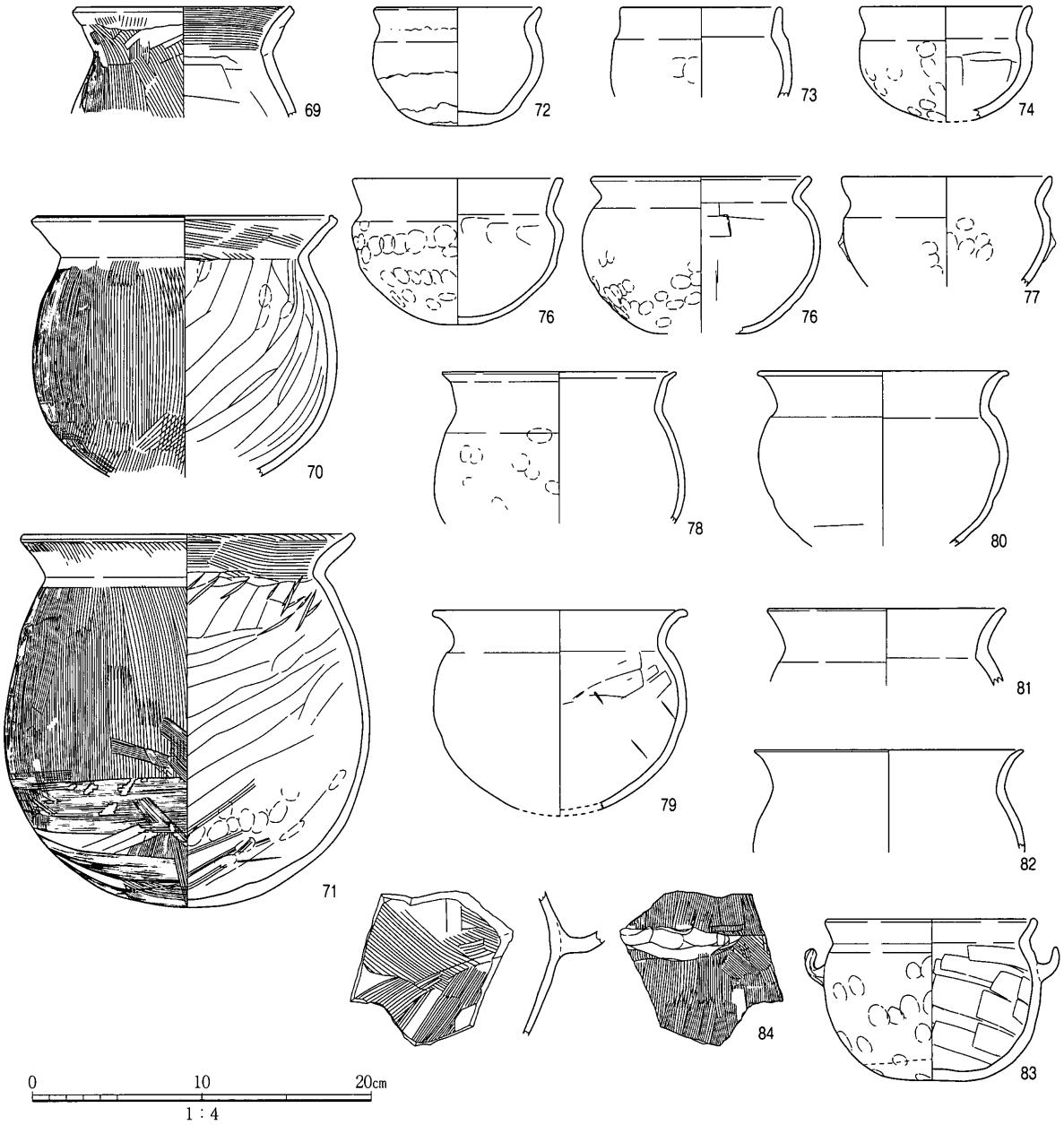


図19　NR1101出土遺物実測図（4）

44は杯Bである。43は底部が未調整である。42は飛鳥Ⅱ、43は飛鳥Ⅲ～Ⅳ、44は平城宮土器Ⅱ前後に位置づけられる。45・46は壺である。45はほぼ完形で、口縁部は水平に大きく外方に開き、肩部の屈曲は明瞭である。外面にはオリーブ灰色の自然釉が掛かる。平城宮土器Ⅱ～Ⅲのものであろう。

47～51は古墳時代中期の韓式系土器と考えられるものである。47～49は第11d層、50・51は第11c層から出土した。47～49は軟質の土器で、外面には縄席文タタキが施される。50・51は把手付鍋もしくは甑である。51は外面はタタキ調整で、把手の上方には切り込みを入れている。

52は滑石製の有孔円盤もしくは勾玉である。第11d ～11e層から出土した。抉れ部には破損したのちの再研磨が認められる。53は土製紡錘車で、算盤玉形を示す。第11d層から出土した。古墳時代中期に属するものであろう。

55は形象埴輪で第11b層より下部から出土した。馬形など動物埴輪の脚部と考えられる。

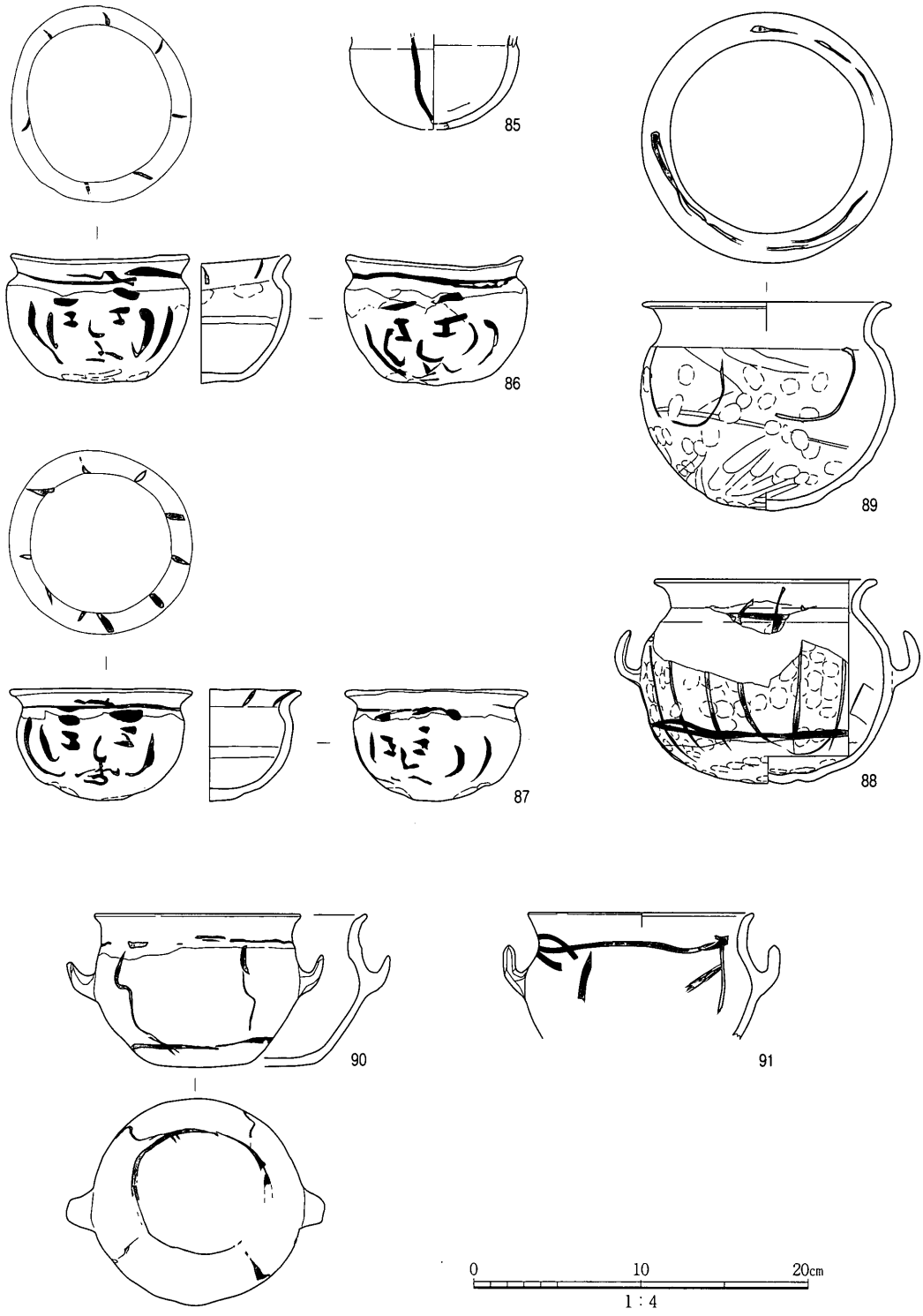


図20　NR1101出土遺物実測図（5）

54・56～91は土師器である。76・90は第11a層、63は第11b層、60・80・82は第11b層より下位、79は第11b ～11c層、59・61・68・70・71・77・78・85～88は第11c層、56・58・64～66・81・89は第11d層、54・67・69・74・84は第11d ～11e層、57は第11e層、62・72・83・91は第11層最下部付近、73は細かな層準は不明であるが第11層からそれぞれ出土した。

56・57は古墳時代中期の甕である。57の体部は球形で、口縁部は直線的に外方に開く。内外面とも

にハケメ調整が施される。

54は高杯である。脚部から裾部へと屈曲をもって移行し、円形のスカシ孔がある。

58～64は杯である。58は外面にはユビオサエの痕跡がある。61は内面に２段の放射状暗文と螺旋状暗文が施されている。62～64は杯Ａである。62の底部付近はケズリ調整である。63の内面には放射状の暗文が、外面底部付近にはケズリ調整が認められる。64は内面に２段の放射状暗文と螺旋状暗文が施されている。飛鳥時代に遡る可能性があるものも含まれるが、概ね平城宮土器Ⅱ～Ⅲに中心があろう。

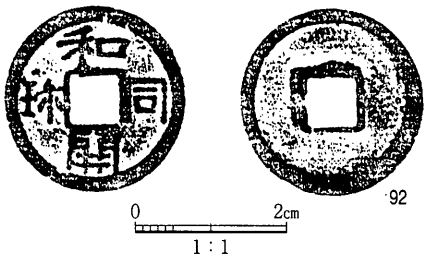


図21　NR1101出土銅銭拓影

65は皿である。内底面には螺旋状暗文と放射状暗文が施されている。

66・67は小型の椀である。ともに内面は板ナデ調整で、外面は67はユビオサエが施されている。

68は鉢である。口縁部は内湾し、端部は平坦な面を持つ。

69～82は甕である。69～71は甕Ａ、72～82は甕Ｂである。69～71は体部外面と口縁部内面にハケメ調整が施されている。体部内面はナデ調整である。70・71は下膨れの形状で、70の口縁部は上方に拡張し、端部は面を持つ。72～82は体部外面はユビオサエ、内面はナデ調整で仕上げられる。体部と頸部は強いナデにより明瞭に区分される。口縁部は屈曲を持って外反するものがほとんどであるが、73のみ屈曲が弱い。平城宮土器Ⅱ～Ⅲであろう。

83・84は把手付甕である。83は平底に近く、体部外面がハケメ調整、内面がユビオサエで、頸部には強いナデが施される。84は内外面ともにハケメ調整である。

85～91は墨画土器で、86・87は人面墨画土器である。86・87は２面に人面が描かれる。眉・目・鼻・頬など各部の表現のほか、頸部に直線を描き、口縁部内面に放射状の線を配するなど、極めて似通っており、同一の人物により描かれた可能性が高い。85は体部に縦方向の線を描くが、破片のため全体の構図は明らかでない。90・91と同様の文様の可能性がある。88は頸部と底部付近に横方向の圏線を描き、これらを多数の縦方向の直線でつないでいる。89は体部には「U」字状、口縁部内面には直線状の文様が描かれている。90・91は把手付甕に描かれている。頸部と底部付近に横方向の圏線を描き、これらを多数の縦方向の４本の直線でつなぐという類似した文様である。

92は和同開珎で、いわゆる隷開和同(新和同)である。第11層の最下部から出土した。

上記で見たようにNR1101から出土した遺物は、大きく時期が遡るものは別として、平城宮土器Ⅱ～Ⅲを主体とし、奈良時代前半の流路と考えられる。また、最下部からも奈良時代の土器が出土していることから、本来は重複して存在した古墳～飛鳥時代の流路はNR1101の水流によって失われたといえよう。

これらのほかに、ウシ・ウマなどの動物遺体が多く出土した。遺存状況は悪く、解体痕などの詳細は不明である。

NR1101出土遺物の内容は墨画土器のほかウマ・ウシなどの動物遺体など、祭祀に係る遺物を多く含むことが注目される。これまでの上流部での調査でも確認された内容であり、本流路において祭祀

行為がなされていたことを示す資料である。

2)奈良時代の調査地のようす

これまでの調査成果もあわせて考えると、調査地には大きく見て、西流する奈良時代の自然流路NR1101があったことが判明した。流路からは墨画土器やウマ・ウシなど、祭祀行為を窺わせる遺物が多く含まれており、水辺にて祭祀行為が行われていたことを追認する結果となった。しかしながら今回の調査では、具体的に祭祀を行った場所については明らかにできなかった。

これまでの調査では、本流路と重なって下部に古墳～飛鳥時代の流路があったことがわかっているが、本調査地においてはNR1101の激しい水流により失われていた。また、出土遺物の時期も上部と下部とで大きな差は認めがたいことから比較的短期間のうちに埋没したと推定できる。その後は後述するように湿地状の窪地として平安時代まで痕跡が残っていたものと考えられる。

第４節　平安時代以降の遺構と遺物

１）第10層出土遺物（図24、図版17）

第10層は、粗粒砂混り粘土質シルト～粘土からなる自然堆積層であり、NR1101埋没後の窪みに堆積した地層である。本層からは以下の遺物が出土した。

93は土師器小皿で最上部付近から出土した。平安時代Ⅲ期頃のものであろう。94は土師器蓋でつまみは高い。細かな時期は決しがたいが奈良時代中葉以降のものであろう。95は形象埴輪である。筒形であり動物埴輪の脚部と考えられる。96は土師質の平瓦である。全体的に磨滅しているが、凹面には布目痕がある。103は須恵質の平瓦片で凸面に縄タタキ、凹面に布目を残す。

第11層に奈良時代後半の遺物が含まれていなかったことから、NR1101が奈良時代前半のうちに急速に埋没した後、平安時代にかけて長期間湿地状の窪みとして残されていたと考えられよう。

２）第９層下面の遺構（図22、図版11）

第９層は作土層であり、本層を除去すると下面にて多数の踏込みとみられる窪みを検出した。また、北西部においては、高さ0.05mほどで東西方向に踏込みの少ない部分が帯状に広がっており、畦畔の痕跡の可能性がある。

３）第９層出土遺物（図24・図版12・17）

第９層からは以下の遺物が出土した。

97は土師器小皿である。平安時代Ⅳ期古段階のものであろう。98は土師器皿である。平安時代Ⅲ期新～Ⅳ期古段階のものであろう。99は和泉型の瓦器椀である。平安時代Ⅳ期中段階のものである。

これらの遺物から第９層の年代は11世紀末～12世紀前半に位置づけられよう。

４）第４層上面の遺構（図23・図版12）

調査は第４層上面から開始した。そのため第４層以上に掘込み面がある遺構も同一面での検出となっている。また、南半部については、第６層上面まで機械によって掘下げたため、遺構検出作業は行えていない。

第４層上面は、水成層である第３層によって覆われている。第４層上面では踏込みとみられる窪みが多数検出された。また、西端部では踏込みが認められる部分と認められない部分とが平面的に区分できた。この部分は調査地の西および南壁では、わずかながら畦畔状の高まりとして観察することができたため、平面では高さの違いとして検出できなかったが、南北方向の畦畔とそれに取付く東西方向の畦畔が存在した可能性がある。断面の観察では、南北方向の畦畔は下幅で2.0m程度、高さは0.1m未満、東西方向の畦畔は下幅で2.0m程度、高さは0.1m未満である。

時期を決するだけの遺物は出土していないが、周辺の調査結果から鎌倉時代の水田面に相当すると

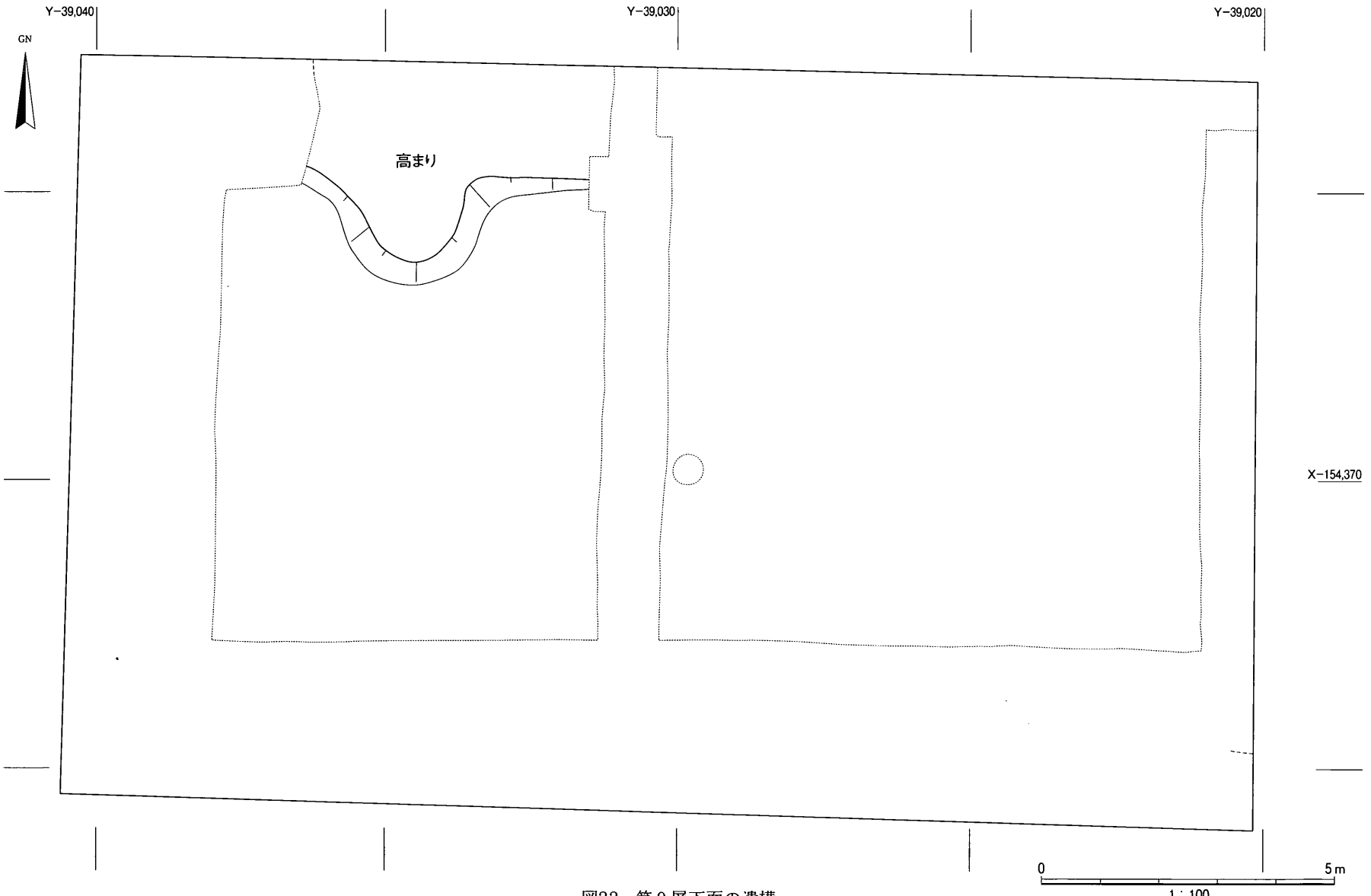


図22　第９層下面の遺構

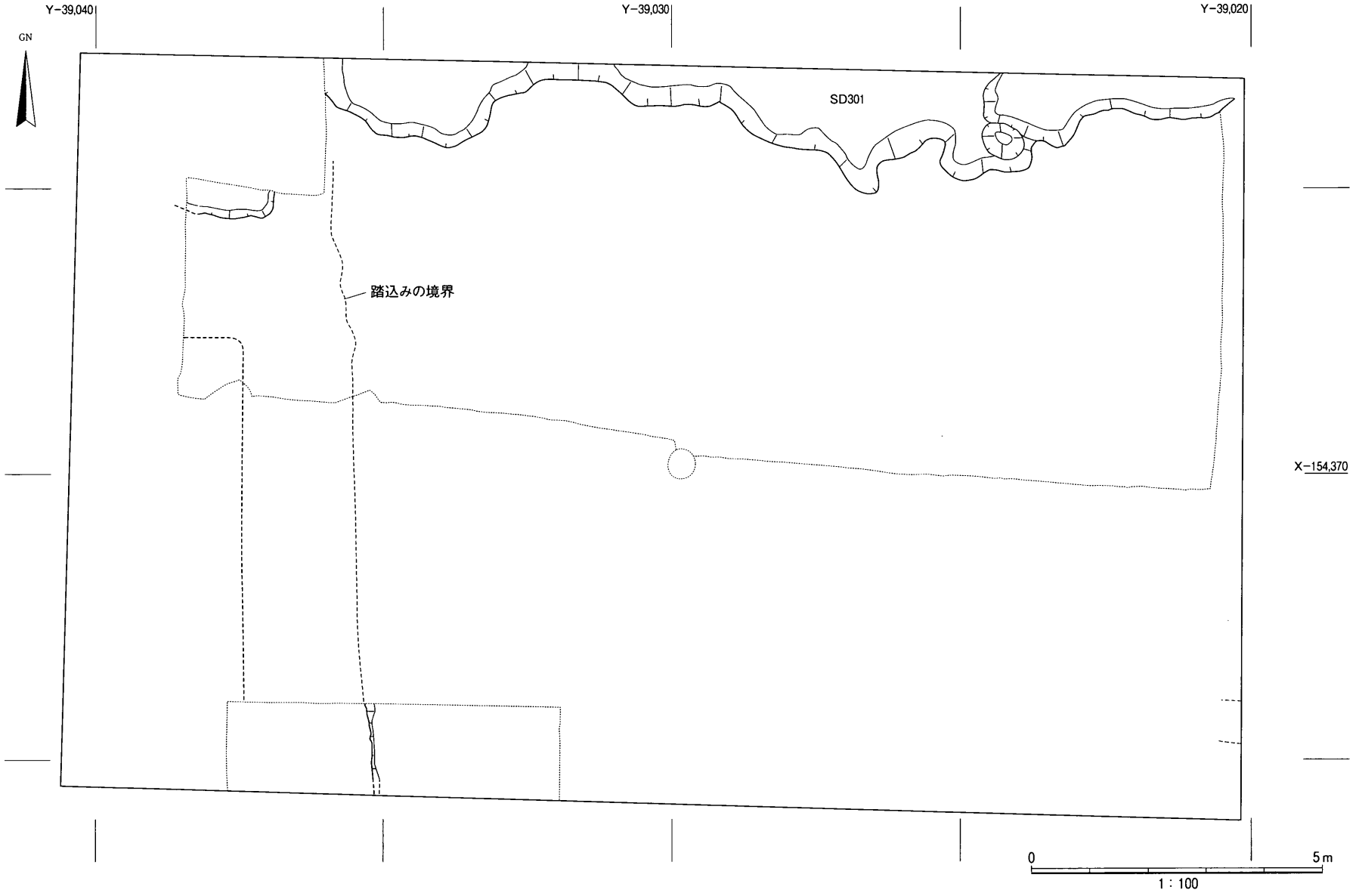


図23　第４層上面の遺構

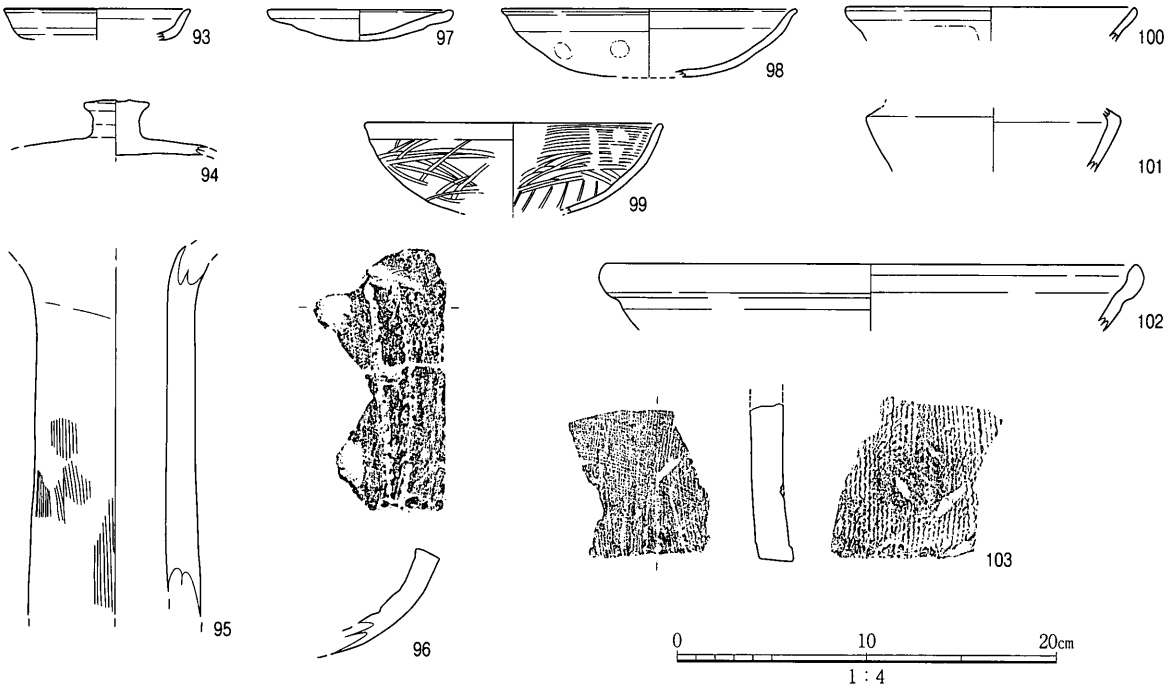


図24　各層出土の遺物実測図

(第10層：93～96・103、第９層：97～99、第２層：100～102)

考えられる。

また、調査地北端では、不整形ながら北へと下がる溝状の落込みSD301を検出した。掘込み面は断面の観察から、第３層上面であることを確認した。幅は2.0m以上、深さは0.3mで底は細かな凹凸が認められるものの概して平坦に近い。埋土は第４層を始めとする偽礫を多く含む埋戻し土である。遺物は出土しなかった。

5)第２層出土の遺物(図24)

壁面からの採集であるが、第２層からは以下の遺物が出土した。

100は肥前陶器皿である。101は青磁の小壺である。102は須恵器鉢で、下位層からの混入である。

古い遺物も含んではいるが、第２層の年代は江戸時代といえ、周辺の調査結果とは矛盾しない。

6)平安時代以降の調査地のようす

奈良時代の自然流路が奈良時代前半のうちに埋没後、平安時代までは湿地状の堆積であったといえる。その後、第９層が示すように平安時代後半には耕作地として利用されはじめ、現代にいたるまで耕作地として利用されていたといえる。

第Ⅲ章　遺構と遺物の検討

第１節　調査地周辺の弥生～奈良時代のようす

１)はじめに

本章では今回の調査結果に加え、調査地周囲の既往の調査成果を踏まえつつ、出戸自然堤防北端部での土地利用の変化について概観する。

今回の調査で得られた概要を記すと以下のようになる。弥生時代中期後半では、掘立柱建物２棟のほか土壙が確認され、集落の一部であったことが明らかとなった。古墳時代中期には土壙があるのみで詳細は不明である。飛鳥時代の遺構は確認できなかったが、周辺の調査から奈良時代のNR1101と同じ位置に自然流路があったものと推測できる。

奈良時代には飛鳥時代から継続する自然流路が調査地のほぼ全域を覆っている。墨画土器やウシ・ウマなどの動物遺体の存在から、この流路において祭祀行為が行われたことは間違いない。奈良時代前半の比較的短期間のうちにこの流路が埋没したのちには、平安時代にかけて湿地状となる。平安時代後半には、作土層や畦畔が認められることから耕作地として利用され、耕作地としての利用は近年にいたるまで継続するようである。

こうした今回の調査成果を、周辺での発掘調査成果とあわせ関連づけて捉えてみたい。時代的には奈良時代までを対象とする。

２)弥生時代中期

今回の調査では弥生時代中期後半の掘立柱建物２棟と土壙が確認された。同時期の長原遺跡東北地区西半で見つかっている遺構を図25に示した。既往の調査については表１・２を参照されたい。

同時期の居住域として、東のNG02－１次調査地では、弥生時代中期後葉の建物が２基と井戸１基が検出されている。SB801は直径7.5mに復元される円形プランの建物である。この建物のものとみられる排水溝SD805が北東に延びており、NG04－３次調査地でその続きが見つかっている。NG06－４次調査地では弥生時代中期後葉の土器集積が調査地東部で検出されたが、遺構としての密度は希薄であり、西に向って地形がやや下っていた。さらに北西の城山遺跡その２調査区でも、同時期の建物群が見つかっている。このうち掘立柱建物は梁行側の柱間隔が広く、今回検出した建物の平面形と共通することが注目されよう。

今回の調査地の東から北東にかけて位置するNG03－５次調査地南区では２基の方形周溝墓が検出されている。これらの遺構から出土した土器は弥生時代中期中葉から後葉の前半期にかけてのものである。また、その西側に位置するNG06－３次調査南調査地では周溝状の遺構が確認されている。溝

からは体部下半に穿孔のある土器が多数出土していることから、溝は方形周溝墓のものである可能性が高い。時期はNG03－５次調査地と同様であり、弥生時代中期の墓域が広く存在していると考えられる。

このように、弥生時代中期にあっては、東西に拡がる集落域の北に墓域が隣接していた景観が復元できよう。

３）弥生時代後期

弥生時代後期の遺構分布を図26に示す。

今回の調査では、弥生時代後期の遺構は検出できなかった。また、遺物の出土量もごくわずかであった。しかしながら北西の城山遺跡その２地区や北のNG06－４次調査など周辺の調査では、建物跡が見つかっている。NG06－４次調査地で検出したSB802は直径10.00mの大型の竪穴建物であり、同地区の中では最大級の規模である。鉄鏃や不明鉄製品、ガラス玉１点が出土しており、規模・内容ともに周辺の竪穴建物群において核となる存在であったと推測される。また、今回の調査地の西隣で行われたNG08－３次調査では、多量の遺物のほか、竪穴建物が検出されており、一帯が集落域の一部であったことが明らかになっている。

このことから今回の調査地では小面積の調査という事情もあり、たまたま同時期の遺構については遺存していなかったものと考えられる。

４）古墳時代中期

古墳時代中期の遺構分布を図27に示す。

今回の調査では、土壙が２基確認されたのみであるが、奈良時代前半の自然流路NR1101から多くの遺物が出土している。近隣では、古墳時代前期の遺構・遺物は少ないが、古墳時代前期末から中期にかけて、NG06－３・４次調査地では竪穴建物、総柱建物、柱穴、溝が検出され、NG03－５次調査地では溝や馬の埋葬が見つかった。

竪穴建物はNG06－４次調査地で４棟、NG06－３次調査地で３棟が見つかっており、NG06－３次調査地では竪穴建物に隣接して総柱建物がセットで設けられ、１つの居住単位を構成していた可能性がある。

また、NG06－４次調査地SB7001床面からは多くの粘土が出土している。とりわけ南東部粘土塊では、拳大の粘土を集めた状況が観察された。これらの粘土は、土器の原料としての他、粘土槨や竈材、柱の根巻きや貼床材として備蓄されていた可能性がある。

また、NG03－５次調査ではウマの埋葬が認められた。ウマの埋葬は四條畷市の蔀屋北遺跡でも確認されている。ともに韓式系土器が多く出土する遺跡であることから、ウマの飼養と渡来人との係わりが示唆される。

また、居住域が拡がっていたNG06－３・４次調査地の南東に隣接するNG02－１・04－３次調査地では畠の畝間とみられる小溝群が分布しており、居住域の北西の城山遺跡D地区では水田が見つ

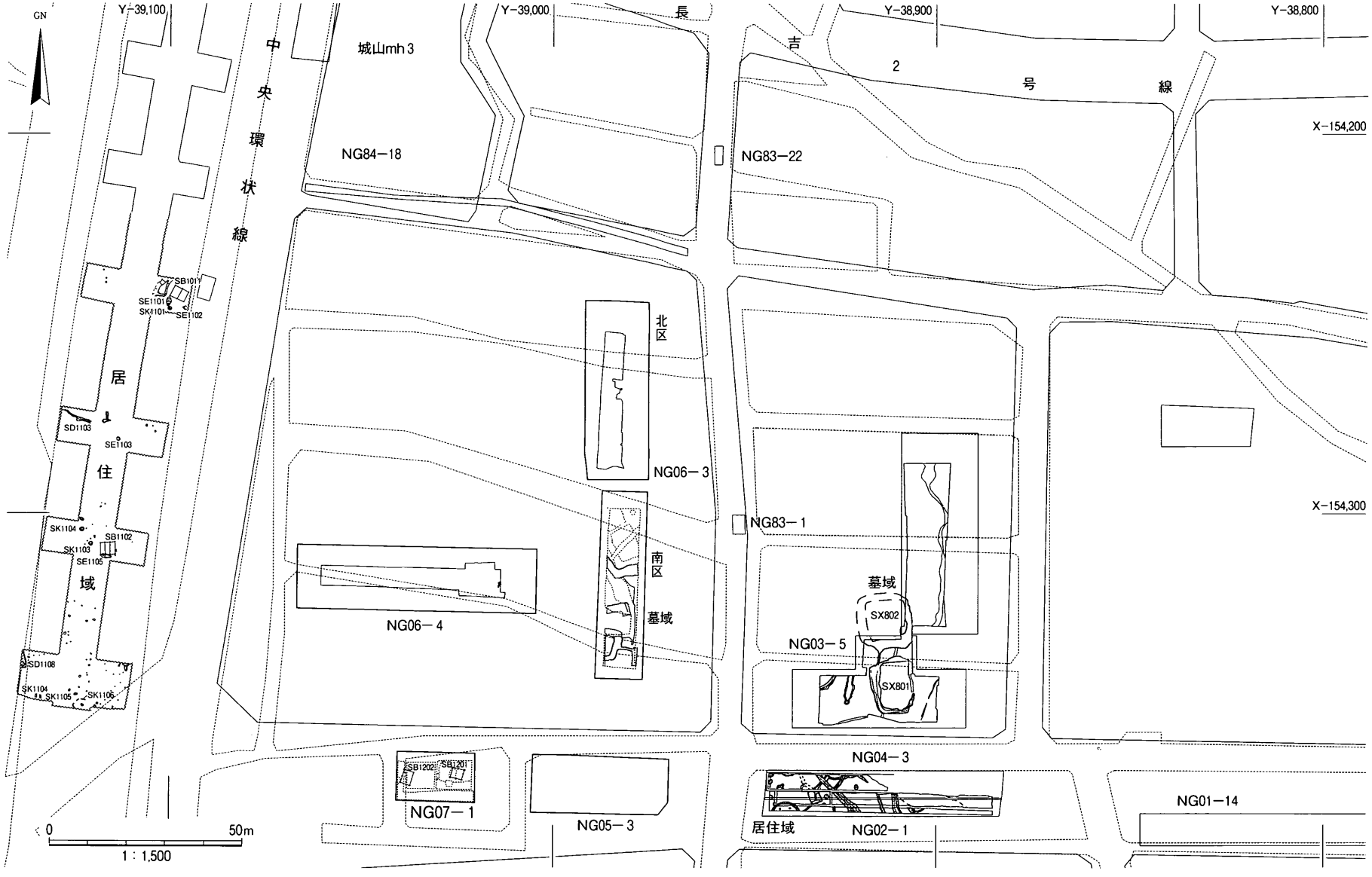


図25　弥生時代中期の長原遺跡東北地区西半の遺構分布図

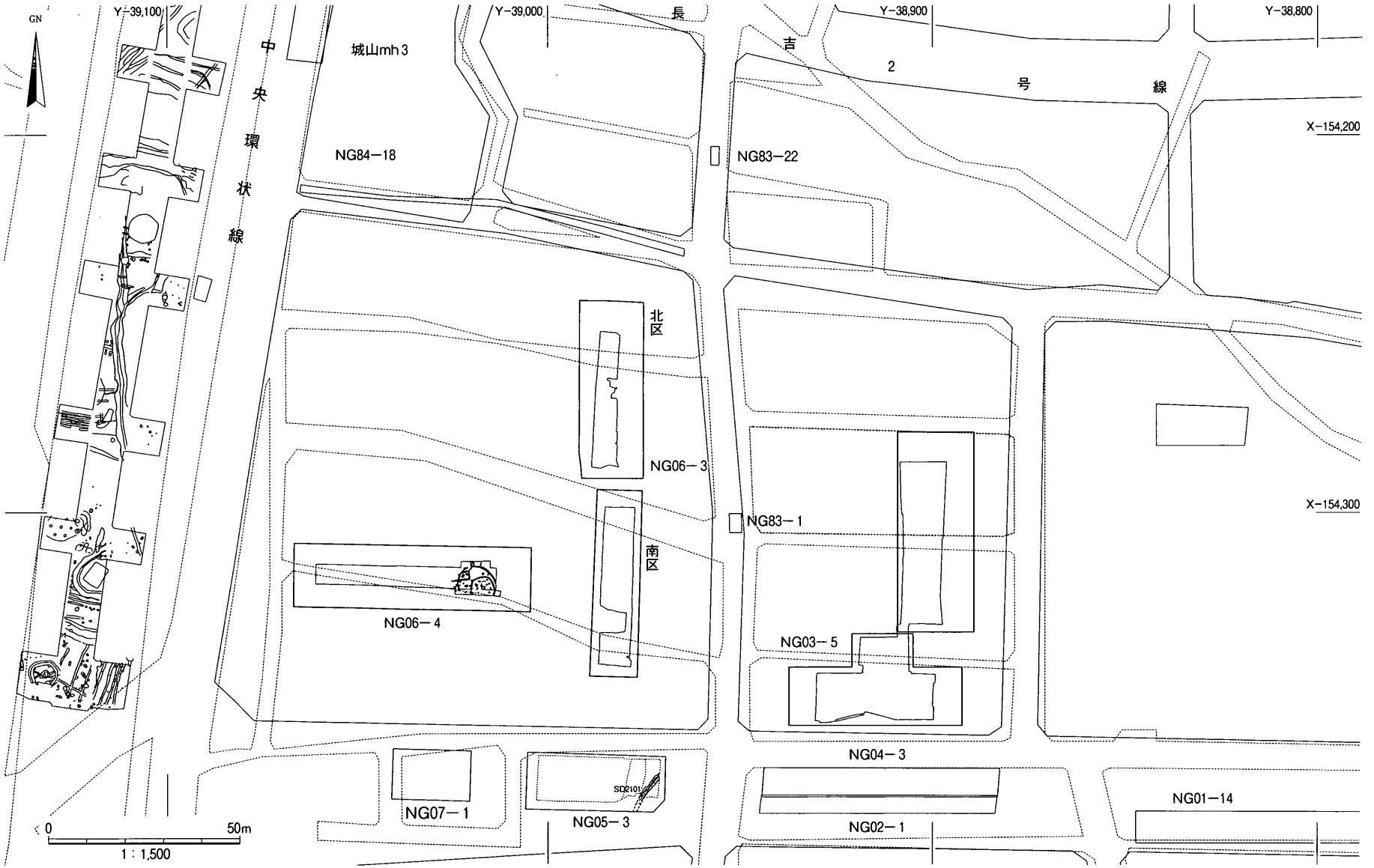


図26　弥生時代後期の長原遺跡東北地区西半の遺構分布図

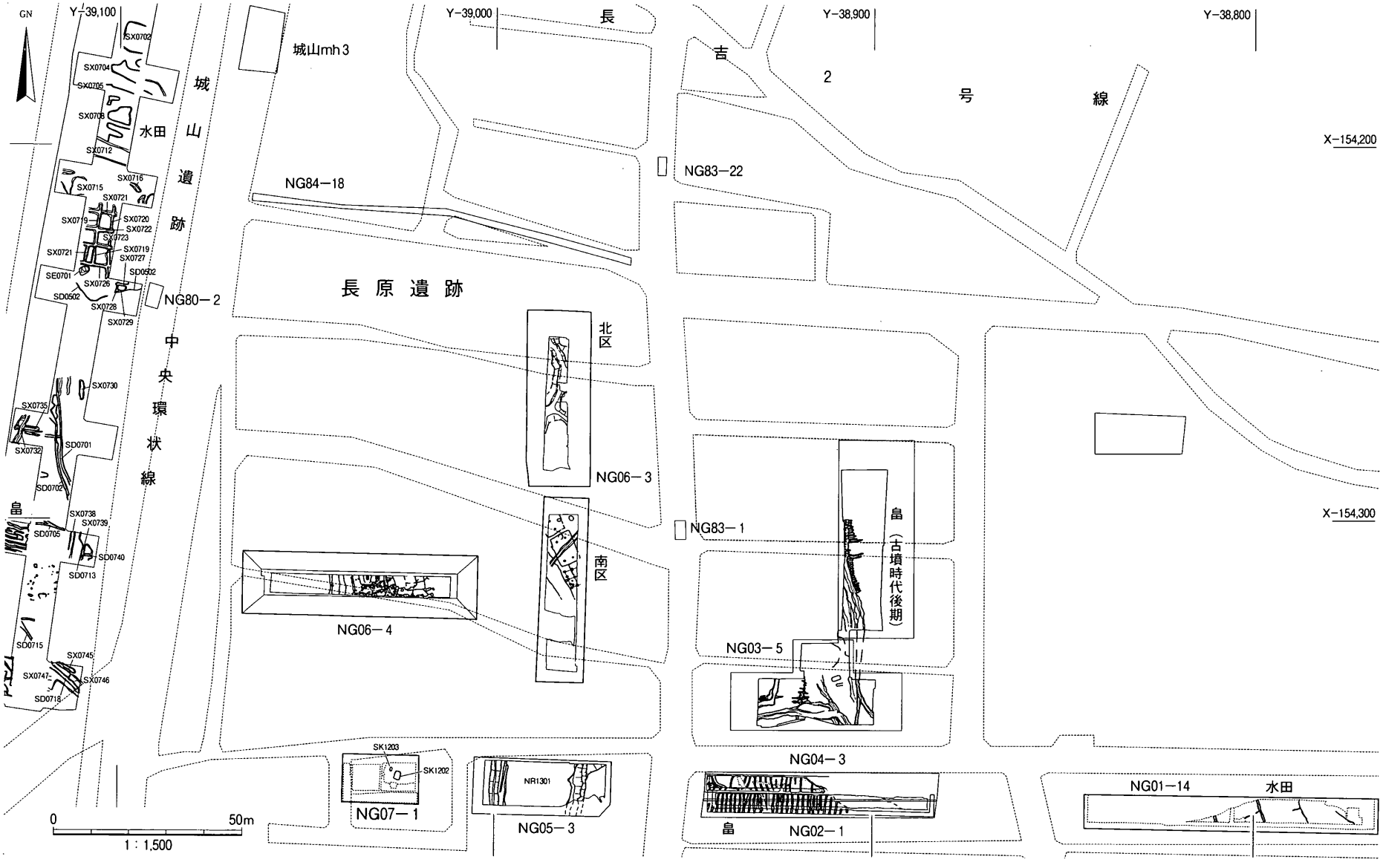


図27　古墳時代中期の長原遺跡東北地区西半の遺構分布図

かっている。集落を取り囲むように耕作域が拡がっていた景観が復元できよう。

こうした配置から見ると今回の調査地は集落域と耕作域との境付近に位置しているといえる。一部分の調査のみであるため、今回の調査地が居住域であるのか、耕作域であるのかを断定するだけの資料はないが、遺構が希薄であることを積極的に考慮すれば、調査地付近は耕作域であったといえるかもしれない。

5）古墳時代後期～飛鳥時代

今回の調査では当該期の遺構は確認できなかった。先述したように古墳～飛鳥時代の自然流路が本来ならば存在した場所であるが、奈良時代の自然流路NR1101の急激な水流によって失われたと考えられる。

調査地の北東に位置するNG03－５次調査地では、古墳時代後期の小溝群が検出された。小溝群はKM01－４次調査地ではイネ、アワ、ヒエの種子が、NG02－８次調査地ではイネなどの植物種実が検出され、耕作に係る遺構と考えられている。また、東に位置するNG02－１・04－３調査地においても古墳時代中期～後期の小溝群が検出され、畝間溝と推定されている。自然科学的な分析の結果、イネ科の花粉が多出している。

このように古墳時代中期～後期にかけては耕作域が周辺に拡がっていると想定できよう。また、続く、飛鳥時代には調査地の西側のNG08－３次調査で水田跡が検出されている。周辺でも同時期の水田跡が見つかっており、条里制の施行についても論じられている。このことから飛鳥時代にも周辺は耕作域として利用されていたものといえる。耕作に際しての用排水は、NR1101の前身となる流路が果たした役割は大きいと思われる。

6）奈良時代

奈良時代の遺構分布を図28に示す。

今回の調査では奈良時代前半の自然流路NR1101が確認された。この流路は東のNG01－14・02－１・04－３・05－３次の各調査でも確認されており、蛇行を繰り返しながら、大きく見れば西流している。この流路の下位には、古墳～飛鳥時代の流路が重複しており、長期間流路が存在するような地形の変換点であったと考えられる。この流路の位置と、古墳時代以前の土地利用の分布の境が共通するのは決して偶然ではないであろう。

今回の調査を含め、この流路からは人面墨画土器やウマ・ウシなどの動物遺体など、祭祀行為を窺わせる資料が多く出土していることが特徴的である。祭祀を行った具体的な場所については明らかでないが、流れの方向から考えると、土器に磨滅が少ないものが多いことから、今回調査地からほど遠くない東の上流域が想定できよう。NG01－14次調査ではこれらの祭祀関係の遺物とともに解体痕跡のあるウシが見つかっており、重要な候補地のひとつであるといえよう。

長原遺跡周辺では飛鳥時代以降大規模な水田開発がなされ、奈良時代には爆発的にその範囲が拡がる。条里制に基づいたと推定される南北・東西方向の畦畔も確認され、国家など強大な権力を背景に

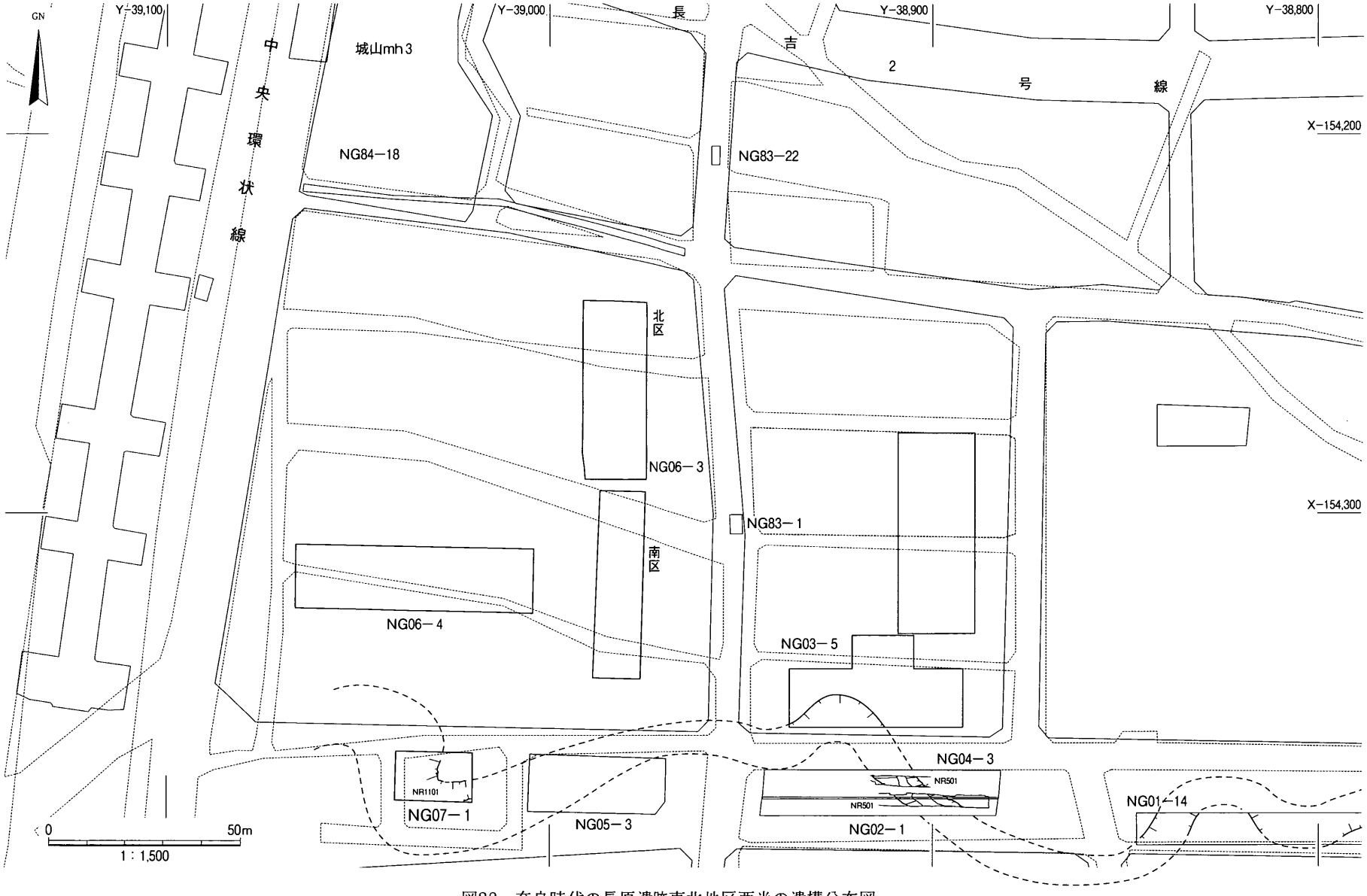


図28　奈良時代の長原遺跡東北地区西半の遺構分布図

した大規模な開発主体による経営がなされたことは想像に難くないであろう。こうした大規模な水田経営を背景としてこの自然流路において祭祀が行われたと考えられよう。この流路は奈良時代前半に急速に埋没する。皮肉にもこの洪水を引き起こした背景にはこうした大規模開発による上流部における保水力の低下であったのかもしれない。

第２節　地層の水平断層について

長原遺跡では、地層の液状化・流動化や、これに伴う噴砂など、地震によるとみられる堆積異常現象が随所で観察されてきている。そのひとつ、地層中を極低角に拡がって上盤と下盤をほぼ水平に分断し上盤の移動を伴う剪断(水平断層(註１))は、沖積層の厚い遺跡東北地区で1995年に確認されて以来、いくつかの報告がある[大阪市文化財協会1996a・2002b・2008cなど]。この断層は地層面との関係にあっては層面断層に類するものであるが、ここでは、本調査地で観察された水平断層を記載し、その成因と時期について、本調査地東側のNG05－３次調査地の観察と合わせて若干の検討を行う。

１)水平断層の形態

本調査地の水平断層は、第11～13層中に認められる。調査地南壁の東西断面では、明瞭な一連なりの断層面が緩く波打ちながらほぼ水平に延び、中央部では下位に１～２面が分岐・派生している。西壁の南北断面では、南壁から続く断層面の上・下に分岐・派生し、２～３面が水平方向に延びている。分岐面の末端では、上盤が下盤に低角で衝上する傾向にあり、この傾向は特に東西断面で顕著である(図５・31)。

断層面は厚さ５cm未満の中粒～細粒砂やシルト質細粒～極細粒砂の断層ガウジを挟む部分と、面構造だけが認められる部分とがある。断層ガウジはガウジ周囲の地層堆積物の組成を反映しており、砂層中のものは砂質で、シルト層中のものは泥質である。また、NG05－３次調査地では、断層面のガウジが噴砂脈に連続する様子も観察されている[大阪市文化財協会2008c]。

２)水平断層の変位量

水平断層の変位量が求められた遺構は、第12層上面で検出したSB1201・1202と、第11層掘下げ中に検出した第12層上面の杭１・２である。

SB1201では６箇の柱穴すべてが、TP+6.8～6.9mに拡がる水平断層により上下に分断されていた。SP1203では上盤の柱痕跡が下盤の柱痕跡に対してN64°E方向に11cmずれていた。その他の５箇の柱穴は柱痕跡が下盤側で確認できていないため、計測値の精度は高くなく、特にSP1205・1206は下盤の柱穴が不確かではあるが、上盤・下盤それぞれの検出面における柱穴の掘形のずれをみると、SP1201がN58°E方向に15cm、SP1202がN60°E方向に13cm、SP1204がN56°E方向に14cm、SP1205がN44°E方向に16cm、SP1206がN43°E方向に22cmであった(図７・29)。

SB1202では６柱穴の内４柱穴で、TP+6.8m付近に拡がる水平断層による分断が確認できた。西列の３柱穴は柱痕跡により確認できたもので、SP1207がN85°E方向に24cm、SP1208がN92°E方向に22cm、SP1209がN77°E方向に14cm、上盤が下盤に対してずれていた。また、東列南端のSP1212では柱穴の掘形がN83°E方向に12cmずれていた(図８・29)。

杭１は、残存長155cmの上から75cm・直径80mmの位置で、TP+6.8m付近に拡がる水平断層により

図29　地震による水平断層の向きと距離

矢印の先がずれの向き、矢印の長さはずれの距離(実長の20分の1)

切断されていた。杭のずれは上盤側が下盤側に対してN71° E方向に14.8cmであった(図15)。

杭１の東151cmにある**杭２**もまた、TP+6.8m付近に拡がる水平断層により切断されていた。杭のずれは上盤側が下盤側に対してN52° E方向に13cmであった(図29)。

NG05－３次調査地では、南壁の東西断面で上盤が下盤に対して東へ27cmと14cm、中央の南北断面では北へ14cmのずれが記録されており、推定平均変位量はN52° E方向に25cmのずれとなる(図31)。

３)水平断層の微細変形構造

微細構造を観察するための試料は、下盤側**杭１**の西へ約90cmの箇所で、断層面のずれ方向と直交方向を含む２断面(以下、平行断面・直交断面と呼ぶ)から採取した。２試料とも砂質シルトからなり、両方の上盤側がともにより砂質である。試料は開口14.2cm×7.8cm、深さ2.5cmのプラスチックケースを壁面に押し込んで不撹乱で採取し、自然乾燥により大方の水分を徐々に除去したのち、凍結乾燥により水分をほぼ完全に除去した。その後、エポキシ系樹脂を含浸させ、片面を研磨して観察面とした(註２)。乾燥による収縮率は１～３％であった。構造図の描画にあたっては、試料の研磨面を実体顕微鏡およびルーペで直接観察するとともに、研磨面をスキャナーで読み取り、パーソナルコンピュータに取込んで液晶画面に画像表示させて、任意に拡大して観察しながらトレースした。

(ｉ)平行断面：平行断面の写真と構造図を図30－１・２に示す。主断層面はＡ７からＮ６に緩く波打ちながら延びている。波の峰はＤ６・Ｋ６に、谷はＡ６付近・Ｆ６・Ｎ６の東側(推定Ｏ６付近)にあり、波高は３～４㎜である。波長は60～80㎜で、東側へ徐々に長くなっている。試料全体に液状化による堆積構造の崩れや曖昧さがあるが、不鮮明ながら変形構造が認められる。

下盤では傾斜褶曲～反転褶曲が折り重なっている。褶曲軸はやや不規則に傾き、向斜軸がＫ６－I/Ｊ８：西落ち約50°、H/I６－E/Ｆ８：同約30°、Ｃ６－Ａ７：同約30°、背斜軸がＮ７－Ｍ８：同約50°、Ｊ６－G/H８：同約60°、Ｆ６－D7/8：同約30°、Ｄ６－Ａ８：同約30°であり、上方で傾斜を緩くして、断層面付近では上述の断層面の波状起伏に位相をずらしながら調和し、主断層面に収斂している。さらに後２者の向斜軸は下方：D7/8・Ａ８で40～60°東落ちに折れ曲がっている。

上盤では東上がりの微小断層とみられる線構造が認められる。Ｌ６－Ｎ４：東上がり約30°、Ｇ６－Ｊ５－Ｋ４：同10°～55°、Ｅ６－I４－Ｋ２：同20°～50°、Ａ６－Ｄ６－E/Ｆ５：同10°～25°、Ａ６－C/Ｄ５－Ｅ３：同20°～50°のほか、数筋が認められる。その中でＥ６－I４－Ｋ２とＡ６－C/Ｄ５－Ｅ３の断層はＡ６－Ｎ１に延びる暗色層を分断しており、また、どの筋も下方で主断層面に収斂している。上盤ではまた、Ｈ２－Ｈ６に延びる幅２㎜未満で垂直移動１㎜未満の極細いグラーベン状の断層帯や、Ｄ４付近に垂直移動１㎜未満の微小断層群が認められる。

(ii)直交断面：直交断面の写真と構造図を図30－３・４に示す。断層面はN4/5－Ａ4/5に延びるものと、これから低角で分岐してM4/5－F3/4－Ａ3/4に延びるものが認められる。

下盤では層厚２㎜内外の比較的泥質な４枚のラミナが認められ、その内の１層F5/6－K5/6－Ｍ５が中央で浅く皿状に凹んでいる。その凹みの中のＫ５付近のラミナには、南下がりで垂直移動３㎜以下の微小正断層群が認められる。また、凹みをつくるラミナの下位には、これと調和的にラミナＥ５

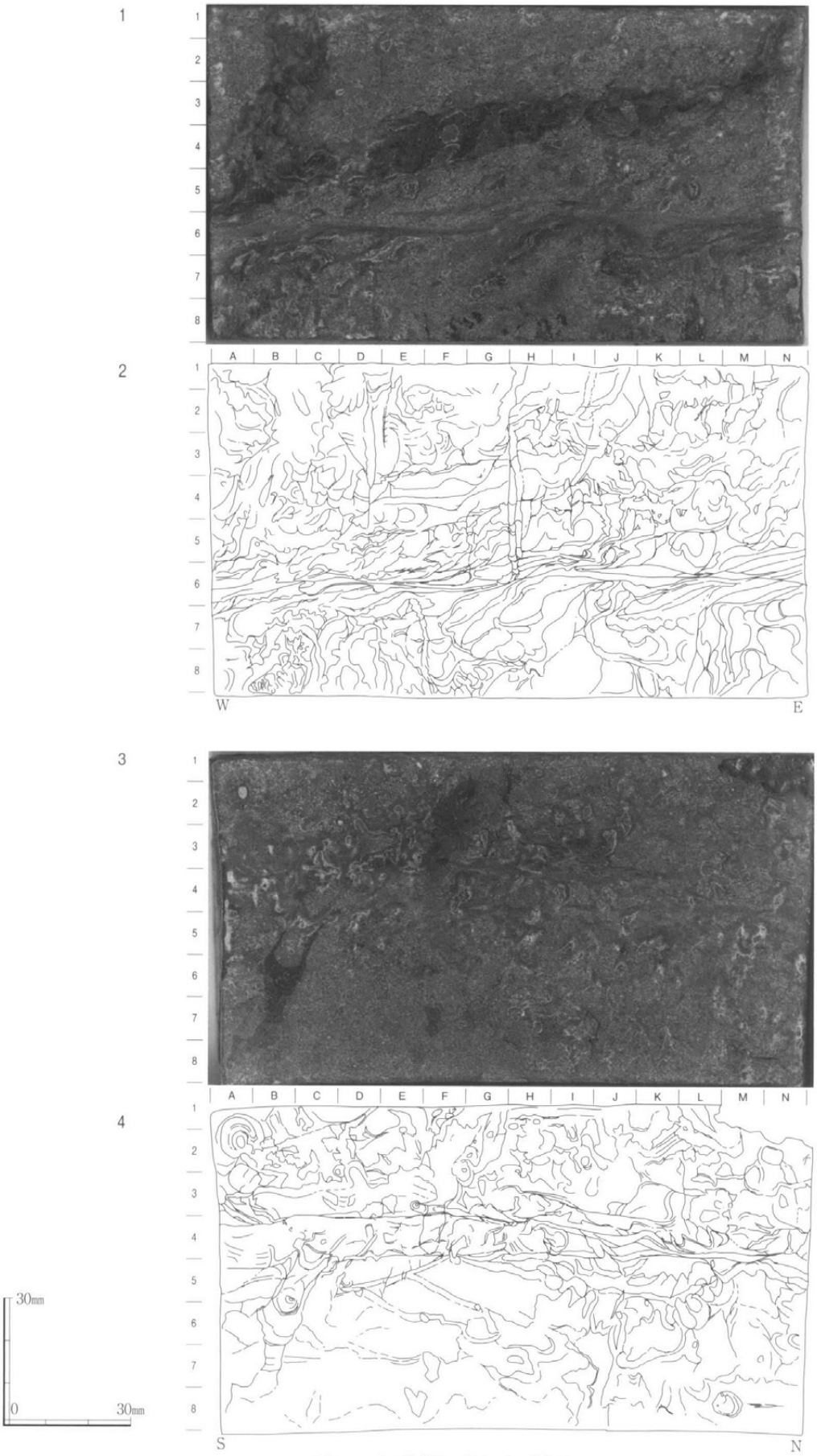


図30　水平断層の微細変形構造

1：ずれ方向に平行する断面写真、2：同、構造図、3：ずれ方向に直交する断面写真、4：同、構造図

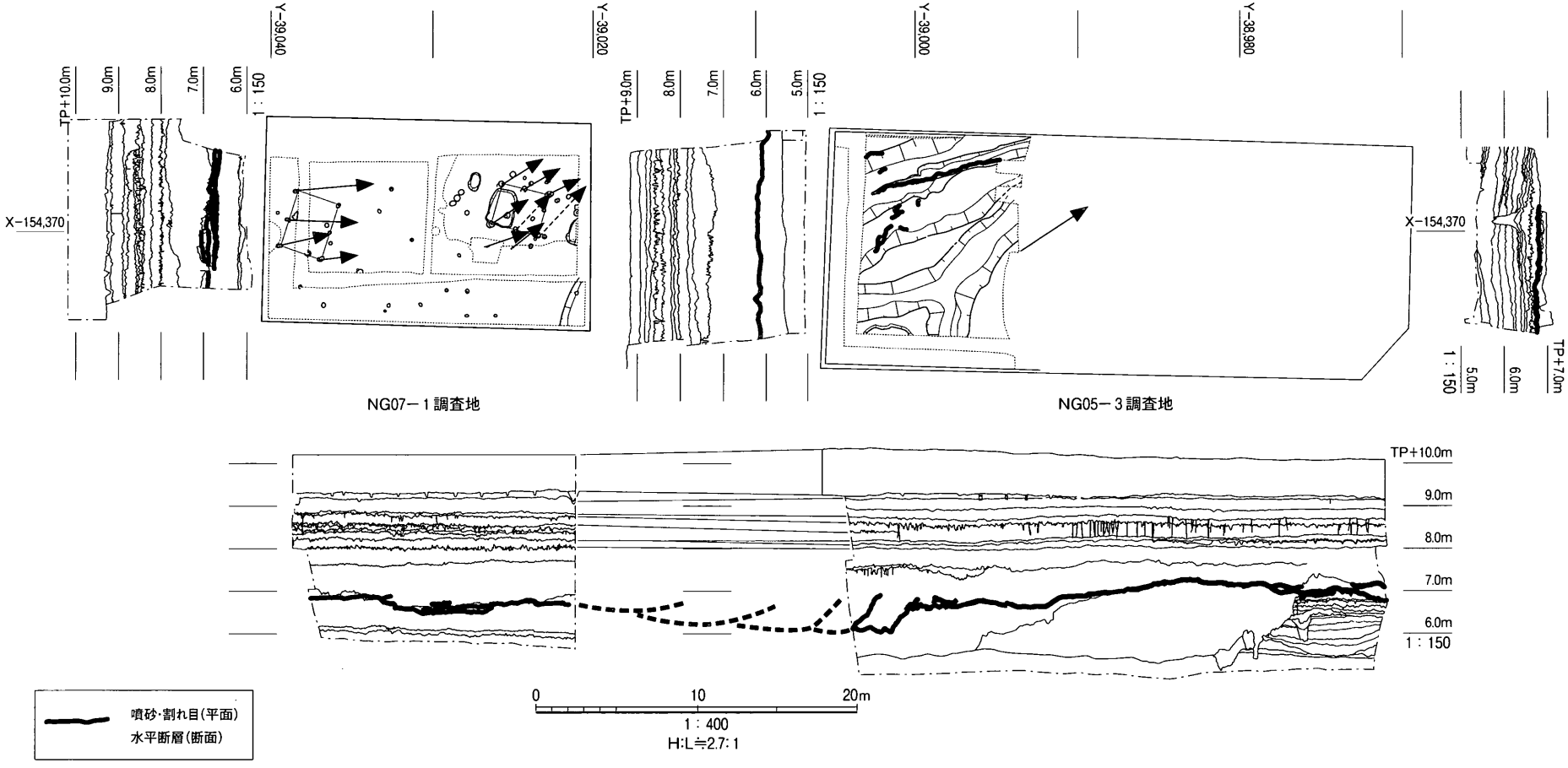


図31　NG05－3・07－1次調査地における水平断層による地層の変位

－H6とD5－F6が並行する。F4/5－K5/6－M5の凹み直下でE5－H6とD5－F6北側のK6～7付近には、微小な傾斜褶曲も認められる。

上盤ではN4/5－A4/5の断層面と平行する線構造K4－H3があり、M4/5－F3/4－A3/4の断層面と同様に、M4/5付近から分岐した断層面であろう。A3/4－G1を通る暗色層は、これらの断層面を覆うようにE3付近で北へ跳ね上がっている。

4)水平断層の成因と時期

平行断面に顕著に現れているように、断層面と上盤･下盤の変形構造は、地すべりや逆デュープレックス(註3)の脚や屈曲部、末端に見られる逆断層に類似した現象である。この水平断層面は水平方向のすべり面であり、杭を引きちぎる強烈なすべり現象を引き起こした原因は、地震の横揺れであると考えられる。下盤の褶曲軸のいくつかが折れ曲がっているのは、横揺れが反復した結果であろう。

SB1201では下盤の柱穴が不確かな柱穴2箇を除いた4箇の柱穴がN56°～64°Eにまとまっていて、平均N60°Eであり、上盤側の平均水平移動距離は13cmである。一方、SB1202はN77°～92°Eにまとまっていて、平均はN84°Eであり、上盤側の平均水平移動距離は18cmである。また、杭1・2はN71°・52°Eであり、移動距離は15cmと13cmである。これらのことは、同時存在したと考えられる第12層上面の遺構が、方向が少し斜交する2方向の横揺れによって被災したことを示唆する。すなわち、SB1201と杭2はN55°E前後(N52°～60°E)の横揺れにより、SB1202と杭1はN71°～83°Eの横揺れにより切断されたものと推定される。

図31のNG05－3次調査地側には、噴砂を伴う地面の割れ目が図示されているが、図示されていない現地で測定した割れ目を含めた14本の計測値は、N7°・32°・37°・38°・48°・50°・53°・54°・55°・58°・60°・62°・73°・74°Eである。N30°～40°E、N45°～65°E、N70°～75°Eの範囲にまとまりがあり、特にN50°～55°Eに高いモードがある。これらの割れ目は、上述した2方向のすべりによる圧縮により、当時の地面が引き裂かれて地割れしたものであろう。

なお、2方向のすべり現象が、1つの地震の本震や余震にあたるものか、表層の不等移動によるものかは明らかでない。その解明には、分岐する断層面や微細構造の解析が課題になる。

当該する地震の時期について簡単に検討しておく。[大阪市文化財協会2008c]によれば、NG05－3次調査地第12層から平安時代の土器を含む同第10層まで変形しているが、13世紀代の土器を含む同第9層には変形が認められていないことから、この地震は古代末～中世初めに発生した可能性がある。この結果は本報告でも同様である。そのころ大阪平野とその周辺地域が被災した地震には、1096年の永長東海地震、1099年の康和南海地震、1185年の文治京都地震などがある[寒川旭2007]。当該地震はこれらのひとつである可能性がある。

註)

(1) [狩野謙一・村田明広1998]の呼称による。

(2) 試料の樹脂含浸と研磨は、株式会社ニチカに委託した。

(3) [Woodcock and Fischer 1986]を引用した[垣見俊弘・加藤硯一1994]による。

第Ⅳ章　調査成果のまとめ

今回の調査では、弥生時代中期後半の竪穴建物や土壙、古墳時代中期の土壙、奈良時代の自然流路、平安時代～鎌倉時代の耕作痕跡など、各時期にわたって多くの成果をあげることができた。ここでは、時代ごとに調査成果を振り返ることで、まとめとしたい。

古墳時代以前

旧石器時代については遺物が出土せず、また、縄文時代についても縄文土器と考えられる土器細片が１点出土したのみであり、両時期の様相は明らかにすることができなかった。

今回の調査地で検出した弥生時代の遺構は中期後半のものである。掘立柱建物２棟のほか土壙を確認した。集落の一部であったといえる。当該期の集落は東および西で見つかっている。特に、検出された掘立柱建物の形状は、北西の城山遺跡の掘立柱建物と類似点が多く、これらの集団の関係を探るうえで興味深い。一方、方形周溝墓からなる墓域は北側に展開しており、集落と墓域との関係が明らかになったといえる。

弥生時代後期の遺構は確認できなかったが、近隣の調査で竪穴建物などが検出されていることから、集落域の一部であったと推定される。流路などの削剥により失われたか、偶然調査区内には分布していなかったのかもしれない。

古墳時代では中期の土壙を確認した。周辺の調査結果からは、調査地は集落というよりも耕作域であった可能性がある。また、奈良時代の流路からの出土遺物であるが、初期須恵器や韓式系土器など、古墳時代中期の遺物を多く含んでおり、同時期の集落が広範囲に拡がっていることを推測させるものである。

奈良時代

奈良時代前半に埋没する自然流路を検出した。これまでの調査成果と合わると本流路は大きく蛇行を繰り返しながらも、概ね西方向に流下していることがわかった。この下位には飛鳥時代の流路が重複しているが、今回の調査地では、検出できなかった。急速な水流によって、埋土が置き換わったものと推測できる。

自然流路からは土師器・須恵器などの多数の土器とともに人面墨画土器、ウマ・ウシなどの動物遺体など、祭祀行為を彷彿とさせる遺物が多く見つかった。東におけるこれまでの調査でも確認されており、奈良時代前半において本流路が祭祀の場であったことは確実である。

この流路は奈良時代前半期に急速に埋没することとなる。長原遺跡の水田開発と合わせ考えると、上流部での開発行為により、洪水による大きな被害を招いた可能性もあろう。

平安時代以降

奈良時代前半のうちに流路が埋没したあとも、平安時代にかけて湿地状の環境であったようである。平安時代後半には、畦状の高まりや、踏込み、作土層の存在などから、耕作域として利用されていく。

その後も幾度もの洪水による災害を被るが、耕作地としてその都度、復旧を果たしている。耕作域として利用される状況は江戸時代、さらには現代にまで、引き続くものである。

また、今回の調査では地層の水平断層などの大規模な地震の痕跡をいくつか確認し、自然科学的な分析を加えることができた。

調査地周辺では北側において多くの調査がなされている一方、南側ではそれほど調査件数は多くない。さらなる調査の積み重ねによって。各時期のより具体的な状況が明らかとなるであろう。

引 用・参 考 文 献

大阪市教育委員会・難波宮址顕彰会1978、「Ⅳ　長吉六反(推定・城山古墳跡)試掘調査」:『平野遺跡群試掘調査報告書』、pp.12－16

大阪市文化財協会1978、『長原遺跡発掘調査報告』

1979a、『大阪市下水道管渠工事に伴う平野区所在遺跡発掘調査(NG12次)報告書』

1979b、『大阪市下水道発進口建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG16次)報告書』

1979c、『関西電力管路埋設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG17)略報』

1980、『大阪市下水管渠築造工事(到達竪穴)に伴う長原遺跡発掘調査計画書』

1981a、『大阪市下水管渠築造工事(押込口)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80－１)略報』

1981b、『八尾～富田林局間同軸ケーブル方式工事(土木)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80－２)略報』

1982、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ

1983、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ

1984a、『下水工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83－１)略報』

1984b、『大阪市住宅供給公社長原六反用地ボーリング調査(NG83－５)略報』

1984c、『大阪市平野区長吉出戸における下水道工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83－22)略報』

1984d、『大阪市出戸六反地区幹線下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83－43)略報』

1984e、『仲東産業店舗建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG83－54)略報』

1984f、『吉内邸新築工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83－63)略報』

1984g、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83－65)略報』

1985a、『六反下水管渠推進工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84－４)略報』

1985b、『長吉出戸地区下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84－18)略報』

1985c、『地中送電線工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84－49)略報』

1985d、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84－86)略報』

1986、『大阪市土木局カルバート建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG85－17)略報』

1988、『長吉中学校増築に伴う長原遺跡発掘調査(NG87－67)略報』

1989、『(株)ビーバーハウスによる建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG88－６)略報』

1990、『長吉長原東市営住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG89－86)略報』

1992a、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ

1992b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ

1993、『長吉長原東市営住宅(第２期)建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG92－39)略報』

1994、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ

1996a、『大阪市都市整備局による長吉長原東市営住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG95－36)略報』

1996b、『大阪市教育委員会によるクラフトパーク建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG95－77)略報』

1997、『平成８年度大阪市都市整備局による長吉六反第１住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG96－79)略報』

1998a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅰ

1998b、『平成９年度大阪市都市整備局による長吉六反第１住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG97－41)完了報告書』
1999、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ
2000a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅲ
2000b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XV
2001a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅳ
2001b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XVI
2002a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅴ
2002b、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅸ
2003a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅵ
2004a、『長原遺跡発掘調査報告』XI
2004b、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅶ
2005a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅷ
2005b、『長原遺跡発掘調査報告』XII
2006a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅸ
2006c、『長原遺跡発掘調査報告』XV
2007、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅹ
2008a、『長原遺跡発掘調査報告』XVI
2008b、『長原遺跡発掘調査報告』XVII
2008c、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』XI
2009、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』XII
大阪文化財センター1980、『亀井・城山』
1986a、『城山(その１)』
1986b、『城山(その２)』
1986c、『城山(その３)』
垣見俊弘・加藤碩一1994、『地質構造の解析―理論と実践―』　愛智出版
狩野謙一・村田明広1998、『構造地質学』　朝倉書店、p.298
古代の土器研究会1992、『古代の土器１　都城の土器集成』
小山正忠・竹原秀雄1996、『新版　標準土色帳』17版　日本色研事業株式会社
佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.102－114
1995、「大阪市内における中世集落の動向の一例－中国製磁器の出土傾向を中心に－」：日本中世土器研究会『中世土器の基礎研究』XI、pp.45－54
寒川旭2007、『地震の日本史』　中公新書、p.268
高橋工1999a、「長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期～飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動態」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.79－106
1999b、「奈良時代以降の長原遺跡東北地区」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.123－127
高橋工・杉本厚典・大庭重信・絹川一徳2000、「長原遺跡東北地区の基本層序」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地

区発掘調査報告』Ⅲ、pp.10－11
田辺昭三1981、『須恵器大成』 角川書店
趙哲済1995、「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.41－44
2001、「長原遺跡の地層」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XVI、pp.7－28
2003、「大阪平野のおいたちと人類遺跡」：日本第四紀学会2003年大阪大会実行委員会編『大阪100万年の自然と人のくらし－普及講演会資料集－』、pp.1－16
寺沢薫・森井貞雄1989、「河内地域」：『弥生土器の様式と編年』 木耳社
村元健一2003a、「長原遺跡東北地区の基本層序」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅵ、pp.9－18
2003b、「長原遺跡とその周辺における古代の様相」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅵ、pp.86－100
八尾市文化財調査研究会2000a、「Ⅴ 太子堂遺跡第7次調査（TS97－7）」：『（財）八尾市文化財調査研究会報告』66、pp.59－73
2000b、「Ⅵ 太子堂遺跡第8次調査（TS98－8）」：『（財）八尾市文化財調査研究会報告』66、pp.75－93
Woodcock, N.H. and Fischer, M. 1986, Strike－slip duplexes. Jour. Structural Geol., 8, pp.725－735

あ と が き

長原遺跡東部地区の発掘調査報告書は今回で13冊を数える。当地区では遺跡が地中深く埋没することから、当初、手探りで開始した調査であったが、数多くの調査を積み重ねることにより、近年では遺跡の具体的なイメージが把握できるようになってきた。

今回の調査では、弥生時代の集落跡や、祭祀関係の遺物を多く含む奈良時代の河川を検出した。これらは、これまでの調査でも確認されていたもので、初めての発見というわけではない。しかしながら、今回の調査成果を付け加えることにより、これまでの知見を追認したり、修正することが可能となるのである

遺跡の実態を正確に復元するためには、仮説と検証を繰り返し行わねばならず、より多くの発掘調査の積み重ねが必要である。その成果は、多くの人々により共有され、多方面からの検証を加えていかねばならない。

本書が今後の調査・研究の土台となることを願う次第である。

（趙哲済）

索　引

い　石槍……25
か　瓦器……9,33
　火山灰……14
　滑石製模造品……5,29
　韓式系土器……23,29,38,51
く　杭……23,25,45,47,50
け　畦畔……33,37,42
さ　祭祀……5,6,31,32,37,42,44,51
　サヌカイト……5,21,25
し　地震……6,14,15,23,45,46,50,52
　自然堤防……1,37
　自然流路……6,21,23,32,36,37,38,42,44,51
　城山(遺跡)……2,21,37,38,51
　縄文土器……7,14,23,51
す　水田……2,4,5,6,7,33,38,42,44,51
　水平断層……14,15,45,46,47,48,49,50,52
　須恵器……9,14,19,23,25,36,51
せ　石鏃……21
な　長原遺跡……1,2,3,4,5,6,7,9,13,37,39,40,41,42,43,45,51
た　竪穴建物……6,7,21,22,38,51
て　出戸……1,6,8,37
と　動物遺体……23,31,37,42,51
　土壙……5,7,15,19,21,22,37,38,51
は　土師器……9,14,19,21,23,30,33,51
　柱穴……7,1519,21,38,45,50
　畠……6,7,38
ひ　肥前陶器……9,36
へ　平城宮土器……29,31
ほ　方形周溝墓……7,21,37,38,51
　紡錘車……29
　墨画土器……6,31,32,37,42,51
　掘立柱建物……2,4,5,7,15,21,37,51
み　溝……5,6,7,9,15,21,22,36,37,38,42,51
や　弥生土器……14,15,18,19,21,23
ろ　六反……1
わ　和同開珎……6,31

Archaeological Report of the Eastern Sector of Nagahara Site in Osaka, Japan

Volume XIII

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in fiscal 2007

December 2009

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SB: Building
SD: Ditch
SK: Pit
SP: Posthole or Small Pit
SX: Other feartures
NR: Natural river

CONTENTS

Foreword
Explanatory notes

Chapter I Site environment and background of research 1
S.1 Geographical setting of the Nagahara site and previous investigation 1
1) Geographical setting of the Nagahara site and investigation site 1
2) Previous investigation 1
S.2 Progress and outline of research 8

Chapter II Investigation results 9
S.1 Stratigraphy 9
S.2 Features and artifacts of the Yayoi and Kofun period 15
1) Feature and artifacts of the 12th layer 15
2) Land usage before the Kofun period 21
S.3 Features and artifacts of the Nara period 23
1) Feature and artifacts of the 11th layer 23
2) Investigation site in the Nara period 32
S.4 Features and artifacts of the Heian period and later 33
1) Artifacts from the 10th layer 33
2) Featurs discovered under the 9th layer 33
3) Artifacts from the 9th layer 33
4) Featurs discovered on the top of 9th layer 33
5) Artifacts from the 2nd layer 36
6) Investigation site in the Heian period and later 36

Chapter III Examination of feature and artifacts 37
S.1 Investigation site and surrounding area in the Yayoi to Nara period 37
1) Introduction 37
2) The Middle Yayoi period 37
3) The Late Yayoi period 38
4) The Middle Kofun period 38
5) The Late Kofun to Asuka period 42
6) The Nara period 42
S.2 The horizontal fault in stratigraphy 45
1) Form of the horizontal fault 45
2) Displacement in the horizontal fault 45
3) Transformation of microstructure in the horizontal fault 47
4) The origin and period of the horizontal fault 50

Chapter IV Conclusion of investigation results 51

References and Bibliography 53

Postscript and Index

English Contents

Reference Card

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ながはらいせきとうぶちくはっくつちょうさほうこく13
書　　名	長原遺跡東部地区発掘調査報告XIII
編 著 者 名	平田洋司・趙哲済
編 集 機 関	財団法人　大阪市文化財協会
所　在　地	〒540－0006　大阪市中央区法円坂１－１－35　TEL.06－6943－6833
発 行 年 月 日	西暦　2009年12月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながはら 長原遺跡	おおさかしひらのく 大阪市平野区 ながよしでとちょうめ 長吉出戸８丁目	27126	－	34° 36′ 15″	135° 34′ 25″	20070910 ～ 20080208	250㎡	長吉東部地区土地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
長原遺跡	集落	弥生時代	掘立柱建物・土壙	弥生土器・石器
		古墳時代	土壙	土師器・須恵器・韓式系土器
		奈良時代	自然流路	土師器・須恵器・墨画土器・和同開珎・動物遺体
		平安～江戸時代	畦畔・溝	土師器・須恵器・瓦器・国産陶器

要　約

本書は、長原遺跡において2007年度に行った発掘調査の成果を報告するものである。

弥生時代では、中期後半の掘立柱建物２棟のほか土壙を確認し、当該期の集落が拡がっていることを追認した。

古墳時代では、中期の土壙を検出した。また、後述の流路から土師器・須恵器・韓式系土器などが出土した。

奈良時代では、前半の自然流路から、多くの土器類とともに、墨画土器・ウマやウシなどの動物遺体などが出土し、水辺の祭祀が行われていたことが判明した。

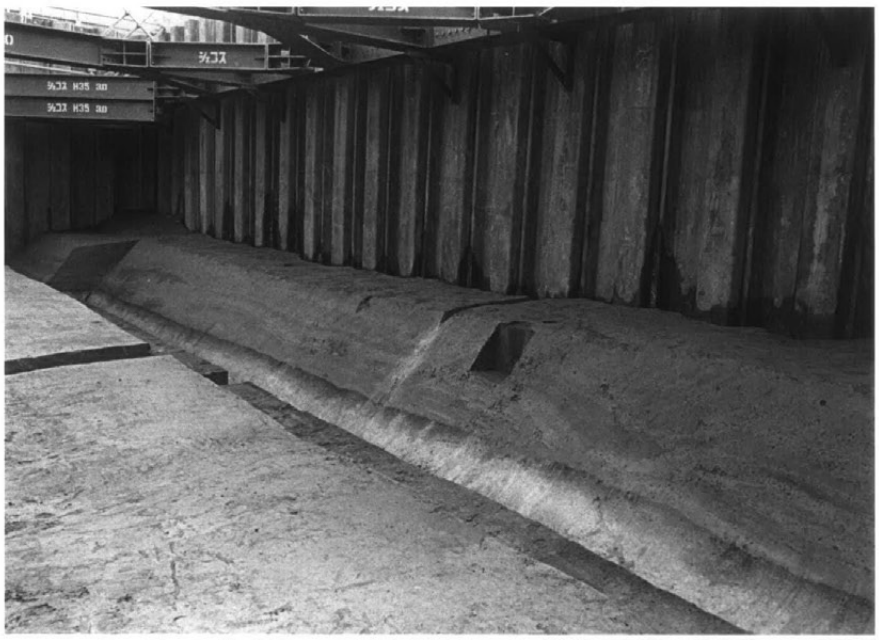
平安時代以降は作土層や畦畔が検出され、耕作域として利用されている。

また、地層の水平断層など地震の痕跡が確認されている。

図　　版

図版一　地層断面

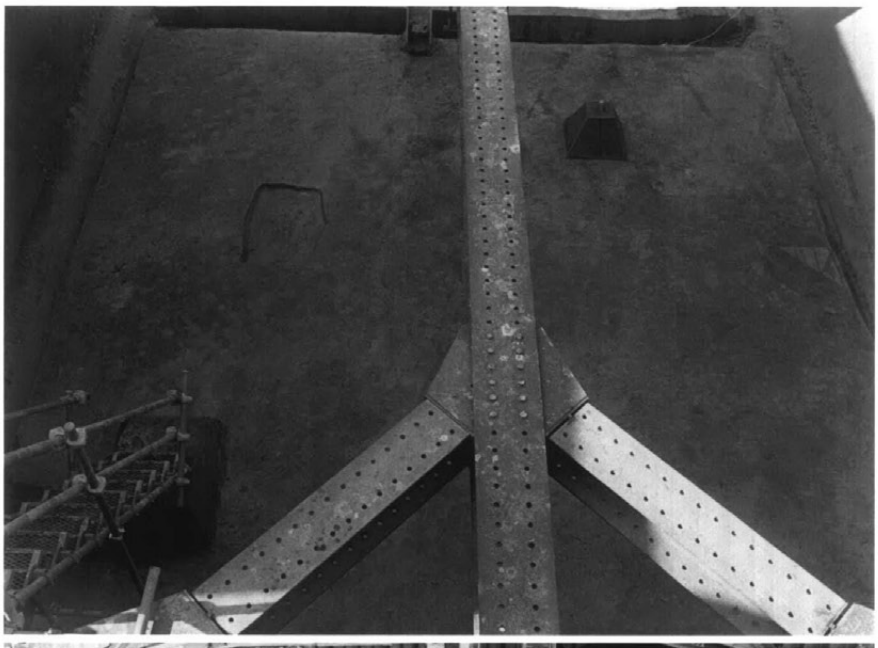
南壁12層以下
（北西から）



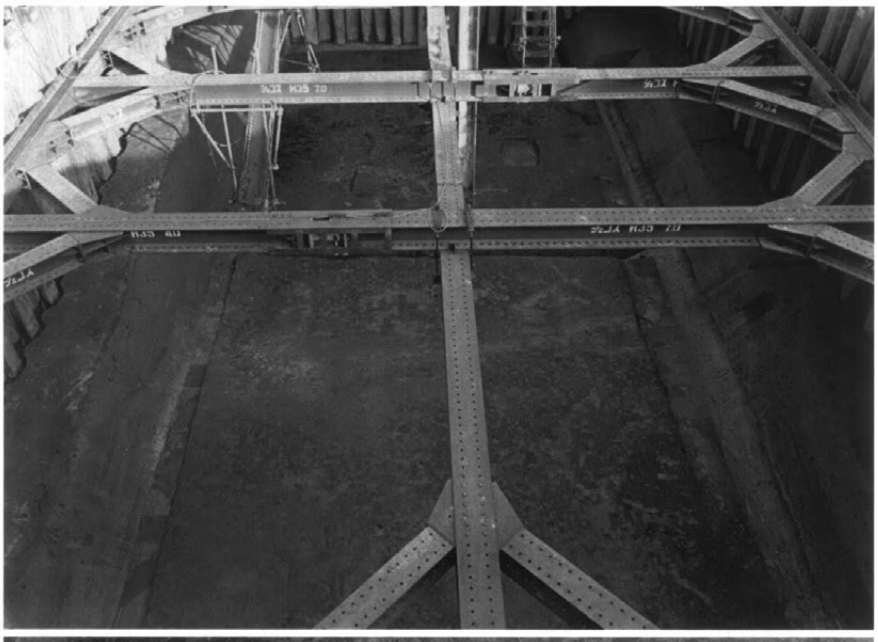
南壁11層
（北西から）

南壁10層以上
（北西から）

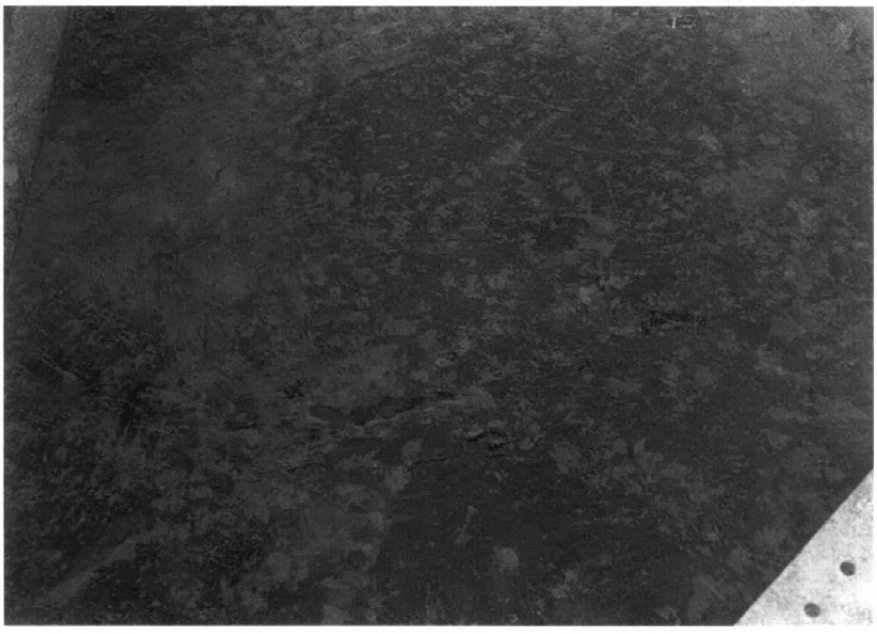
図版二　古墳時代以前の遺構（一）



第14層上面東半部
検出状況
（東から）



第13層上面
検出状況
（東から）

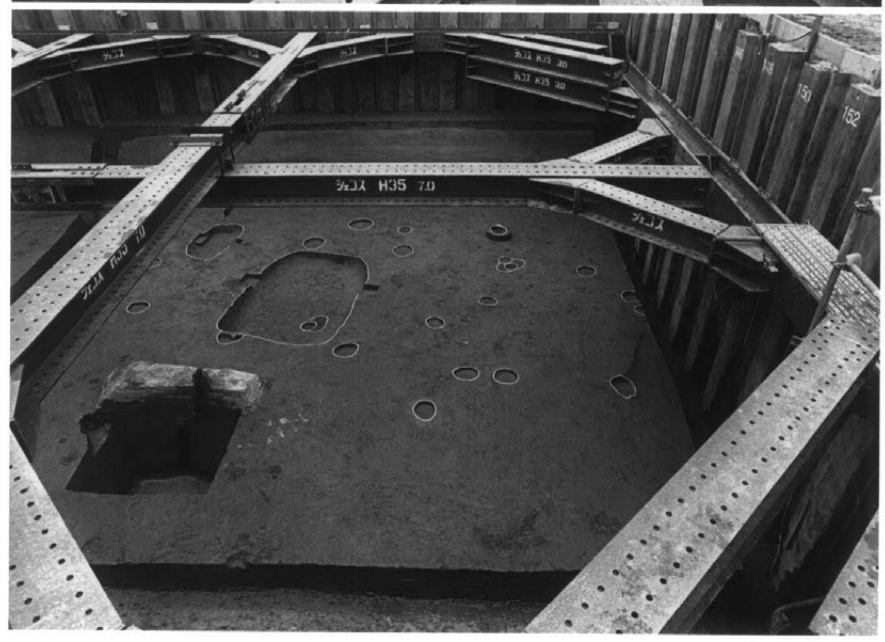


第13層上面踏込み
検出状況
（東から）

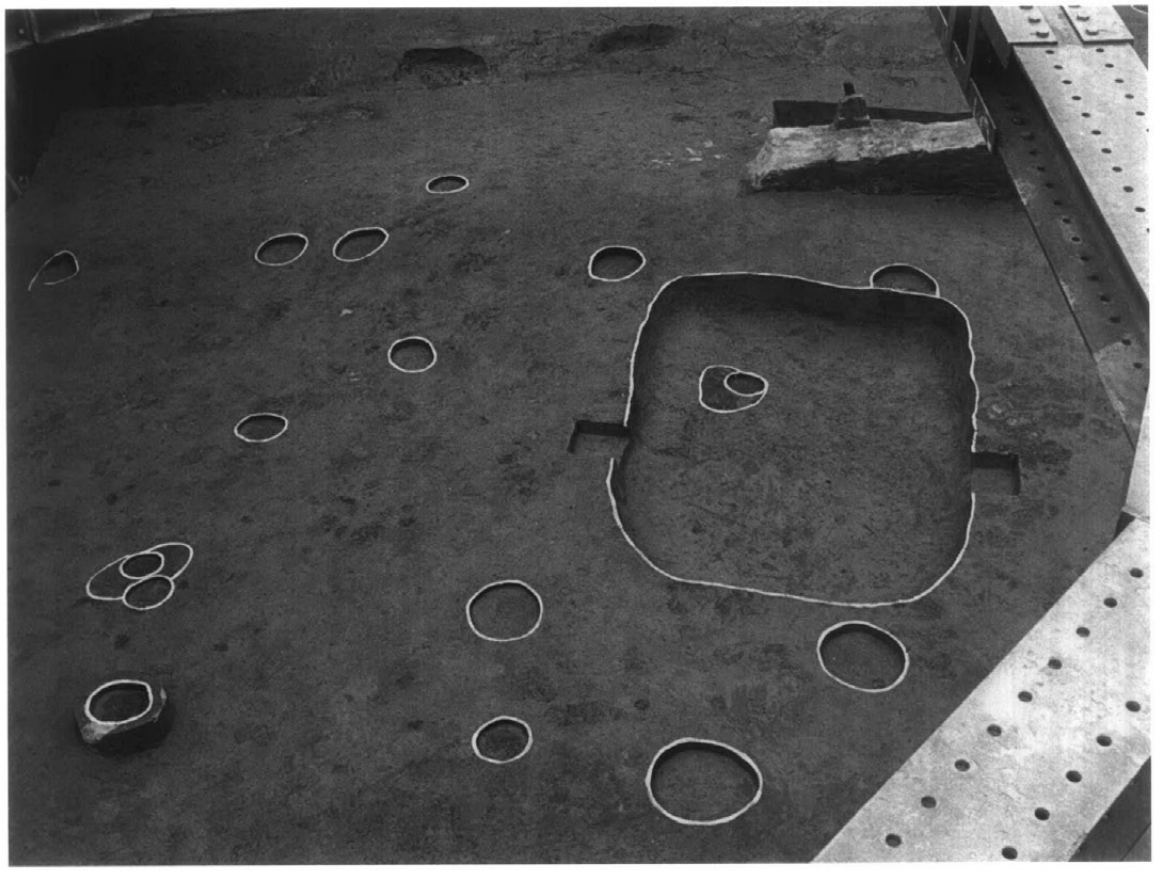
第12層上面
検出状況
（西から）

第12層上面西半
検出状況
（南から）

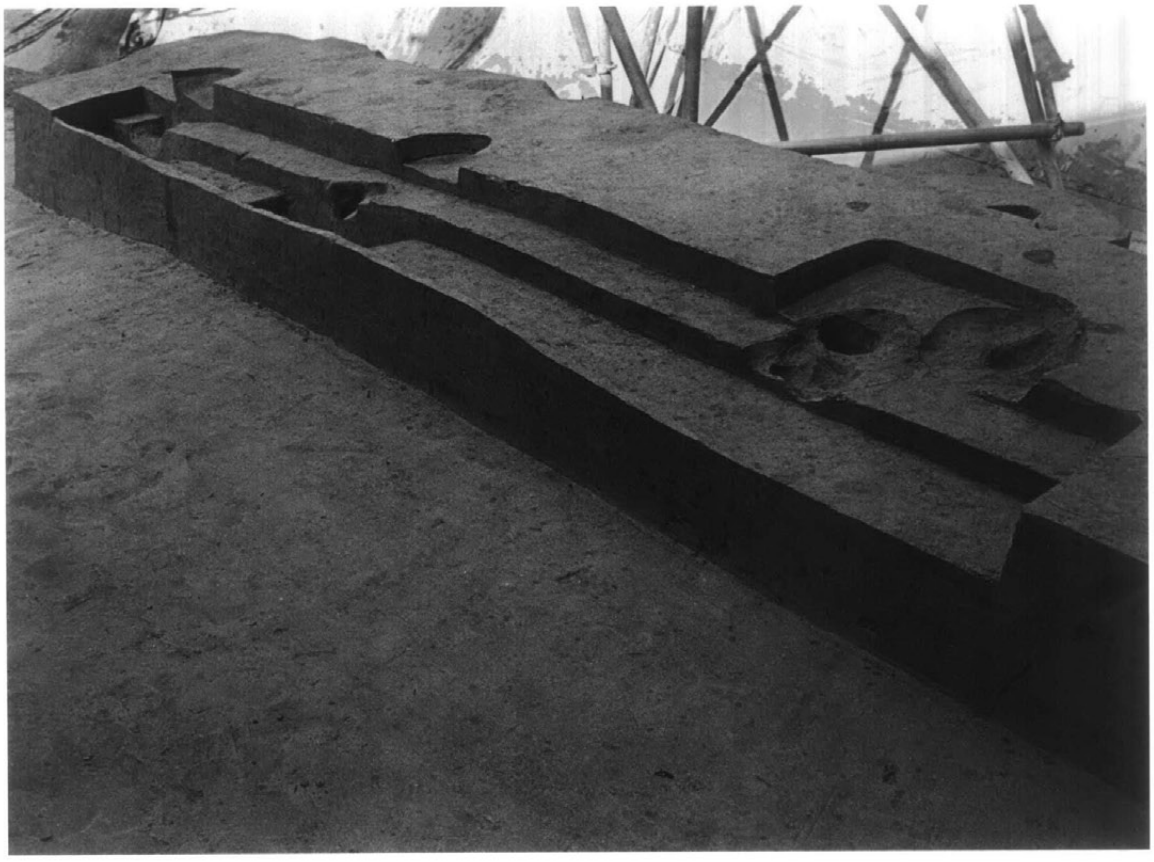
第12層上面東半
検出状況
（南から）



図版四　古墳時代以前の遺構（三）



SB1201周辺（北から）



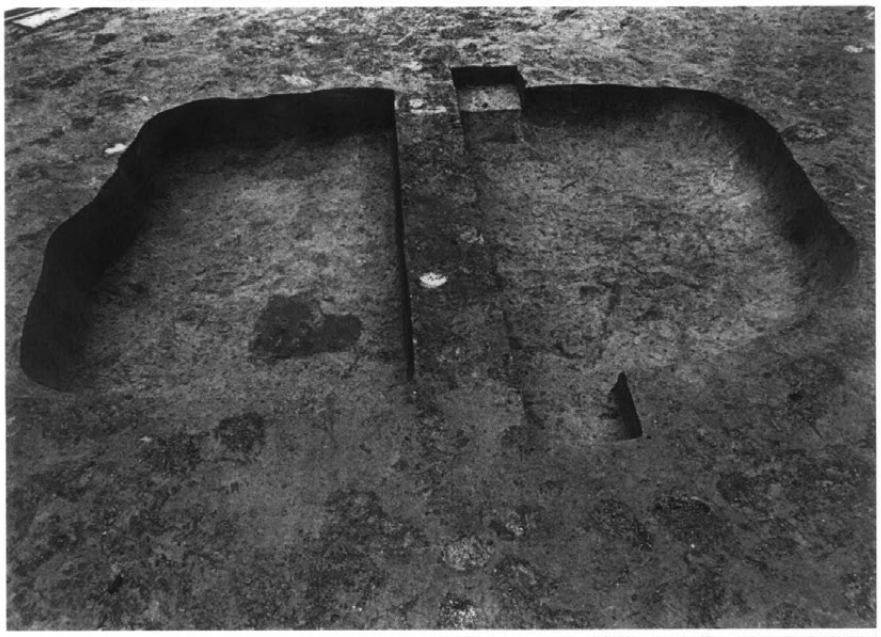
SB1201北側柱列、地震による水平断層（南東から）

SB1202検出状況
（南から）

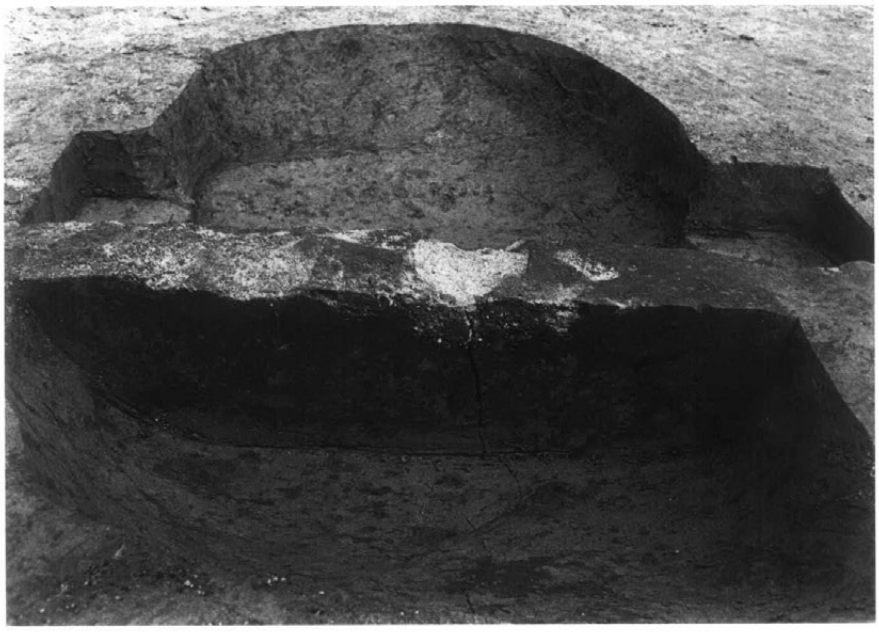
SB1202の柱穴SP1209、地震による水平断層（南から）

図版六　古墳時代以前の遺構（五）

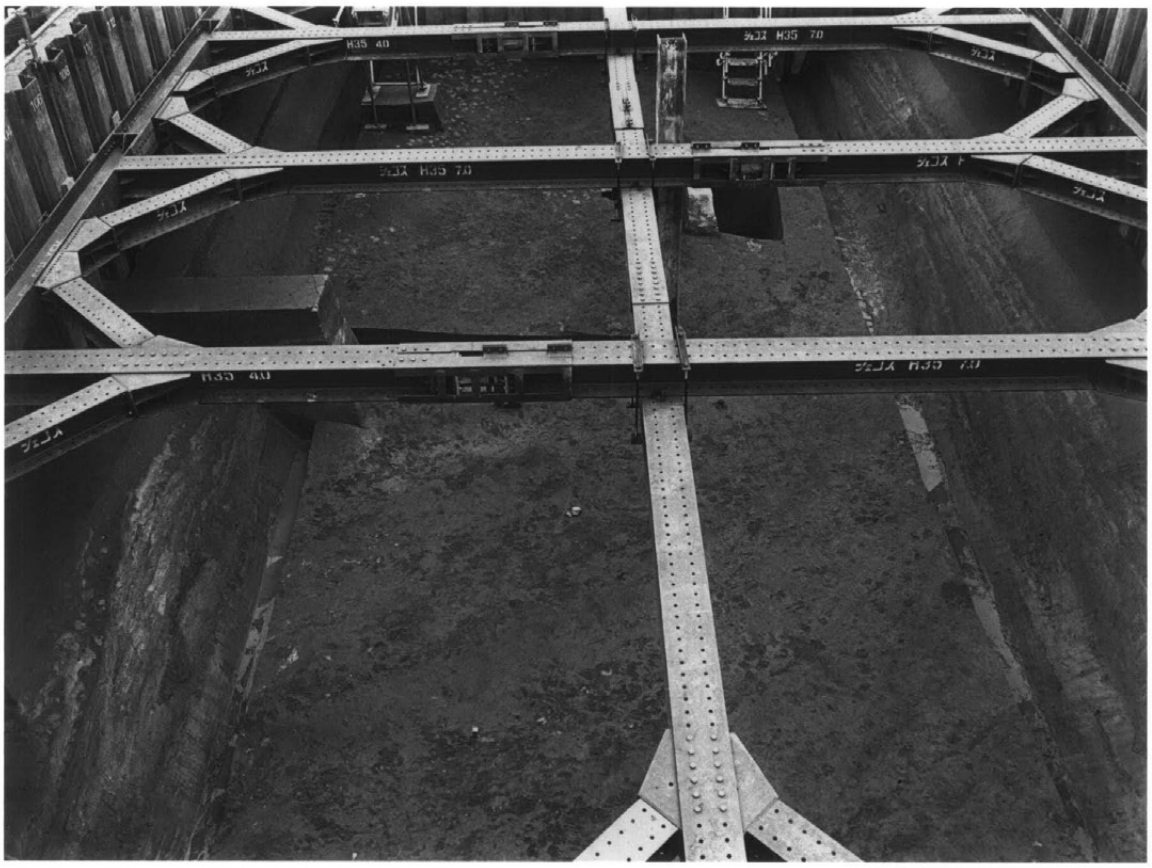
SK1201
（北西から）



SK1202
（東から）



SK1203
（南から）



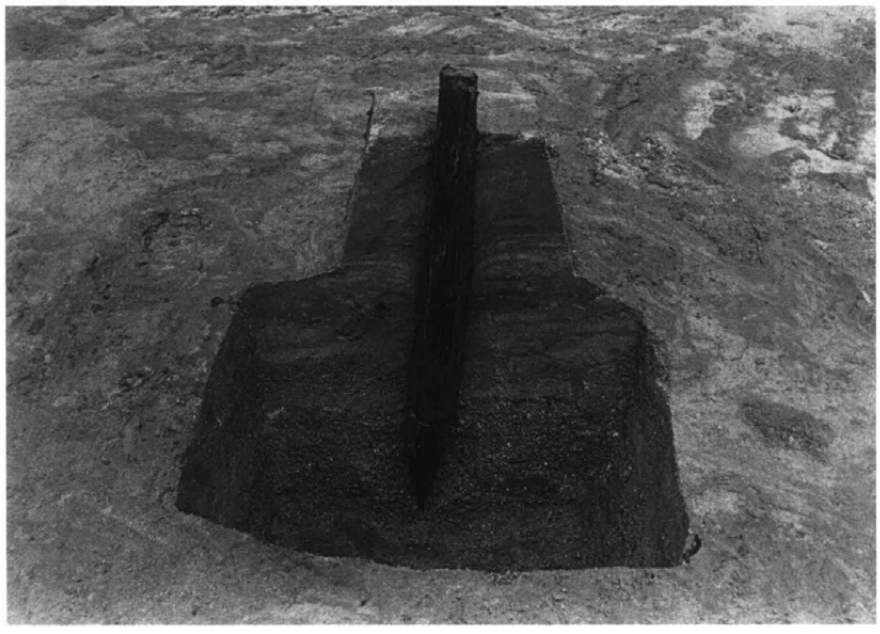
NR1101（西から）

NR1101西半（南から）

図版八　奈良時代の遺構（二）

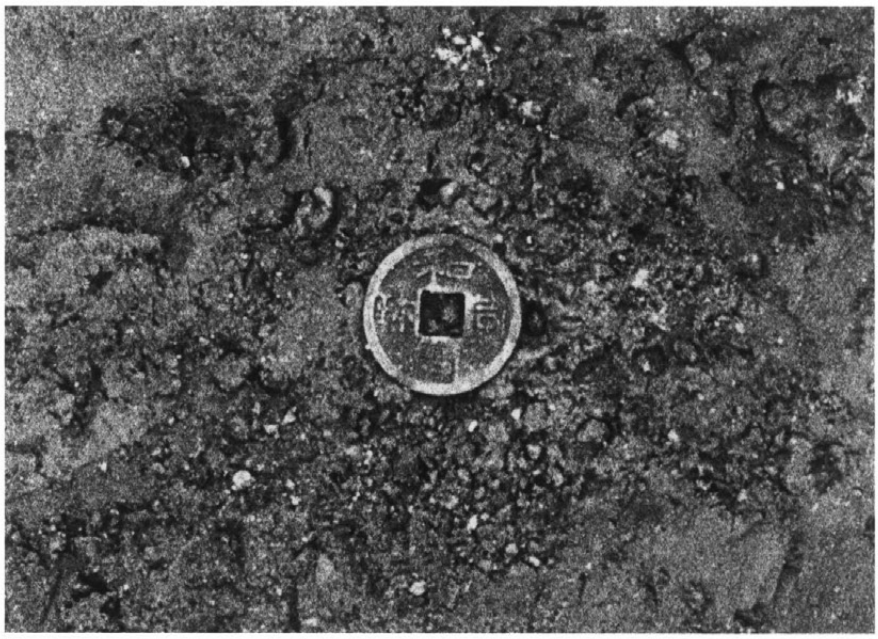
NR1101内
杭１
（南から）

NR1101内
杭１の地震による
水平断層（南から）



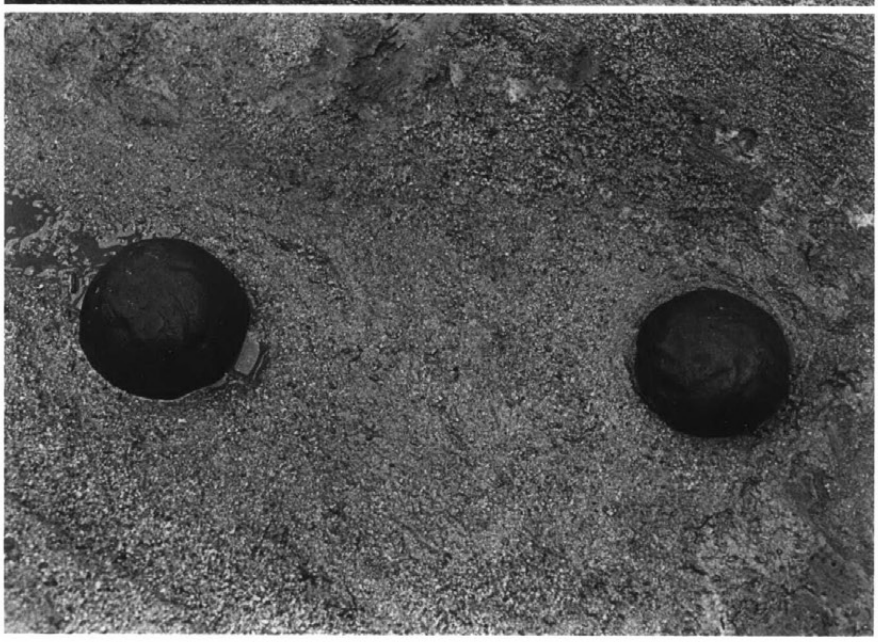
NR1101内
杭２
（南から）

NR1101
和同開珎出土状況



NR1101
土器出土状況
（北東から）

NR1101
土器出土状況
（北から）



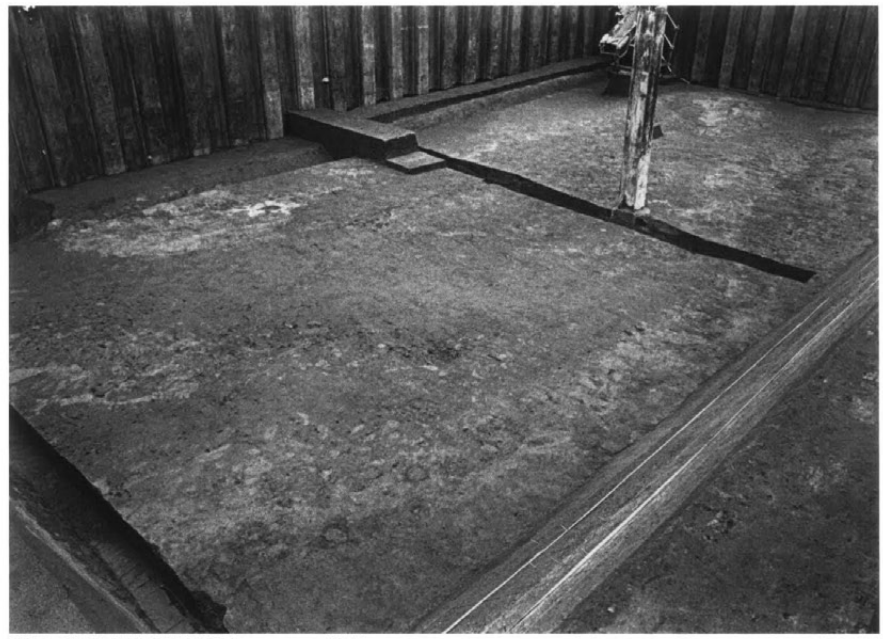
図版一〇　奈良時代の遺構（四）

NR1101
土器出土状況
（南から）

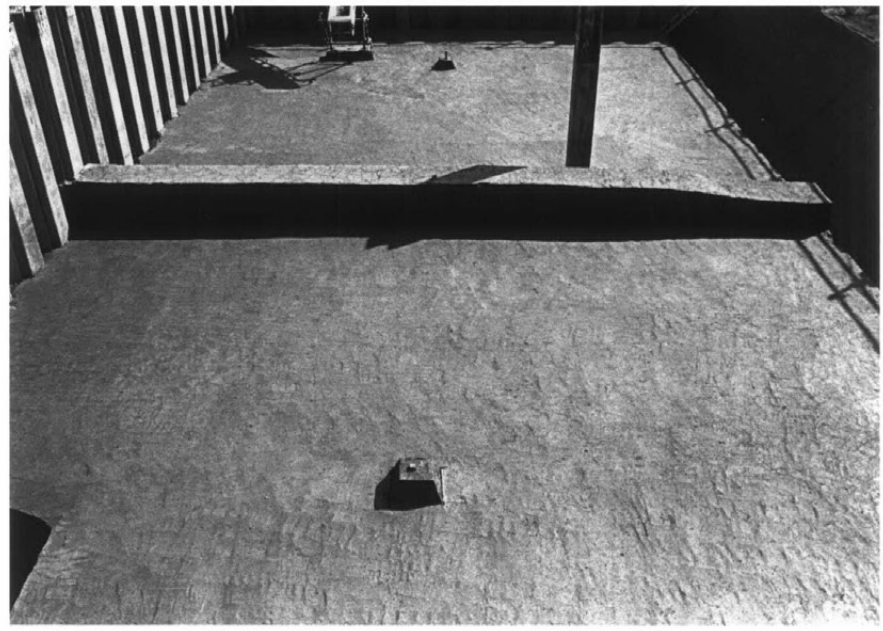
NR1101
土器出土状況
（南から）

NR1101ウマ頭骨
（西から）

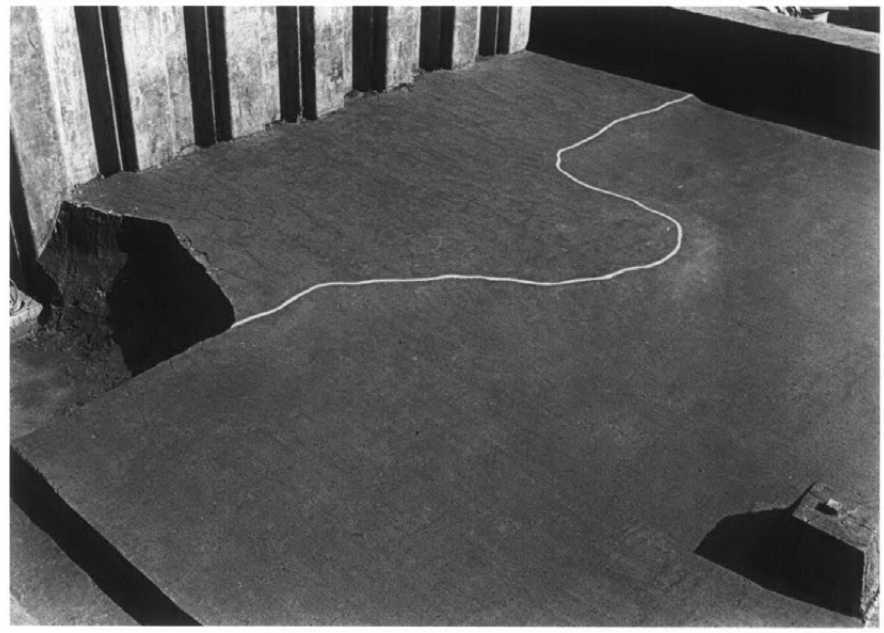
第11層上面
検出状況
（西から）



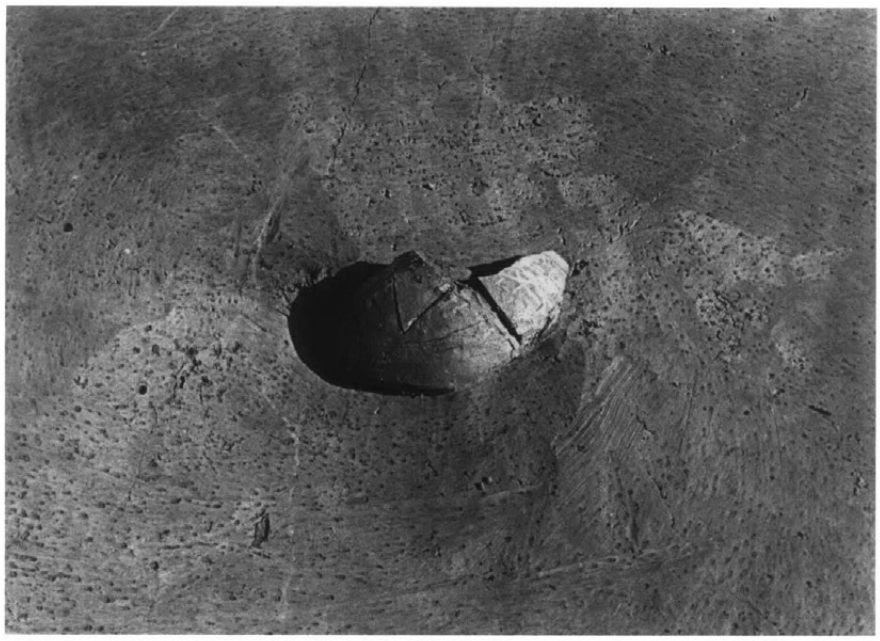
第９層下面
検出状況
（南から）



第９層下面の高まり
（南西から）

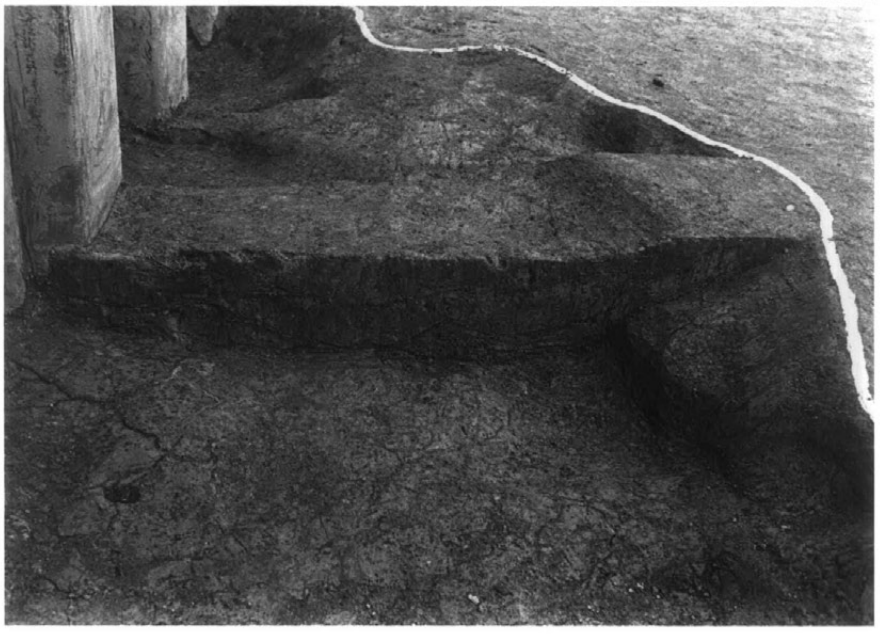


図版一二　平安時代以降の遺構（二）



第９層内
遺物出土状況
（南から）

第４層上面
検出状況
（南西から）

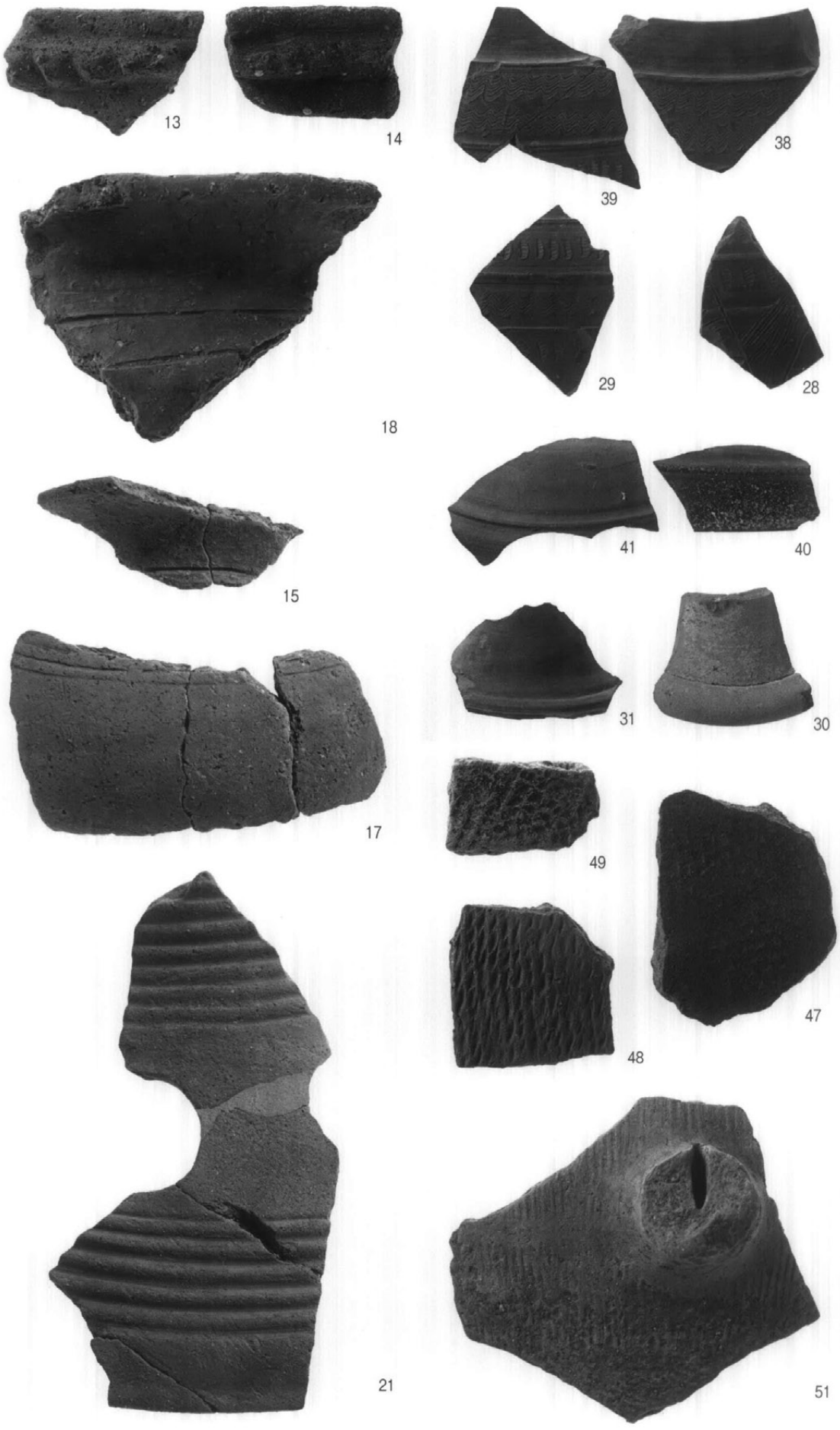


第３層上面
SD301断面
（西から）

図版一三　弥生～古墳時代出土遺物・NR1101出土遺物（一）

SB1201(1)、SK1201(2～4・6・7)、SK1203(8)、NR1101(17・18・25)

図版一四　NR1101出土遺物（二）



NR1101(13～15・17・18・21・28～31・38～41・47～49)

図版一五　NR1101出土遺物（三）

43

57

36

59

63

45

58

66

67

54

53

NR1101(36・43・45・53・54・57～59・63・66・67)

図版一六　NR1101出土遺物（四）

90

90

87

87

86

86

89

71

NR1101(71・86・87・89・90)

図版一七　NR1101出土遺物（五）・平安時代以降の遺物

83

91

76

70

52

92

95

103

97

99

NR1101(52・70・76・83・91・92)、第10層(95・103)、第９層(97・99)

大阪市平野区　長原遺跡東部地区発掘調査報告XIII
ISBN 978-4-86305-028-0
2009年12月28日　発行©
編集・発行　財団法人　大阪市文化財協会
〒540-0006　大阪市中央区法円坂1-1-35
(TEL.06-6943-6833　FAX.06-6920-2272)
http://www.occpa.or.jp/
印刷・製本　アインズ株式会社
〒540-0041　大阪市中央区北浜2-1-14

Archaeological Report of the Eastern Sector of Nagahara Site in Osaka, Japan

Volume XIII

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in fiscal 2007

December 2009

Osaka City Cultural Properties Association

Archaeological Report of the Eastern Sector of Nagahara Site in Osaka, Japan

Volume XIII

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in fiscal 2007

December 2009

Osaka City Cultural Properties Association